

殿島団地造成事業
—緊急発掘調査報告—

殿島城跡・宮場間様
十三塚遺跡

1987

殿島城跡遺跡発掘調査団
長野県住宅供給公社

殿島団地造成事業
—緊急発掘調査報告—

殿島城跡・宮場間様 十三塚遺跡

1987

殿島城跡遺跡発掘調査団
長野県住宅供給公社

序

中世の城跡に関係した遺跡は各地域にあり政治・経済・文化・軍事等々の各方面からみて、重要な担い手でありました。それは、各々の地域での中世史をひもとくのに好資料を提供してくれております。

近年、我が国の経済は急激な発展を遂げ、この動きは我が伊那市でも同様で、市内にも新しい開発の気運が起こってきております。このような世の動きの中で、貴重な中世の遺跡を保存し、後の世の人々に残しておくことは現代に生きる我々の責務と強く痛感致す次第であります。

殿島城跡は長野県住宅供給公社によって開発される宅地造成に伴って発掘調査が実施されました。調査は長期間に及び、途中、梅雨、猛暑に悩まされる時しばしばありました。この間、調査に努力精励された団長友野良一先生、調査員各位、作業員各位、また調査進行に多大な便宜をはかって下さった長野県住宅供給公社職員一同、伊那市開発公社及び伊那市建設部職員一同に対し、心より深い感謝を申し上げますとともに、厚く御礼を申し上げます。

最後に、発掘調査によって得られた成果については、今後大いに活用し、学問向上に努力してまいりたいと願っております。

昭和62年12月

伊那市教育委員会

教育長 宮下 安人

第 I 章 まえがき (殿島城跡・宮場間様十三塚遺跡の環境)

第 I 節 位 置

殿島城跡遺跡は長野県伊那市東春近中殿島にある。宮場間様十三塚遺跡も東春近中殿島にある。殿島城跡遺跡に至るまでの経路の最短距離は、J R 飯田線沢渡駅で下車して、北へ50m程行くと踏切がある。これを渡って北へ200m程に三叉路があり、ここを左折して、沢渡繁華街を通過して、北はずれの信号のある交差点を右折する。右折地点から東へ30m程行くと、天竜川が南北に流れ、殿島橋が架かっている。橋を渡り、県道沢渡・高遠線を東へ1km位行った左手に伊那市立春富中学校校舎の白い建物が立ち並んでいる。中学校のある地点から200m位東へ行くと、十字の交差点があり、この一角を伊那市役所東春近支所が占めている。この付近から県道沢渡・高遠線は傾斜を持ちはじめている。つまり河岸段丘崖面に道路を開削したので、このような状態になったのである。この道路がやや平坦面にさしかかる東側一帯の山林の中に宮場間様十三塚遺跡が存在している。十三塚の南側に山林地帯をぬうようにして道が通っている。この道が水田地帯にかかる位置で右折して300m位南へ行った付近が殿島城跡遺跡である。

第 2 節 地形・地質

この節については殿島団地地質調査委託報告書、昭和62年6月刊、斎藤工業株式会社に全面的に依存して記すことによる。

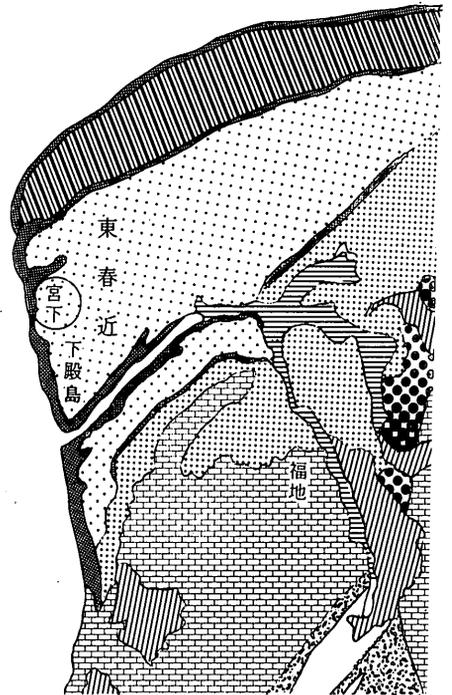
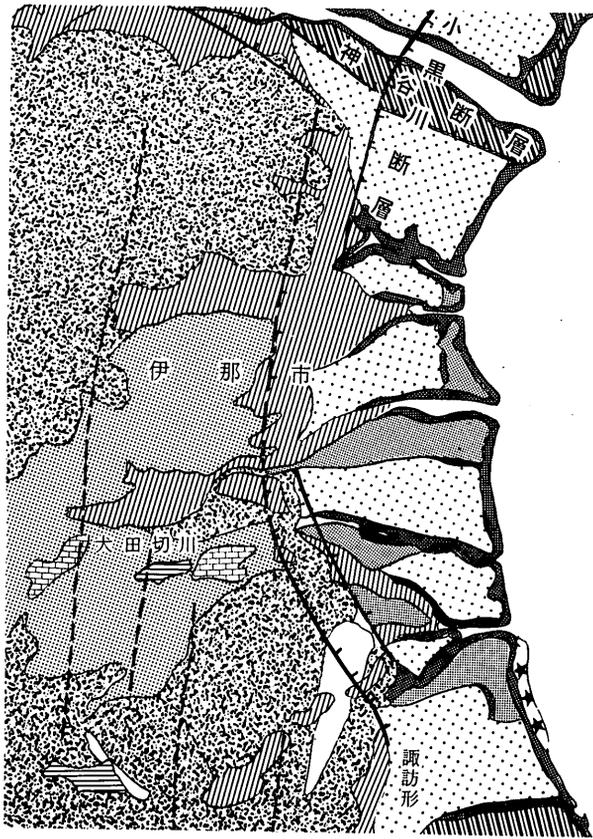
殿島団地造成地域は三峰川流域の末端部に該当し、竜東左岸第1河岸段丘面上に位置している。河岸段丘面上は主に三峰川の山地より運搬された複合堆積物によって構成され、表面を広くローム層で被覆されている。

段丘を構成する地質は第四紀更新世段丘堆積物の天竜礫層よりなる。天竜川左岸に分布する福島段丘面に相当し、主に後背地よりもたらされた中へ古生層の粘板岩、硬砂岩、チャート、緑色岩類の円礫からなり、マトリックスはシルトへ細砂を主体とした厚い堆積層を形成する。礫層を覆ってロームが概ね層厚2mで広く分布する。ロームは茶褐色を呈し、総じて微粒の均質な粘性土であるが、下部に30mm大の円礫が点在する。

次に殿島団地敷地内の考察的な地形・地質を述べてみることにする。

粘土地盤一地表より2.2mの深さに堆積が認められ、微粒で粘性が大きい均質な茶褐色ロームからなり、最下部で30mm大の円礫を混入する。

礫質地盤一本層は砂礫を主体とする段丘礫層から成り、ローム以深にほぼ水平で厚い堆積物を形成する。土質柱状は、粘板岩、硬砂岩、チャート、緑色岩などの硬い礫の混入が多い。段丘礫層は礫の粒度分布の不均一性、細粒分のレンズ状挟在など扇状地特有の堆積状態が推定され、中に30～60cm大の玉石の点在が推定される。



凡 例

| | | | |
|--|--|--|------------------------|
| 氾濫面 Floodplain | | a 河川堆積物 泥・砂・礫 Gravel, sand and clay | |
| 低地 Later alluvial surface | | h 氾濫面に近い河川堆積物 泥・砂・礫 崖錐性小扇面の堆積物 Gravel, sand and clay | |
| 崖錐面 Talus surface | | a1 山麓性崖錐面の堆積物 泥・砂・礫 テフラのまじる崖錐性~斜面性堆積物 Gravel, sand, clay and volcanic ash | |
| 低位段丘面II(氾濫面に近い) Lower terrace surface II | | a2 } テフラ(赤土)ののっていない低い段丘面 | 地形面で区分する |
| 低位段丘面II Lower terrace surface II | | a } 風成テフラがわずかにのこる。 (赤土ののる最低位の面) | |
| (低位段丘面I 下位 新期扇状地) 下位 Lower terrace surface I | | b } 新期テフラの上部のみが風成層としての。 (一部に、新期テフラ下部Pm-4が風成でのる) | |
| (低位段丘面I 上位 新期扇状地) 上位 Lower terrace surface I | | b1 } 御岳第1軽石層(Pm-1)より上の中期テフラから風成層としての。 いわゆる「洪積段丘」とよばれてきた台地をつくる面。 | |
| (中位段丘面 下位 中期扇状地) 下位 Middle terrace surface | | c2 } 御岳第1軽石層(Pm-1)より上の中期テフラから風成層としての。 いわゆる「洪積段丘」とよばれてきた台地をつくる面。 | |
| (中位段丘面 上位 中期扇状地) 上位 Middle terrace surface | | c } 御岳第1軽石層(Pm-1)より上の中期テフラから風成層としての。 いわゆる「洪積段丘」とよばれてきた台地をつくる面。 | |
| 段丘堆積層、扇状地堆積層 Terrace deposit and alluvial fan deposit | | 泥・砂・礫(火山灰・泥炭) Mud, sand, and gravel (ash and peat) | すべての扇状地堆積物・段丘堆積物を一括する。 |
| 太田切花崗岩 Otagiri granite | | G0 白雲母黒雲母アダメロ岩および黒雲母花崗閃緑岩 細粒~中粒, 弱片状または塊状 Muscovite-biotite adamellite and biotite granodiorite | |
| 落合花崗岩 Ochiai granite | | G1 黒雲母アダメロ岩 粗粒, 塊状, 優白質 Biotite adamellite 部分的に花崗閃緑岩 | |
| 黒雲母帯 Biotite zone | | B 黒雲母帯 | |
| 黒青石帯 Cordierite zone | | C 黒青石帯 | |

| 標尺 m | 標高 m | 深さ m | 層厚 m | 現場観察記録 | | | |
|---------|---------|---------|---------|--------|------|-----------------|---|
| | | | | 土質記号 | 土質名 | 色調 | 記事 |
| | 662.55 | 0.35 | 0.35 | | 表土 | 黒褐色 | 木の根混りシルト |
| 1 | | | | | ローム層 | 茶褐色 | 均質で粘性大 下部に30mm大の円礫あり |
| 2 | 660.70 | 2.20 | 1.85 | | | | |
| 3 | | | | | 砂礫層 | 暗灰色 ↓ 茶灰色 | 径20~50mm大のチャート、粘板岩、硬砂岩の円礫を多く含む。 基質は中~細砂を主体とし、下部でシルト優勢。 |
| 4 | | | | | | | |
| 5 | | | | | | | |
| 6 | | | | | | | |
| 7 | | | | | | | |
| 8 | | | | | | | |
| 9 | | | | | | | |
| 10 | 652.78 | 10.12 | 7.92 | | | | |
| 11 | | | | | | | |
| 12 | | | | | | | |
| 13 | | | | | | | |
| 14 | | | | | | | |
| 15 | | | | | | | |

土層柱状図（殿島団地敷地内北東部）

| 標 尺 m | 標 高 m | 深 さ m | 層 厚 m | 現 場 観 察 記 録 | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|--|------|-----------------|-------------------------------------|
| | | | | 土質記号 | 土質名 | 色調 | 記 色 事 |
| | 655.10 | 0.40 | 0.40 |  | 表 土 | 黒褐色 | 水田耕土 |
| 1 | | | |  | ローム層 | 茶褐色 | 均質で粘性あり 下部で30mm大の円礫が点在 |
| 2 | 653.40 | 2.10 | 1.70 | | | | |
| 3 | | | |  | 砂礫層 | 暗灰色 ↓ 茶灰色 | 径20~80mm大のチャート、粘板岩、硬砂岩、緑色岩の円礫を多く含む。 |
| 4 | | | | | | | |
| 5 | | | | | | | |
| 6 | | | | | | | |
| 7 | | | | | | | |
| 8 | | | | | | | |
| 9 | | | | | | | |
| 10 | 645.42 | 10.08 | 7.98 | | | | |
| 11 | | | | | | | |
| 12 | | | | | | | |
| 13 | | | | | | | |
| 14 | | | | | | | |
| 15 | | | | | | | |

土層柱状図 (殿島団地敷地内南西隅)

第3節 周辺遺跡との関連

今回、発掘調査を実施した殿島城跡遺跡及び宮場間様十三塚遺跡は伊那市東春近中殿島にあった。東春近地区内には現在、48か所の遺跡が確認されており、その内訳及び分布状態は本頁より掲載してある。

当地方はかつて、約千年位前に編纂された「倭名類聚抄」の中に記された伊那郡福智（布久知）の郷の存在した地域であると、今回の発掘調査の成果から確証づけられると思われる。「福智郷」の一般的な定説を記すと次のようになる。富県福地付近を中心にして自然地形などで区画されたおよそ50戸の範囲をさしていると思われ、その範囲は北は三峰川、西は天竜川が境となり、河南、東伊那、中沢までが含まれていると考えられている。

貝沼の角地前から緑釉陶器の皿が発見されている点などからして同地区は、一時期福地郷の中心ではなかったのではないだろうか、遺跡内訳表の中で古墳群の名称と数を期してみると次のようになる。本城古墳群 8基 火沢古墳群 4基 古寺上古墳群 5基 宮ノ上古墳群 8基 瀬戸古墳群 3基 洞古墳群 3基 老松場古墳群 7基

今までに東春近地区で発掘調査を実施した遺跡としては上原遺跡があり、その成果を記すと次のようになる。中世住居跡 2軒 中世堅穴 3基 中世集石土壇 5基 中世土壇 8基が検出されている。出土遺物—内耳土器 石臼 常滑焼 砥石 凹石 古銭（大定通宝 朝鮮通宝） 青磁碗 天目茶碗 火打金具

（友野 良一）

| No. | 遺跡名 | 所在地 | 旧石器 | 縄文時代 | | | | 弥生時代 | | 古墳時代 | 奈良時代 | | 平安時代 | | | 中世 | 近世 | 備考 | |
|-----|---------|-------|-----|------|---|---|---|------|---|------|------|---|------|---|---|----|----|----|---------|
| | | | | 草 | 早 | 前 | 中 | 後 | 晩 | | 前 | 中 | 後 | 土 | 須 | | | | 土 |
| 1 | 六軒屋上墳丘群 | 〃 車屋 | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | 近世の経塚か |
| 2 | 中 原 | 〃 榛原 | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 3 | 上 原 | 〃 共栄 | | | | ○ | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | | ○ | |
| 4 | 下 原 | 〃 〃 | | | | ○ | | | | | | | ○ | ○ | | | | | |
| 5 | 市 坂 上 | 〃 車屋 | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 6 | 老 松 場 | 〃 中組 | | | | ○ | | | | ○ | ○ | | ○ | | | | | | |
| 7 | 老松場古墳群 | 〃 〃 | | | | | | | | | | | | | | | | | 円墳 |
| 8 | 宮 狭 間 | 〃 中殿島 | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 9 | 御 射 山 | 〃 〃 | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 10 | 宮場間様墳丘群 | 〃 〃 | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | 中・近世の墳墓 |
| 11 | 本 城 〃 | 〃 〃 | | | | | | | | | | | | | | | | | 円墳 |
| 12 | 殿 島 | 〃 〃 | | | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 13 | 本城西ノ堀 | 〃 〃 | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 14 | 火 沢 | 〃 下殿島 | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 15 | 火沢古墳群 | 〃 〃 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16 | 古 寺 | 〃 〃 | | | | ○ | | | | | | ○ | | | | | | ○ | |
| 17 | 古寺上古墳群 | 〃 〃 | | | | | | | | | | | | | | | | | 円墳 |
| 18 | 洞 上 | 〃 〃 | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 19 | 洞 古 墳 群 | 〃 〃 | | | | | | | | | | | | | | | | | 円墳 |
| 20 | 三 塚 | 〃 〃 | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | |

東春近北・中部地域遺跡内訳一覧表



東春近北・中部地域遺跡分布図

凡 例

1. 今回の発掘調査は殿島団地造成に伴う、緊急発掘調査報告書である。
2. この調査は、殿島団地造成事業に伴う緊急発掘で、事業は長野県住宅供給公社の委託により、殿島城跡遺跡発掘調査団が実施した。
3. 本調査は、昭和62年中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は、後日の機会にゆずることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に指名を記した。

友野良一 飯塚政美 小木曾清

◎図版作製者

●遺構及び地形

友野良一 飯塚政美 小木曾清

●土器実測図 小木曾清 飯塚政美 建石紀美子

●土器拓影 小木曾清 飯塚政美 建石紀美子

●石器実測図 小木曾清 飯塚政美 建石紀美子

◎写真撮影

●発掘及び遺構

友野良一 飯塚政美 小木曾清

5. 出土した遺物、報告書に使用した図面類、発掘時の図面類は伊那市考古資料館に保管してある。
6. 本報告書の編集は主として、殿島城跡遺跡発掘調査団があたった。

第II章 発掘調査の経過

発掘調査の経緯

殿島団地造成事業は昭和61年度当初に長野県住宅供給公社と伊那市開発公社が主体となって計画が進められていった。計画する時点で、用地内に8基の古墳の存在が確認された。この時点で8基の古墳を全て発掘調査すると、数千万円位の経費がかかるとの結論が出た。

昭和61年12月21日 現地地主境界線の確認と、用地内の測量を実施する。図面に古墳の存在箇所を図示するように願う。

昭和62年1月中旬 用地内の図面作成ができる。古墳8基は用地外から除外してもらう。用地内に遺跡が存在しそうなので、県教育委員会文化課へ連絡して現地協議をお願いする。

昭和62年1月23日 県教育委員会文化課へ職員派遣申請書を提出する。

昭和62年2月11日 県文化課指導主事が現地を訪れ、市側の関係者と協議する。それによると、殿島本城の外郭部分は分布調査を実施して、その結果によって本調査にする。本城古墳群8基は現状保存のまま残すことにする。宮場間様十三塚遺跡は発掘調査を実施することに決定する。

昭和62年3月6日付で長野県住宅供給公社理事長宮沢茂夫から伊那市教育委員会教育長宮下安人宛で住宅用地開発予定地内の埋蔵文化財分布調査の依頼がある。

昭和62年3月9日付で伊那市教育委員会教育長宮下安人から長野県住宅供給公社理事長宮沢茂夫宛で試掘調査計画書と試掘調査予算書を提出する。

昭和62年3月12日付で伊那市教育委員会教育長から長野県住宅供給公社理事長宛で、発掘調査担当者に友野良一氏を推薦する。

昭和62年3月23日付で分布調査通知を提出する。

昭和62年3月25日 長野県住宅供給公社理事長宮沢茂夫と日本考古学協会会員友野良一との間で「埋蔵文化財包蔵地分布調査委託契約書」を締結する。契約後、ただちに発掘準備にとりかかる。

昭和62年3月30日 発掘作業員に発掘調査打合わせ会通知を出す。

昭和62年4月6日 発掘作業員打合わせ会を伊那公民館にて実施する。

昭和62年4月8日 本格的な分布調査に着手する。

昭和62年5月8日 長野県文化課指導主事2名が現場を訪れ、今までの分布調査の結果からみて、本発掘調査の必要性を指摘する。

昭和62年5月14日 宮場間様十三塚遺跡の発掘調査通知を提出する。

昭和62年5月11日付で長野県教育委員会教育長から伊那市教育委員会へ、発掘調査計画書、発掘調査予算書の通知がある。

昭和62年5月28日付で伊那市教育委員会教育長から長野県住宅供給公社理事長へ本発掘調査の計画書と予算書を提出する。

昭和62年6月3日付で殿島城跡遺跡発掘調査通知を提出する。

昭和62年6月5日付で殿島城跡遺跡全面発掘調査を友野良一氏に依頼する。

昭和62年6月8日 長野県住宅供給公社理事長宮沢茂夫と日本考古学協会会員友野良一との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

昭和62年6月13日 本格的な発掘調査にとりかかった。

昭和62年7月31日 発掘調査を終了した。

昭和62年8月4日 宮場間様十三塚遺跡の発掘調査終了届を提出する。

昭和62年8月4日 殿島城跡遺跡の発掘調査終了届を提出する。

昭和62年8月5日 宮場間様十三塚遺跡の保管証及び拾得届を提出する。

昭和62年8月5日 殿島城跡遺跡の保管証及び拾得届を提出する。 (飯塚 政美)

調査の組織

| | | |
|-------|-------|------------------|
| 団 長 | 友野 良一 | 日本考古学協会会員 |
| 副 団 長 | 御子柴泰正 | 長野県考古学会会員 |
| 調 査 員 | 飯塚 政美 | 日本考古学協会会員 |
| 〃 | 小木曾 清 | 宮田村考古学友の会会長 |
| 調査事務局 | 宮下 安人 | 伊那市教育委員会教育長 |
| 〃 | 村山 幸義 | 伊那市教育委員会教育次長 |
| 〃 | 蟹沢 典人 | 伊那市教育委員会社会教育課長 |
| 〃 | 矢沢 巧 | 伊那市教育委員会社会教育課長補佐 |
| 〃 | 宮原 強 | 伊那市教育委員会社会教育課係長 |
| 〃 | 高木いづみ | 伊那市教育委員会社会教育課主事 |
| 〃 | 飯塚 政美 | 伊那市教育委員会社会教育課主任 |

調査指導

西沢 寿晃 (信州大学医学部解剖学教室)

木下平八郎 (長野県考古学会会員)

〔作業員名簿〕

柴佐一郎 大野田英 埋橋程三 大野田三千代 酒井とし子 大久保富美子 伊藤勝 蟹沢治江
上島正延 登内かずえ 小松善恵 酒井岩夫 池上大二 伊藤菊次 建石紀美子 永井貞子 澹田
次雄 野溝房子 竹松直人 澹田やすよ 唐沢登志子 井上 昌 井上俊明 池上由光

(敬称略 順不同)

殿島城跡遺跡

目 次

| | |
|---------------|--------|
| 目 次 | (3) |
| 挿図目次 | (5) |
| 図版目次 | (7) |
| 第 I 章 発掘日誌 | (9) |
| 第 II 章 遺 構 | (12) |
| 第 1 節 A 地区 | (12) |
| 第 1 項 弥生時代 | (12) |
| (1) A—2 号住居址 | (12) |
| (2) A—5 号住居址 | (13) |
| 第 2 項 奈良時代 | (13) |
| (1) A—1 号住居址 | (13) |
| (2) A—4 号住居址 | (15) |
| 第 3 項 平安時代 | (17) |
| (1) A—3 号住居址 | (17) |
| (2) A—7 号住居址 | (17) |
| 第 4 項 中 世 | (18) |
| (1) A—6 号住居址 | (18) |
| (2) A—1 号竪穴 | (20) |
| (3) A—2 号竪穴 | (21) |
| (4) A—3 号竪穴 | (22) |
| (5) A—4 号竪穴 | (22) |
| (6) A—5 号竪穴 | (22) |
| (7) A—6 号竪穴 | (23) |
| (8) A—7 号竪穴 | (24) |
| (9) A—8 号竪穴 | (24) |
| (10) A—9 号竪穴 | (24) |
| (11) A—10号竪穴 | (25) |
| (12) A—11号竪穴 | (26) |
| (13) A—12号竪穴 | (26) |
| (14) A—13号竪穴 | (26) |
| (15) A—14号竪穴 | (26) |

| | |
|--------------|------|
| (16) A—15号竪穴 | (26) |
| (17) A—16号竪穴 | (27) |
| (18) A—17号竪穴 | (27) |
| (19) 堀 址 | (28) |
| (20) 掘立柱址 | (31) |
| (21) A—1号溝址 | (31) |
| 第2節 B地区 | (32) |
| 第1項 縄文時代 | (32) |
| (1) B—7号住居址 | (32) |
| 第2項 弥生時代 | (32) |
| (1) B—1号住居址 | (32) |
| (2) B—3号住居址 | (34) |
| (3) B—5号住居址 | (34) |
| 第3項 古墳時代 | (36) |
| (1) 古墳 | (36) |
| (2) B—2号住居址 | (37) |
| 第4項 平安時代 | (38) |
| (1) B—4号住居址 | (38) |
| (2) B—6号住居址 | (38) |
| 第5項 中 世 | (40) |
| (1) B—1号竪穴 | (40) |
| (2) B—2号竪穴 | (41) |
| (3) B—3号竪穴 | (41) |
| (4) B—2号溝址 | (41) |
| 第三章 遺 物 | (43) |
| 第1節 A地区 | (43) |
| 第1項 土 器 | (43) |
| 第2項 陶器及び内耳土器 | (46) |
| 第3項 石 器 | (48) |
| 第4項 金属製品 | (48) |
| 第5項 古 銭 | (49) |
| 第6項 貝製品 | (49) |
| 第2節 B地区 | (50) |
| 第1項 土 器 | (50) |
| 第2項 陶 器 | (54) |

| | |
|----------|------|
| 第3項 石器 | (54) |
| 第4項 金属製品 | (55) |

| | |
|----------|------|
| 第IV章 まとめ | (57) |
|----------|------|

挿 図 目 次

| | |
|--|------|
| 第1図 遺構配置図 | (付図) |
| 第2図 A—2号住居址実測図 | (12) |
| 第3図 A—2号住居址埋壘炉断面図 | (13) |
| 第4図 A—3号住居址・A—4号住居址・A—5号住居址実測図 | (14) |
| 第5図 A—1号住居址実測図 | (15) |
| 第6図 A—1号住居址カマド実測図 | (16) |
| 第7図 A—3号住居址・A—4号住居址カマド実測図 | (17) |
| 第8図 A—7号住居址実測図 | (18) |
| 第9図 A—6号住居址・A—6号竪穴・A—7号竪穴・A—8号竪穴・A—9号竪穴実測図 | (19) |
| 第10図 A—1号竪穴実測図 | (20) |
| 第11図 A—2号竪穴実測図 | (21) |
| 第12図 A—3号竪穴実測図 | (22) |
| 第13図 A—4号竪穴実測図 | (22) |
| 第14図 A—5号竪穴・A—17号竪穴実測図 | (23) |
| 第15図 A—6号竪穴実測図 | (24) |
| 第16図 A—10号竪穴実測図版 | (25) |
| 第17図 A—11号竪穴・A—12号竪穴実測図 | (26) |
| 第18図 A—13号竪穴・A—14号竪穴・A—15号竪穴実測図 | (27) |
| 第19図 A—16号竪穴実測図 | (28) |
| 第20図 A地区堀址断面図 | (29) |
| 第21図 A地区堀址断面図 | (30) |
| 第22図 掘立柱址実測図 | (付図) |
| 第23図 A—1号溝址実測図 | (付図) |
| 第24図 B—7号住居址・古墳実測図 | (32) |
| 第25図 B—1号住居址実測図 | (33) |
| 第26図 B—1号住居址埋壘炉断面図 | (34) |
| 第27図 B—3号住居址実測図 | (35) |
| 第28図 B—3号住居址埋壘炉断面図 | (36) |
| 第29図 B—5号住居址埋壘炉断面図 | (36) |

| | | |
|------|---------------|------|
| 第30図 | B—5号住居址実測図 | (36) |
| 第31図 | B—2号住居址実測図 | (37) |
| 第32図 | B—2号住居址カマド実測図 | (38) |
| 第33図 | B—4号住居址実測図 | (39) |
| 第34図 | B—6号住居址実測図 | (40) |
| 第35図 | B—6号住居址カマド実測図 | (41) |
| 第36図 | B—1号竪穴実測図 | (42) |
| 第37図 | B—2号竪穴実測図 | (42) |
| 第38図 | B—3号竪穴実測図 | (42) |
| 第39図 | B—2号溝址実測図 | (付図) |
| 第40図 | 縄文土器拓影 | (43) |
| 第41図 | 弥生土器実測図 | (44) |
| 第42図 | 土師器・須恵器実測図 | (45) |
| 第43図 | 須恵器実測図 | (47) |
| 第44図 | 灰釉陶器・中世陶器実測図 | (47) |
| 第45図 | 内耳土器実測図 | (48) |
| 第46図 | 石器実測図 | (49) |
| 第47図 | 金属製品実測図 | (49) |
| 第48図 | 古銭拓影 | (50) |
| 第49図 | 貝製品実測図 | (50) |
| 第50図 | 縄文土器実測図 | (50) |
| 第51図 | 縄文土器・弥生土器拓影 | (51) |
| 第52図 | 弥生土器実測図 | (52) |
| 第53図 | 土師器実測図 | (53) |
| 第54図 | 土師器実測図 | (54) |
| 第55図 | 灰釉陶器実測図 | (55) |
| 第56図 | 石器実測図 | (55) |
| 第57図 | 石器実測図 | (56) |
| 第58図 | 鉄製品実測図 | (57) |
| 第59図 | 伝殿島大和守宝篋印塔実測図 | (60) |

図 版 目 次

- 図版 1 遺跡地遠景
- 図版 2 遺跡地近景
- 図版 3 遺 構
- 図版 4 遺 構
- 図版 5 遺 構
- 図版 6 遺 構
- 図版 7 遺 構
- 図版 8 遺 構
- 図版 9 遺 構
- 図版10 遺 構
- 図版11 遺 構
- 図版12 遺 構
- 図版13 遺 構
- 図版14 遺 構
- 図版15 遺物出土状況
- 図版16 遺物出土状況
- 図版17 遺 構
- 図版18 遺 構
- 図版19 遺 構
- 図版20 遺 構
- 図版21 遺 構
- 図版22 遺構及び遺物出土状況
- 図版23 出土遺物
- 図版24 出土遺物
- 図版25 出土遺物
- 図版26 出土遺物
- 図版27 出土遺物
- 図版28 遺 構

第 I 章 発掘日誌

昭和62年6月13日（土）晴 本日より本格的な発掘調査にとりかかる。テントを南北に2張り建てる。

昭和62年6月15日（月）晴 本城を中心にして南側をA地区、北側をB地区とする。B-1号住居址の掘り下げを開始する。結果的にみて、本住居址は埋甕炉を有する弥生後期の住居址となった。地層セクション図をとる。

昭和62年6月16日（火）晴 B-2号住居址、B-3号住居址、B-4号住居址の掘り下げをする。B-2号住居址はカマドを西側に有する鬼高期の住居址となった。B-3号住居址は埋甕炉を有する弥生後期の住居址となった。B-2号住居址～B-4号住居址のセクションをとる。

昭和62年6月17日（水）晴 B-1号住居址からB-4号住居址までの完掘を終える。

昭和62年6月18日（木）晴 B-5号住居址の掘り下げ及びB-6号住居址の掘り下げを開始する。B-5号住居址、B-6号住居址の地層断面図をとる。B-5号住居址は埋甕炉を有する弥生後期の住居址、B-6号住居址は西側にカマドを有する平安時代の住居址となった。

昭和62年6月19日（金）晴 B-5号住居址、B-6号住居址の完掘を終える。分布調査の段階で古墳と確認された遺構の調査開始。墳丘は全くない。周溝の確認をする。周溝の掘り下げをするが、古墳の決め手になるような遺物は発見されなかった。

昭和62年6月22日（月）晴 古墳の周溝掘り下げ完了。古墳の墳丘上に縄文中期の住居址が発見され、B-7号住居址とする。墳丘の調査とともにB-7号住居址の掘り下げを終了する。古墳周溝のセクション作成完了。

昭和62年6月23日（火）晴 B地区住居群の北側に3カ所の竪穴が存在し、それをB-1号竪穴～B-3号竪穴とする。B-1号竪穴～B-3号竪穴までの地層図の作製をする。夕方までかかって3つの竪穴をほぼ完掘し終える。

昭和62年6月24日（水）晴 B-1号住居址～B-7号住居址、古墳の周溝、B-1号竪穴～B-3号竪穴の清掃をして写真撮影を終える。B-2号住居址、B-6号住居址のカマドの写真撮影終了。B-1号住居址、B-3号住居址、B-5号住居址の埋甕炉の写真撮影を終了する。

昭和62年6月25日（木）晴 B-1号住居址～B-3号住居址までの実測終了。テントの北側を東西に走る溝をB-2号溝址とし、その掘り下げを開始する。

昭和62年6月26日（金）晴 B-4号住居址～B-6号住居址の実測終了。B-2号溝址の掘り下げを進める。

昭和62年6月27日（土）晴 B-1号竪穴～B-3号竪穴の実測完了。B-2号溝址の掘り下げ完了。午前中、宮場間様十三塚の供養を行う。

昭和62年6月29日（月）曇時々雨 古墳及びB-7号住居址の実測終了。B-2号住居址、B-6号住居址のカマド実測終了。B-1号住居址、B-3号住居址、B-5号住居址の埋甕炉断面実測終了。B-2号溝址の完掘終了。

昭和62年6月30日(火)晴 B-2号溝址の清掃、写真撮影を終える。同遺構の実測と地層実測終了。B地区の全測図作製終了。

昭和62年7月1日(水)晴時々曇 テント設営場所の東側へ検出された溝をA-1号溝址とする。この溝は東西に走っている。全作業員を導入したので夕方までにほぼ完掘終了。

昭和62年7月2日(木)晴時々雨 A-1号住居址、A-2号住居址の掘り下げを開始する。

昭和62年7月3日(金)雨 A-1号住居址、A-2号住居址の上にテントをかけて掘り下げを進めていく。夕方までかかってほぼ完掘終了。

昭和62年7月4日(土)晴 A-3号住居址、A-4号住居址、A-5号住居址の掘り下げを進めていく。

昭和62年7月6日(月)晴 A-3号住居址、A-4号住居址、A-5号住居址の完掘終了。

昭和62年7月7日(火)晴 B-1号竪穴～B-7号竪穴までセクションを残した状態で掘り下げを終了する。

昭和62年7月8日(水)晴 A-6号住居址の掘り下げを開始する。

昭和62年7月9日(木)晴 宮場間様十三塚遺跡より検出された人骨の供養をする。A-6号住居址の完掘を済ませる。

昭和62年7月10日(金)晴 A-7号竪穴～A-10号竪穴のセクションを残して掘り下げを終了する。

昭和62年7月11日(土)晴 A-7号住居址の掘り下げをはじめ。この住居址からは灰釉陶器が出土。夕方までに、ほぼ完掘し終える。

昭和62年7月13日(月)晴時々曇一時小雨 前日から掘り進めたA-7号住居址の清掃。

昭和62年7月14日(火)晴時々曇一時雨 A-11号竪穴～A-17号竪穴までセクションを残して掘り下げを終了する。

昭和62年7月15日(水)晴時々曇一時雨 A-1号竪穴～A-6号竪穴までのセクション壁をとりぞき、写真撮影の準備をする。

昭和62年7月17日(金)晴時々曇一時雨 A-1号住居址～A-7号住居址、A-1号竪穴～A-6号竪穴の清掃をして、写真撮影を完了する。A-1号住居址、A-2号住居址の実測をする。

昭和62年7月22日(水)晴時々曇 A-3号住居址～A-5号住居址、A-1号竪穴～A-6号竪穴までの実測をする。柱穴群確認のため、全面的清掃をする。

昭和62年7月23日(木)晴時々曇 A-6号住居址の実測をする。

昭和62年7月24日(金)晴 A-7号竪穴～A-20号竪穴までの清掃をし、写真撮影を終了する。A-7号住居址の実測。

昭和62年7月25日(土)晴 柱穴群の掘り下げをする。A-7号竪穴～A-10号竪穴の実測。

昭和62年7月27日(月)晴 A-8号竪穴～A-15号竪穴の実測。柱穴群の掘り下げをする。

昭和62年7月28日(火)晴 A-16号竪穴～A-17号竪穴の実測。柱穴群の掘り下げ。A-1号住居址、A-3号住居址、A-4号住居址のカマドのカッティングを実施する。

昭和62年7月29日(水)晴 柱穴群の掘り下げをほぼ終了する。A-1号住居址、A-3号住居

址のカマドの実測をする。

昭和62年7月30日(木)晴 柱穴群を清掃して、写真撮影をする。A-4号住居址のカマドの実測。

昭和62年7月31日(金)晴 本日をもって、殿島城跡遺跡の現場作業を終了する。柱穴群の実測をする。

昭和62年9月～昭和62年11月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集、報告書を印刷所へ送る。

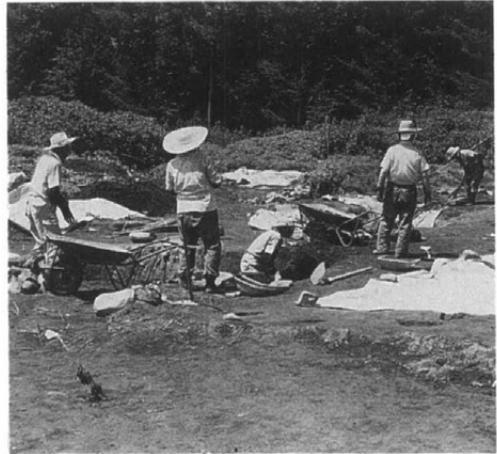
昭和62年12月 報告書を刊行する。

(飯塚 政美)

スナップ



発掘風景
(B地区グリット掘り)



発掘風景
(A地区縦穴掘り)



発掘風景
(A地区堀発掘)



発掘風景
(A地区グリット掘り)

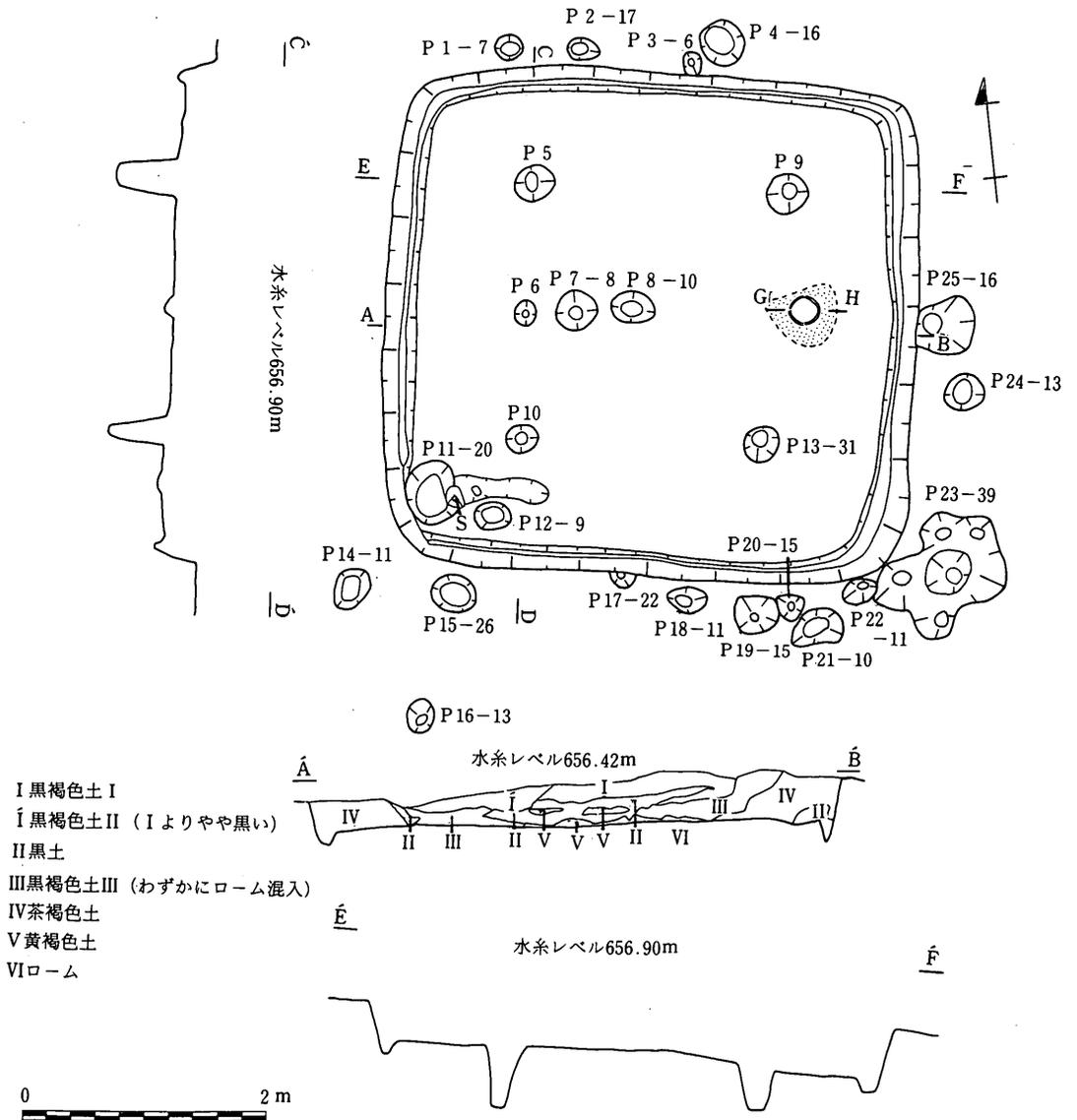
第II章 遺構

第I節 A地区

第1項 弥生時代

(I) A-2号住居址 (第2~3図 図版4)

A地区北西の一角に検出された。近くには南側にA-1号住居址、西側にA-3号住居址、A-4号住居址、A-5号住居址が存在している。表土面から60cm位下ったソフトローム層を掘り込んで築いてあり、規模は南北4m、東西4m35cm程を測る。平面プランは隅丸形状を呈す。



第2図 A-2号住居址実測図

壁高は35cm～45cm位あり、凹凸が多く、やや外傾気味で、堅く良好である。床面はやや堅く、若干凹凸が認められた。

周溝は南西の一隅で、途切れているが、他は全周しており、割合に見事であった。幅は5cm～10cm位、深さは10cm位を呈していた。周溝底部はやや尖り気味を呈しており、やや堅くなっていた。

炉は埋甕炉の形態をとり、東壁に寄ったP 9、P 13の支柱穴の中間地点に正位の状態で埋めてあった。炉の周辺には直径50cm位

の同心円形に焼土が厚く堆積していた。柱穴は四本支柱穴で、それはP 5、P 9、P 10、P 13であり、柱間2m位で正方形に展開している。西壁を除いて、北壁、東壁、南壁の三方面の壁外直下に数多くのピットが存在している。これらは本住居址と結び着くものであり、建築学上からみて、母屋柱の跡とも考えられる。

埋甕炉に使用された土器の時代からみて、弥生後期中島期の住居址と考えられる。床面中央部付近に存在するP 6、P 7、P 8は間仕切りの柱穴となっている。

(2) A—5号住居址 (第4図 図版4)

本址は第2号住居址の西側に、A地区で検出された遺構中、最も西側に位置している。表土面から60cm位下ったローム層面を50cm～60cm位掘り込んで構築した隅丸形状の竪穴住居址で、その規模は南北6m50cm位、東西5m50cm位を測る。本住居址の上に貼床をして、新しい時期の住居址を構築してあった。

壁高は50cm前後を計り、割合に深かった。西壁はほぼ直立に立ち上がっていたのに反し、他の3壁はやや外傾気味を呈し、堅くなっていた。床面は概そ、平坦で、堅く踏み固められていて良好であった。周溝らしき痕跡は全くなかった。

床面のうちで、北壁に沿った中央部付近に焼土の集中した個所を発見した。焼土を丁寧に取り除いてみたが甕の存在は無かった。従って、この焼土は地床炉的機能を有していると思われる。

柱穴は4本支柱穴と思われ、それはP 14、P 32、P 44、P 61であり、ほぼ、等間隔に方形に配置してあった。

床面中央部付近の列状のピットは間切りの施設、壁外のピットは下屋的施設をそれぞれ有していると思われる。

遺物は弥生後期中島式土器が出土した。従って、本址はこの時期に該当するであろう。

第2項 奈良時代

(1) A—1号住居址 (第5～6図 図版5)

本址は南側にA—2号竪穴、西側にA—3号住居址、A—4号住居址、A—5号住居址に挟まれる状況で、単独に検出された。表土から70cm位下ったソフトローム層面を掘り込んで築いた隅丸形状の竪穴住居址で、その規模は南北4m65cm位、東西5m位を測る。

壁高は25cm～40cm内外を測り、やや外傾気味で凹凸が少なかった。床面はやや堅く、凹凸が極めて多い。部分的に桑の根の混入が顕著であった。



第3図 A—2号住居址
埋甕炉断面図

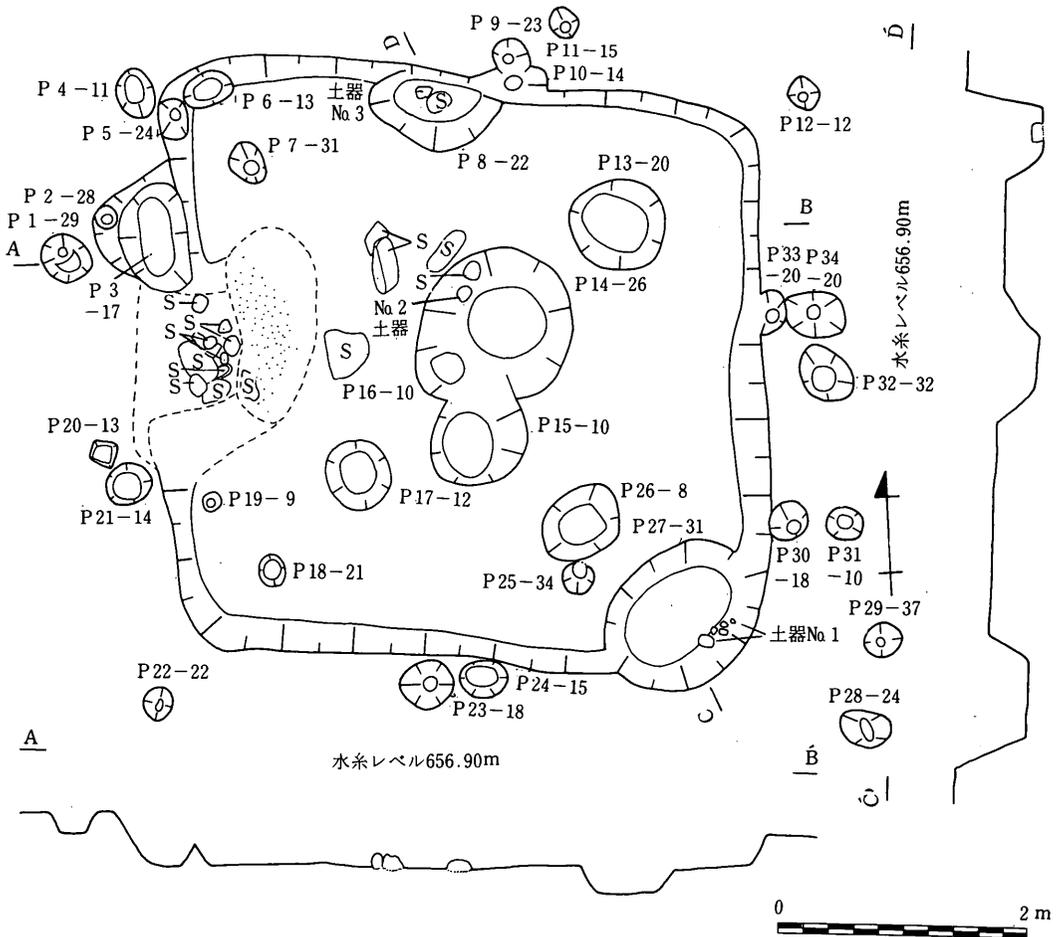
柱穴は整然とはしていなかったが、主柱穴となりそうなのはP 7、P 25、P 13等と推測される。壁外周辺に大小様々なピットが存在しているが、これらは下屋的要素を含んでいると推測される。床面上に発見された大きなピットは本住居址に関連する貯蔵穴的遺構と想定されよう。

カマドは西壁の中央部付近に存在し、石組粘土カマドの形態を有していた。焚口、袖石及び粘土の残存状態は割合に良好であった。焚口付近には広範囲にわたって焼土が散乱していた。さらに焚口の手前に砂質混合粘土が多量に存在したが、カマド構築に使用した粘土とは若干異質であった。遺物は土師器、須恵器が出土し、奈良時代後期の住居址と思われる。 (小木曾 清)

(2) A-4号住居址 (第4・7図 図版4)

本址は調査地区の最西端で、A-3号住居址、A-5号住居址と重複して検出された。本址の大部分はA-5号住居址の上に貼床をして構築してある。従って推定するにその規模は南北5m35cm位、東西4m30cm位を測る。プランは現存している南東、南西のコーナーからみて隅丸方形状を呈し、竪穴住居址の形態をとっている。

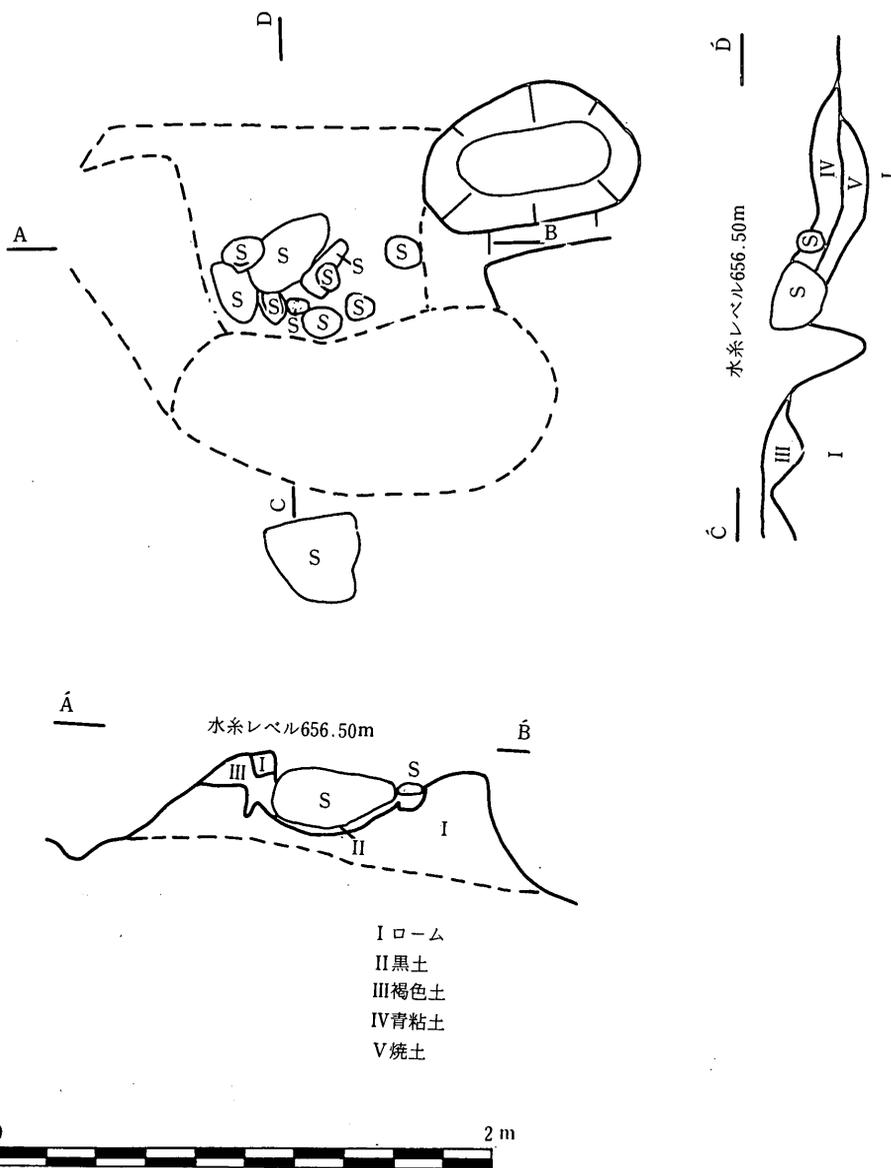
壁高は20~30cm位を測り、やや外傾気味で堅くなっていた。



第5図 A-1号住居址実測図

床面は南側のわずかな部分、全床面面積からして約十分の一はローム層で堅く踏み固められて平坦で良好であった。

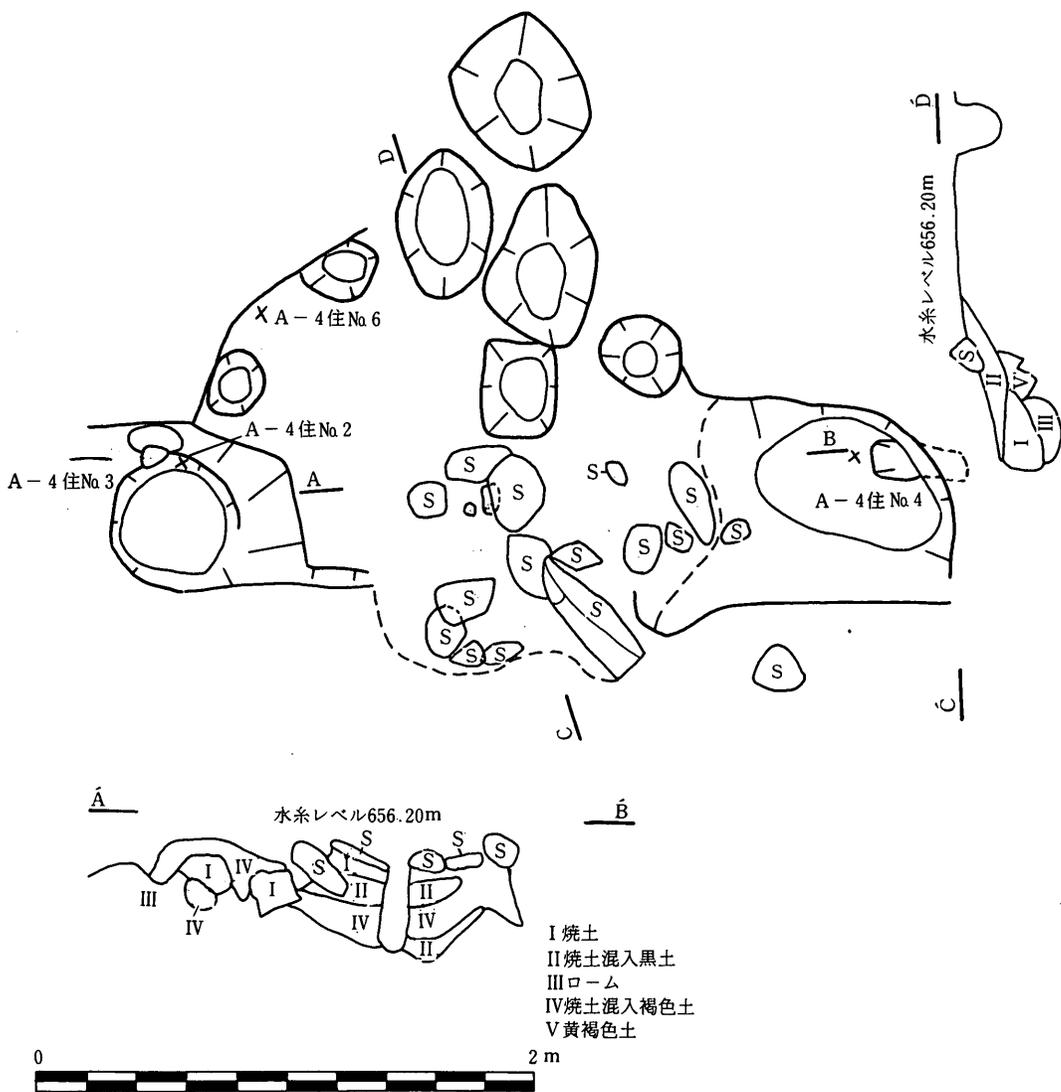
残りの約十分の九位の床面は黒色土の貼り床であり、部分的に若干ローム層が混入し、堅く踏みかためられてあり、ほぼ平坦で、黒々とした光沢を放っており、貼床としては良好であった。



第6図 A-1号住居址カマド実測図

3軒の重複関係にあったので、どの柱穴が本址に直接結び着くかは現段階では判然としない。ただ、南壁と、北壁に沿って数多くのピット列が存在しており、下屋的遺構の存在を濃くしていると思われる。

遺物は土師器、須恵器が出土した。従って本址は奈良時代後半の住居址と推定されよう。カマドは西壁中央付近に存在し、石組粘土カマドの形態を保持している。



第7図 A-3号住居址・A-4号住居址カマド実測図

第3項 平安時代

(1) A-3号住居址 (第4・7図 図版4)

本址はA-3号住居址、A-4号住居址、A-5号住居址の重複した住居群中、最上層部に検出されたかっこうであった。黒色土層中に構築された住居址であったこと、また、切り合い関係のために規模は明瞭でなかった。ただ、隅丸方形の竪穴住居址であることははっきりした。

壁は明瞭でなかった。床面は黒色土で黒光かりをしていた。カマドは西壁にあり、石組粘土カマドの形態を有していた。土師器、須恵器、灰釉陶器が出土し、平安時代の住居址と思われる。

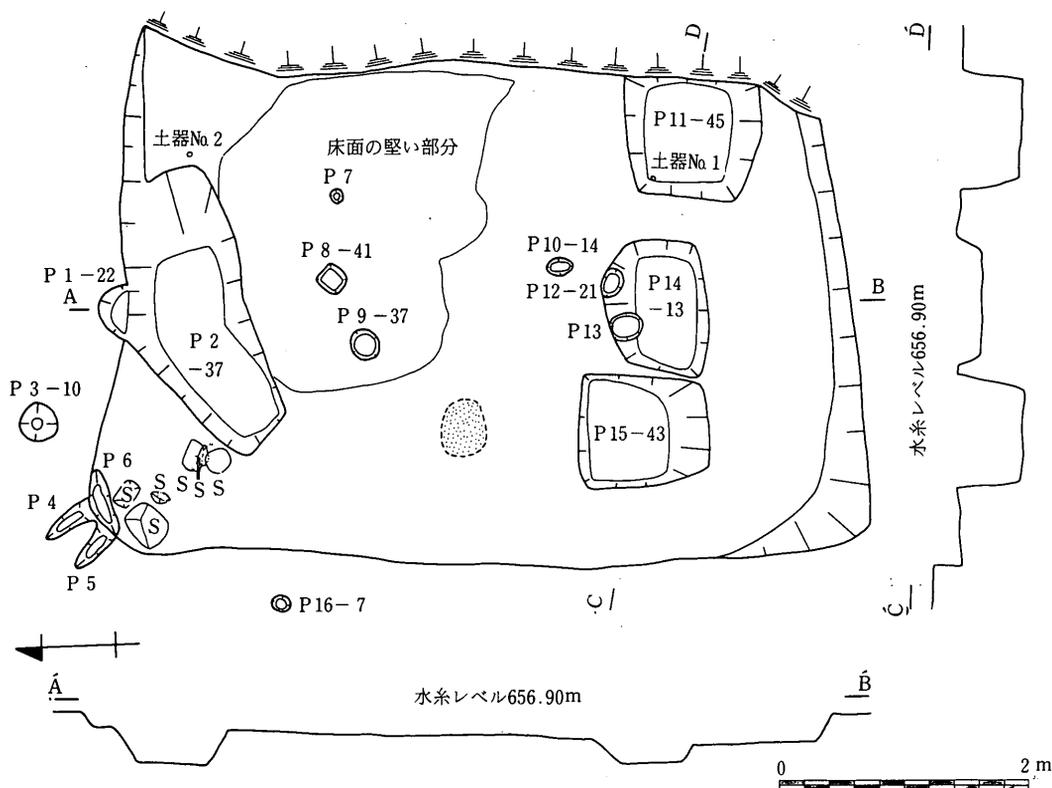
(2) A-7号住居址 (第8図 図版5)

本址はA地区遺構群中最東端の位置に検出され、東側は中世の堀址に切られている。プランは現存している状況からみて、隅丸方形であり、ローム層面に掘られた竪穴住居址である。規模は東西

は不明、南北は6m10cm位を測る。壁はほぼ垂直に近く、凹凸が多く、その高さは低いところで10cm位、高いところで30cm前後であった。

床面は凹凸が多く、ところどころにロームの堅い叩きが認められた。柱穴の存在についてはところどころに大きな角状のピットが何か所か確認されたが、これらが則、本住居址の柱穴に結び着くかは不明である。北西の隅に焼石が数個存在したが、これはカマドの残骸であろう。

灰釉陶器の出土量が割合に多かった。よって本址は平安時代の住居址と思われる。



第8図 A-7号住居址実測図

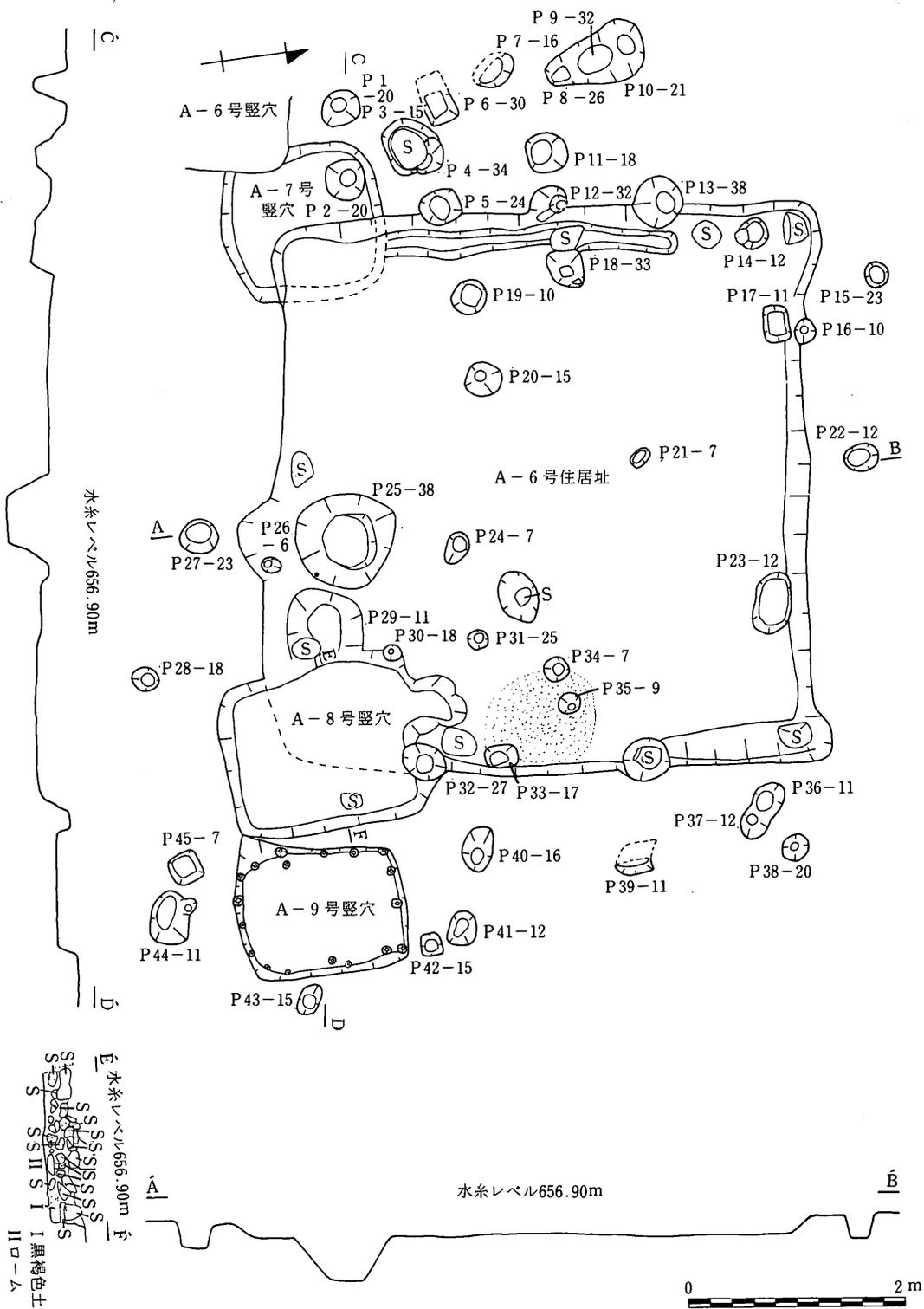
第4項 中世

(1) A-6号住居址 (第9図 図版6)

本址はA地区の遺構群中、北側の一部に検出された遺構である。表土面より60cm位下ったソフトローム層面を掘り込んだ堅穴住居址で、その平面プランは隅丸形状を呈す。規模は南北4m95cm位、東西5m25cm位を測る。壁面の状態はやや外傾気味で、凹凸が多く、その高さは20cm内外の数値を示していた。

床面はローム層の叩きで、部分的に極めて堅い所を認めた。レベルは大般水平であった。

柱穴は床面上に壁に沿って回っていたのと、壁外に回っているのと二種に大別できる。西壁、東壁直下の柱穴には平坦な河原石をほぼ等間隔に配してあり、これはどうも土台石的機能を具備していると察せられる。西壁直下にわずかに周溝が認められた。



第9図 A-6号住居址・A-6号竪穴・A-7号竪穴・A-8号竪穴・A-9号竪穴実測図

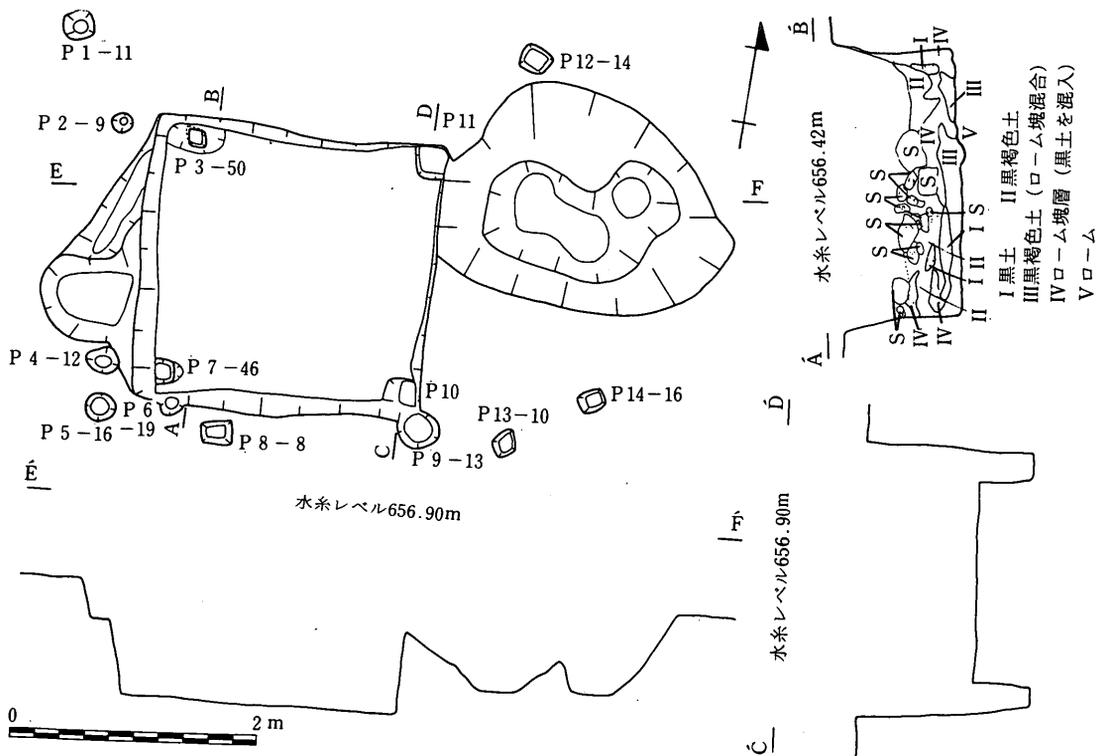
東壁の中央部付近に円形状に焼土が存在し、地床炉の色彩が強いと思われる。遺物の出土は何もなかったが、土台石の配列からみて中世の住居址と思われる。

(2) A-1号竪穴 (第10図 図版6)

本遺構はA-1号住居址の南側に検出され南北2m25cm位、東西2m35cm位の方形の竪穴である。壁高は1m前後あり、ほぼ垂直状態を呈している。壁面上部はソフトローム層、下部はハードローム層より組成されており、若干の凹凸を認める。

床面は大般水平で、極めて堅かった。柱穴は床面上の四隅に角状のピットを、壁外の南側から西側にかけて、角状や円形状のピットをそれぞれ列してあった。覆土上面に大小様々な河原石が混入していたが、これは埋没する時点で人為的に投げこんだ可能性が、埋没土からみて想定できる。同時に覆土中に多量の炭化物が混入していた。

遺物は古銭の出土があり、それは永楽通宝、洪武通宝。内耳土器、天目茶碗、砥石が出土。従って本遺構は室町中期頃と思われる。



第10図 A-1号竪穴実測図

(3) A-2号竖穴 (第11図 図版7)

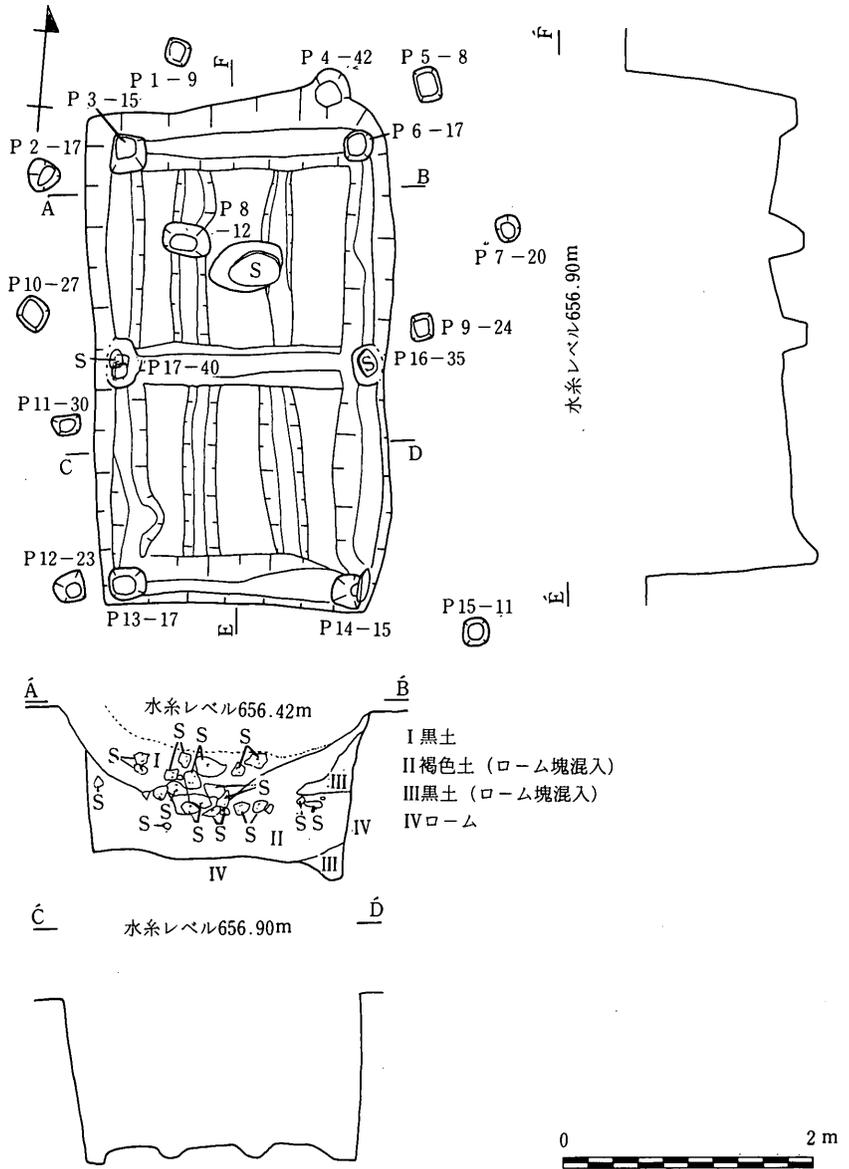
A-1号竖穴の東側に近接して検出された竖穴で、南北3m95cm位、東西2m35cm位の隅丸長方形形状を呈し、ローム層を1m20cm前後掘り込んで作られている。壁面はほぼ垂直状に近く、凹凸が多い。壁高が高いために、その組成土の上部はソフトローム層、中・下部はハードローム層であった。壁面に構築時のノミ痕が顕著であった。

床面はハードローム層中につくられ、大般水平であった。同面の四壁には周溝が全周しさらに南北に一本、東西に二本づつ、それぞれ溝が走っていた。これは湿気を防ぐために築いた一工夫の現われであろう。

柱穴は床面上にほぼ等間隔に6本存在し、それはP6、P14、P13、P17、P3であった。これらの中に石が置いたのもあり、これは柱のささえとなっているのであろう。角状のピットが主であった。その他東壁、西壁近くに南北に列状に配したピットが存在した。

覆土中に大量の炭化物が、また多量の河原石が含まれていた。後者の河原石は人為的に埋めたようにみられた。

遺物は永楽通宝、洪武通宝、天目茶碗、鉄



第11図 A-2号竖穴実測図

製の刀子が出土した。よって本堅穴は室町中期頃に属していると思われる。

(4) A-3号堅穴 (第12図 図版7)

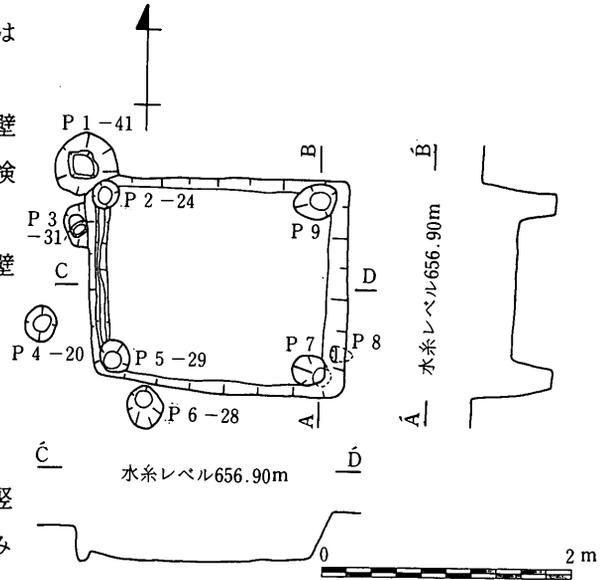
本遺構はA-1号住居址の東側に検出された。ローム層を40cm前後掘り込んで作っており、平面プランは隅丸形状を呈す。規模は南北1m65cm位、東西2m5cm位を測る。

東壁はやや外傾気味であるが、他の三つの壁面は垂直に近い状態を呈している。床面は大般水平でやや堅かった。

覆土中に大量の炭化物が出土。北東隅の壁面に密着して縦状に炭化した板状の遺物が検出された。

柱穴は床面上の四隅に一つずつ存在し、壁外のピットは西壁付近に集中していた。

遺物は熙寧元宝、内耳土器片が出土した。室町期の遺構と思われる。



第12図 A-3号堅穴実測図

(5) A-4号堅穴 (第13図 図版7)

A-3号堅穴の東側の位置に検出された堅穴である。平面プランは南西で若干ふくらみを有するが、一般的に隅丸形状を成している。

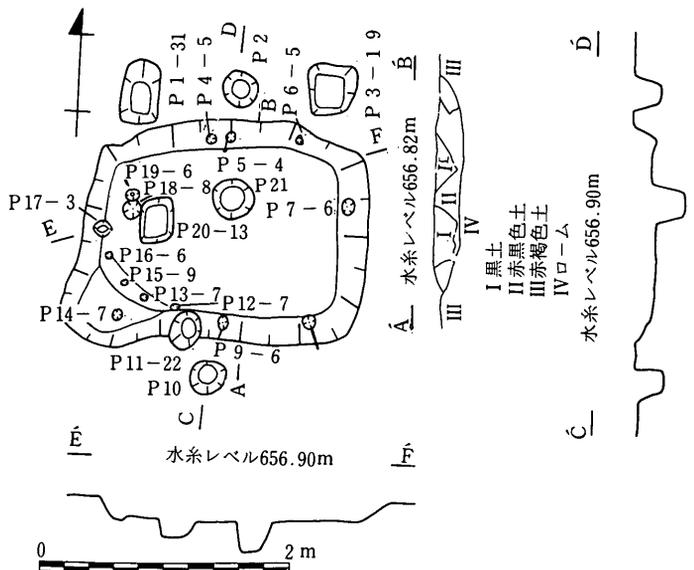
規模は南北1m75cm位、東西2m28cm位であって、ローム層を20cm前後を掘り込んで構築してある。壁面は外傾気味で軟弱である。床面は大般水平で、軟弱気味を呈す。

柱穴は21カ所存在しているが、その配列状態は判然としない。遺物の出土は何も無かった。付近の状況からみて、室町期の遺構と思われる。

(6) A-5号堅穴

(第14図 図版7)

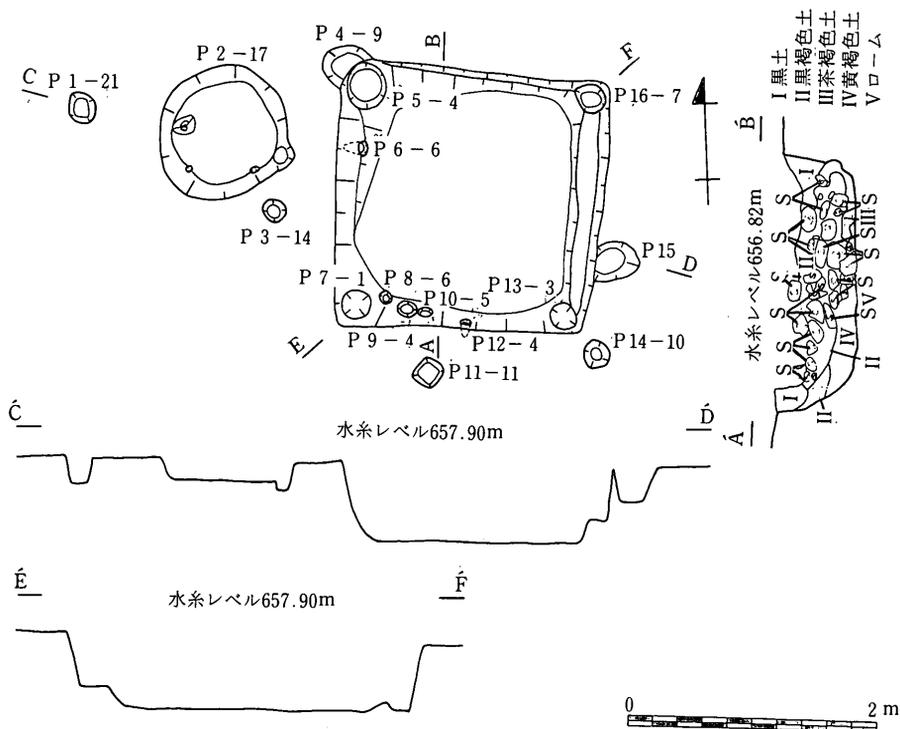
南側でA-17号堅穴に接している堅穴である。ローム層を掘り込み、南北2m75cm位、東西2m80cm位、深さ50cm位の規模を有して



第13図 A-4号堅穴実測図

覆土上層から覆土下層、床面にまで小さな河原石が混入していた。断面図からみて、この石は人為的に埋められたのである。

柱穴は四隅に4本が主柱穴となろう。南壁に接して小ピットが4個、壁外に2個ピットが存在している。



第15図 A-6号竪穴実測図

西側の大きなピットは本竪穴とは何んら関係がないと思われる。

(8) A-7号竪穴 (第9図 図版7)

本竪穴は南西でA-6号竪穴に、東側はA-6号住居址に切られている。壁高は10数cm位を計り、若干凹凸があり、やや外傾気味であった。床面はやや軟弱で、凹凸が多い。

遺物の出土は何もなかった。

(9) A-8号竪穴 (第9図 図版8)

西側で本竪穴の半分位はA-6号住居址を切って構築してある。平面プランは北側で、やや凹凸しているが、全般的には隅丸形状を呈していた。規模は南北2m30cm位、東西1m50cm位を有していた。

壁高は15cm位~25cm位を測り、やや外傾気味で軟弱であった。床面はやや凹凸があり、かたくなっていた。覆土上層中に拳大程の河原石が大量に埋没していた。遺物の出土は何も無かった。

(10) A-9号竪穴 (第9図 図版8)

本竪穴は切合い関係がなく、単独に検出された。規模は南北1m60cm位、東西1m15cm位を測り、平面プランは隅丸形状を呈す。壁高は15cm位~20cm位で割合に浅かった。壁の状態は外傾気味でやや軟弱であった。

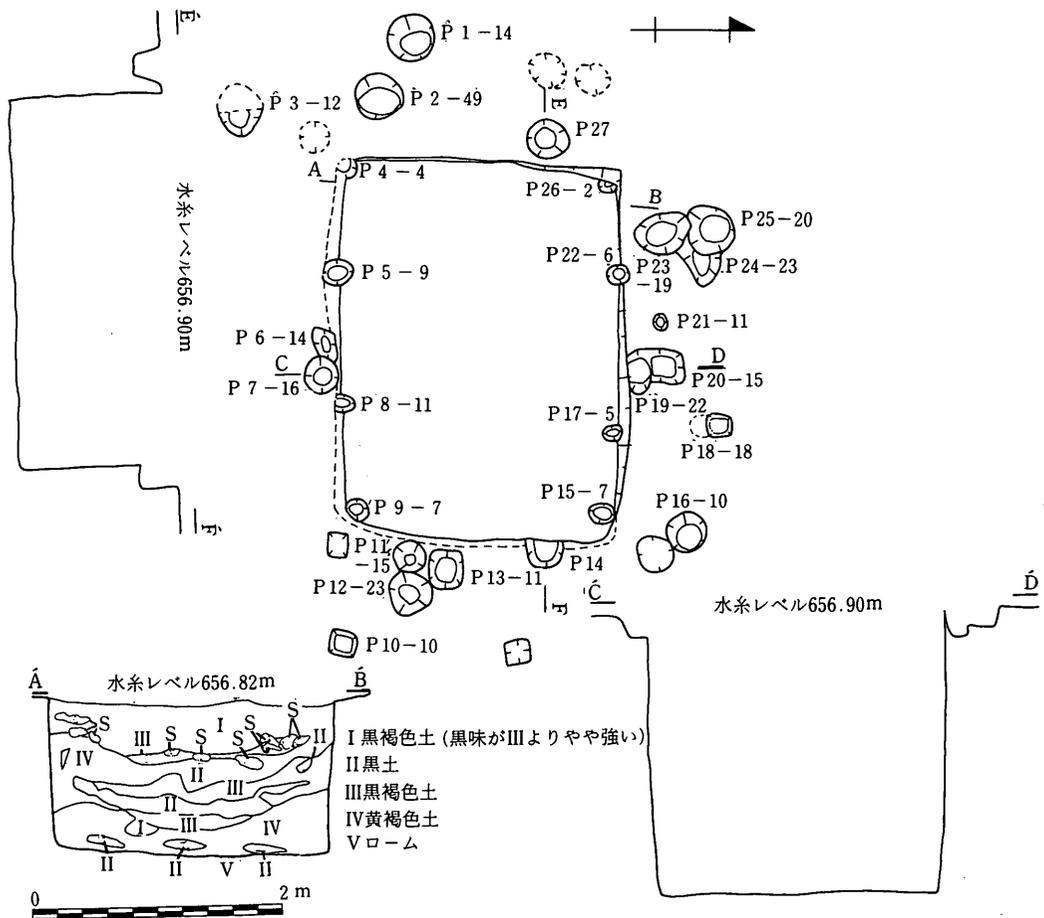
床面は大般水平で、軟弱気味を呈する。遺物の出土は何も無かった。床面上に小さなピットが壁面直下に全周していた。

(I) A-10号竖穴 (第16図 図版8)

本竖穴はA-6号住居址の東側に、単独に検出された。規模は南北2m30cm位、東西3m5cm程度を測り、平面プランは隅丸形状を呈す。ソフトローム層を掘り込み、深さは1m25cm前後と、極めて深かった。

壁の状態は垂直に近く、上部はソフトローム層で、中・下部はハードローム層で組成されていた。壁面に部分的な凹凸を認めた。床面は大般平坦で堅くなっていた。覆土上層に人為的に埋めたとと思われる河原石が不規則に混入していた。また、河原石と河原石の間の覆土に多量の木炭を認めた。

柱穴は南壁直下と北壁直下に4個づつ、列状に規則性を持って配列されていた。壁外のピットは割合に雑然と全周状に配列していた。内耳土器と室町中期頃の古瀬戸灰釉平茶碗が出土した。よって本竖穴は室町中期頃に位置づけられよう。



第16図 A-10号竖穴実測図

(12) A—11号竪穴 (第17図 図版8)

本竪穴はA—10号竪穴の南側に位置、南側でA—12号竪穴に接している。ソフトローム層を30cm前後掘り込んで構築し、南北1 m70cm、東西2 m35cm程度を測る。西壁と東壁は垂直に近いが、他の2壁はやや外傾気味である。

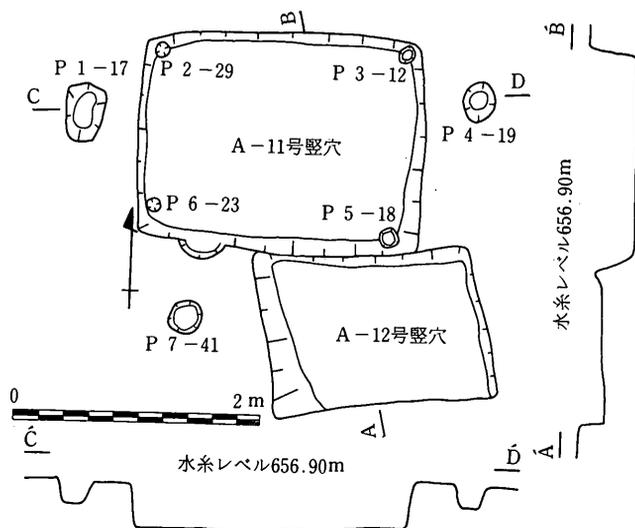
床面は大般水平で、やや堅くなっている。遺物の出土は何もない。四隅の壁面直下に小さなピットが4本存在している。

(13) A—12号竪穴 (第17図)

本遺構は北側でA—11号竪穴と接した位置に発見され、ローム層を20cm前後掘り込んで構築された竪穴である。

平面プランは変形の隅丸方形を成している。規模は南北1 m18cm、東西1 m78cm程を測定できる。南側はA—13号竪穴に切られている。

壁面はやや外傾で、軟弱である。床面は大般水平で、軟弱である。遺物の出土は何も無い。また、柱穴の存在も認められなかった。



第17図 A—11号竪穴・A—12号竪穴実測図

(14) A—13号竪穴 (第18図 図版8)

本遺構は北側でA—12号竪穴、南側でA—14号竪穴をそれぞれ切っている。ローム層を25cm前後掘り込んで構築した竪穴である。平面プランは隅丸方形を呈し、南北2 m10cm位、東西2 m70cm位を測定できる。

壁の状態はやや外傾し、軟弱気味。床面は大般水平で、やや堅かった。柱穴は西壁直下床面上に1本、東壁の北隅と、南隅にそれぞれピットが1本づつ存在していた。

遺物は西壁中央部で耳の明瞭な内耳土器が出土した。

(15) A—14号竪穴 (第18図 図版9)

本遺構は北側でA—13号竪穴に切られ、南側はA—15号竪穴と接した位置に発見された。ローム層を25cm前後掘り込んで構築した竪穴で、平面プランは南側はやや出張り、北側は隅丸方形を呈する。全般的に不整形。

壁はやや外傾し、やや凹凸があり、軟弱であった。床面は中央部付近で大般水平で堅かった。遺物の出土は何もなかった。

(16) A—15号竪穴 (第18図 図版9)

本遺構は今回検出されたA地区竪穴群中の最も南側に発見された。

北側はA—14号竪穴に接し、南側は周溝に接している。ソフトローム層を20cm前後掘り込んで、この竪穴を構築してある。

平面プランは角張った円形状を呈し、その規模は南北2 m70cm、東西2 m90cm前後を測定できる。

西壁は内弯が強く、東壁は垂直に近く、両壁とも軟弱であった。

床面は大般水平であったが、中央部付近がやや凹んでいた。軟弱で、鉄分の沈澱が多く、赤々としていた。

床面に密着して室町中期頃の古瀬戸灰釉大平鉢が出土した。本竪穴は室町中期頃と位置づけできよう。

(17) A-16号竪穴 (第19図)

本竪穴はA-6号住居址の西側、A地区で検出された遺構群中、最も北側の位置に検出され、30cm前後掘り込んで構築してある。

平面プランは南東でややとび出している箇所を認めるが、全般的には隅丸形状を呈し、南北1m55cm位東西2m35cm位の規模を有している状態である。

壁はやや外傾し、凹凸は多くなっている。床面はやや堅く、大般水平であった。

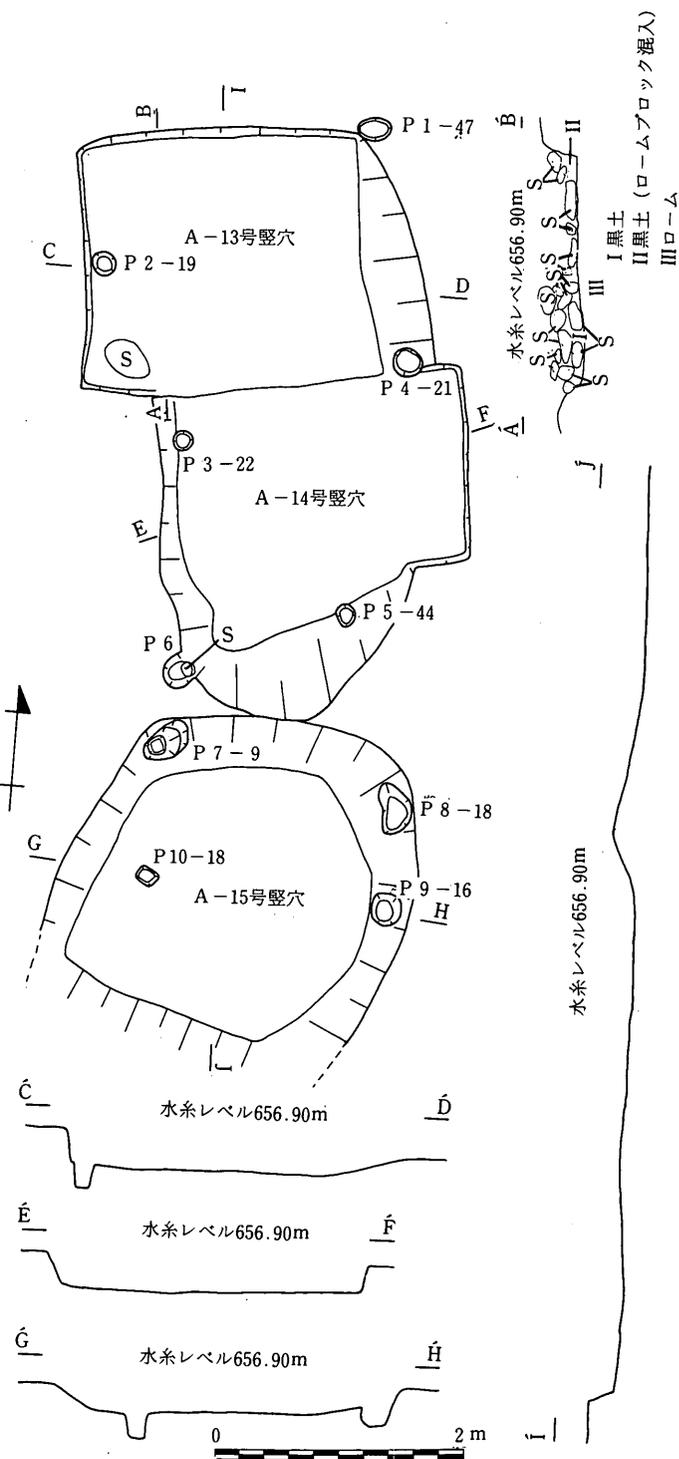
覆土中には多量の細礫や、焼土を含んでいた。柱穴は床面上の四隅に小ピットが存在し、壁外の四隅に大きなピットが取り囲むようにして存在した。

遺物は内耳土器の細片が少量出土した。

(18) A-17号竪穴 (第14図)

本竪穴はA-5号竪穴の南東隅に接して発見され、ソフトローム層を70cm前後掘り込んで築いてある。規模は南北1m30cm位、東西1m60cm位で、平面プランは円形状である。

壁面は四つともやや外傾気味で、軟弱状態を呈す。床面は大般水平で、



第18図 A-13号竪穴・A-14号竪穴・A-15号竪穴実測図

やや堅くなっている。柱穴は中央部付近の床面上に直径20cm前後のものが1カ所検出された。

遺物の出土は何もなかった。本竪穴は他の竪穴と比較してみると、その形状が円形という点からみて、他の竪穴とは異質な要素を含んでいるのではないだろうか。

(19) 堀址 (第1、20~21図 図版10)

殿島城跡は現在、本城と外城とに別れている。本城は東西90m、南北80m位の規模、外城は本城の南側に位置し、東西100m、南北95m位の規模を有している。発掘を実施する以前

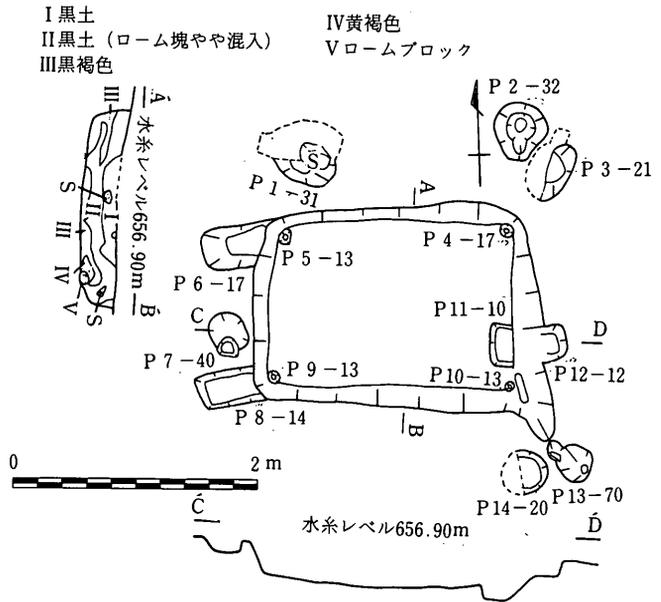
の堀は本城を取り囲むようにして、南側に一本、東側に3本、北側に1本存在した。今回、A地区を発掘調査してみると、新たに堀が発見され、これらは本城との関連のもとに築かれていたことが判明した。殿島城の全体的築造については第IV章まとめのところで述べることにするので、今回はA地区に限った堀の状況及び規模について述べることにする。

A地区は殿島城跡全体から見ると外城と呼ばれている地域である。本城の東側に現存している堀は同様に外城へと南へ連がっていた。詳細な堀の状況を述べるために、外城の堀に東側から西へ向かって堀一1、堀一2、堀一3と命名した。さらに外城中央部付近から南側を発掘調査の都合上、堀の名称細分をした。東側から西側へ向かって南堀1、南堀2、南堀3と命名した。

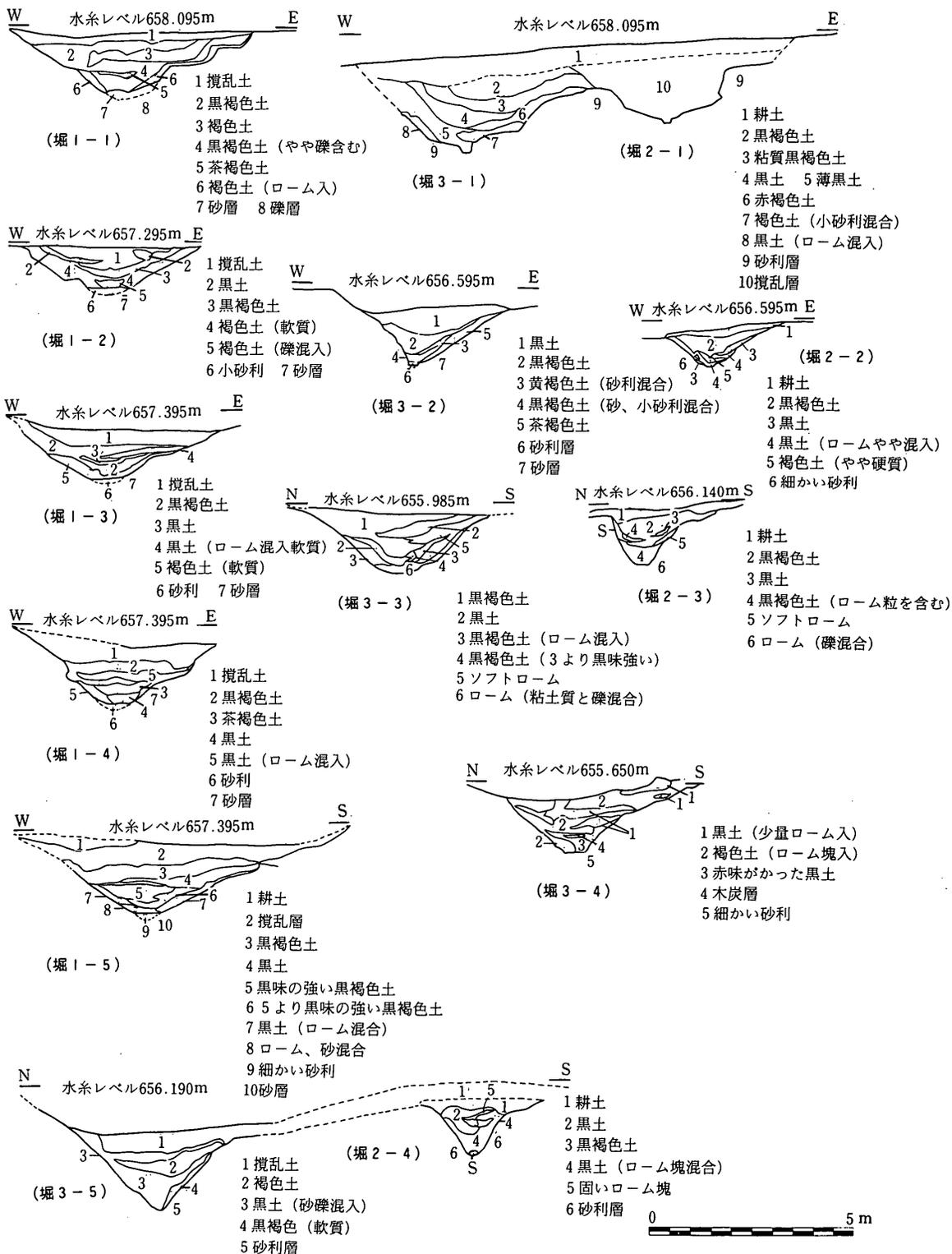
最も東側の堀である1の堀は南側で南堀一1に連なり、南で火沢の洞へと抜け出ている全長130m位、最北端の上面幅3m90cm位、同位置の底面幅30cm位、深さ1m50cm位であり、やや箱葉研状を呈し、西壁面の方がやや急傾斜である。中央部付近では上面幅7m位、底面幅30cm位、深さ1m90cm位と、底面がやや南側へ傾斜している。火沢の洞と接する南側の地点は用地買収の点からして調査不可能であった。堀の全体配置及び堀の細部状態は第1図遺構配置図、第20図A地区堀址断面図、第21図A地区堀址断面図を参照して下さい。尚、(20~21図)に掲載した堀址断面を実測した箇所は第1図にそれぞれの番号を表記してありますので、照合して下さい。

真中の堀一2は南へ60m位で一方南堀一2と連なり南へ70m位の地点の火沢の洞へ、一方は西へ屈曲して80m位で天竜川竜東段丘崖面へと急傾斜で抜け出ている。南堀一2が火沢へ抜け出る場所から北へ10m位寄った地点で、新たに南堀一3が西へ走り、段丘崖面へと抜け出ている。

堀一2の北側の上面幅2m90cm位、底面幅50cm位、深さ1m50cm位を測る。やや箱葉研状を呈し、西壁はやや急傾斜である。屈曲する前付近では上面幅2m80cm位、底面幅20cm位、深さ80cm位と浅目になる。葉研状態はますます強くなり、西壁の傾斜度は増してくる。西へ屈曲した中央部付近の上面幅2m50cm位、底面幅30cm位、深さ1m20cm位を測る。葉研状態は続き、北壁は急傾斜となる。



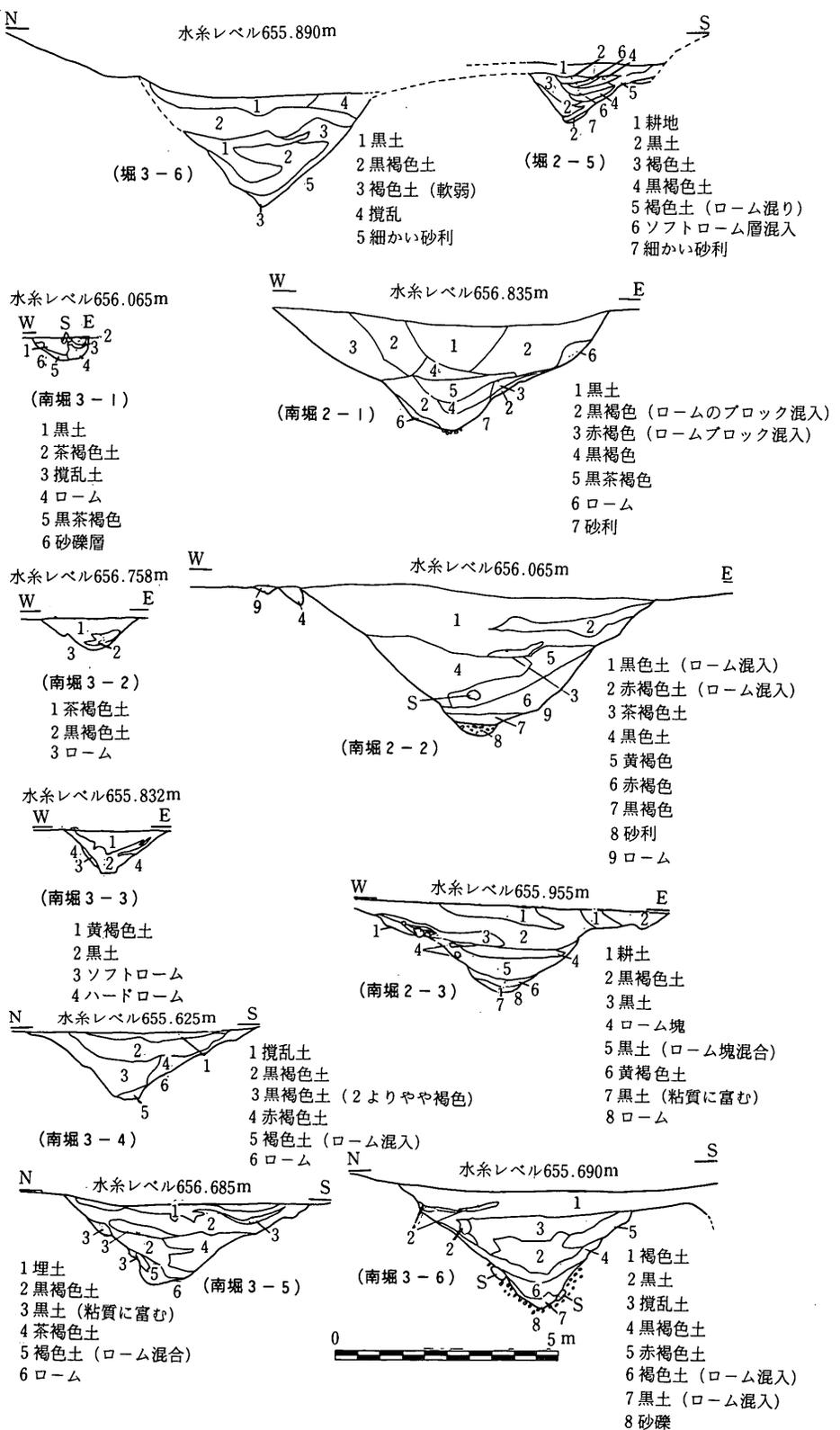
第19図 A-16号竪穴実測図



第20図 A地区堀址断面図

天竜川段丘崖面へ抜け出る付近の上面幅2 m 90cm位、底面幅30cm位、深さ1 m 10cm位を測る。葉研状を呈し、北壁が急傾斜である。全般的に外側から内側へ向かって浅くなっており、屈曲付近が最も浅くなる。

最も西側の堀である堀—3は南側へ50 m位付近で西側へ弧状に曲がり、75m位で天竜川段丘崖面へと抜け出ている。堀—2、堀—3ともに天竜川段丘崖面に堀址が明瞭に残されている。北側の上面幅5 m位、底面幅80cm位、深さ1 m 50cm位を測る。西壁



第21図 A地区堀址断面図

面は急傾斜である。曲折する前付近の上面幅 3 m65cm位、底面幅20cm位、深さ 1 m40cm位を測る。葉研状態が強く、西壁の傾斜は強い。段丘崖面へ抜け出る付近は上面幅 5 m10cm位、底面幅20cm位、深さ 2 m40cm位を測る。北壁面は急傾斜。

南堀—3の北側は堀—2が西側へ曲屈した付近で、堀—2に接し、この地点から南へ40m位の所でゆるやかなカーブを20m位描きつつ、西側へ直角に近い状況で曲がって55m位で天竜川段丘崖面へと抜け出している。この堀の最北端の上面幅 1 m30cm位、底面幅40cm位、深さ50cm位を測る。屈折する付近の上面幅 2 m40cm、底面幅40cm位、深さ90cm位を測る。やや葉研状態を呈する。段丘崖面へ抜け出る付近の上面幅 5 m40cm位、底面幅50cm位、深さ 2 m10cm位を測る。

一般的にみて堀の底面に砂層の堆積が多く、流し堀りによって築かれた事がわかる。堀の最底部より鉄製の分銅、青銅製の切刃が出土しており、これからみて、室町中期頃に築かれた堀であろうと思われる。

㊦ 掘立柱址 (第22図 図版11~12)

A地区のA—1号住居址、A—2号竪穴の東側、A—7号住居址の西側一帯にかけて200カ所に達しようとする柱穴が発見された。柱穴の発見された範囲は南北24m位、東西29m位である。これらの柱穴の中には第22図掘立柱実測図にみられるように円形状、角状、楕円形状等々まちまちであった。これらの柱穴の中で、建物の配列がある程度判別したのには第22図中に明示してあるように棒線を連結してある。それによって4棟の存在がわかる。

1号建物址—東西 6 m50cm位×南北 3 m50cm位の規模で囲まれている。この中に南北に走る柱列があるが、これは間切りであろう。北側の広がり下屋的施設か拡張部のどちらかだと思われる。

2号建物址—東西 6 m位、南北 5 m50cm位の規模で、ほぼ方形に配置されている。四隅には角柱が整然と並び、その間にいくつかの柱穴がある。南北に走る柱穴列は間仕切りの施設であろう。

3号建物址—東西 2 m60cm位、南北 7 m30cm位の範囲内に配列されており、南北に長く長方形に配されている。東、西側の直線列は下屋的な柱穴であろう。

4号建物址—東西 4 m20cm位、南北 3 m位の範囲でほぼ方形に配されている。一般的にみて、柱穴群中からはわずかに室町中期頃の陶器片が出土した。従って、本柱穴群は周辺に存在する竪穴と関連づけて考えた方がよいと思われる。

㊧ A—1号溝址 (第23図 図版13)

本城の東側に検出された溝状遺構であり、表土から60cm位下ったローム層を掘り込んで構築してある。上面幅は 1 m50cm位から 1 m80cm位。底面幅は50cm位~70cm位、深さは50~60cm位を測る。プランは南側から17m位北へ行った地点でやや東側へカーブしている。底面近くに水の流れたと思われる砂層が若干出土し、底面のレベルは東から西へ、西から南へやや傾斜しており、かたくなっていた。かたくなっていた所に鉄分の沈澱がみられた。遺物の出土は何もない。(飯塚 政美)

第2節 B地区

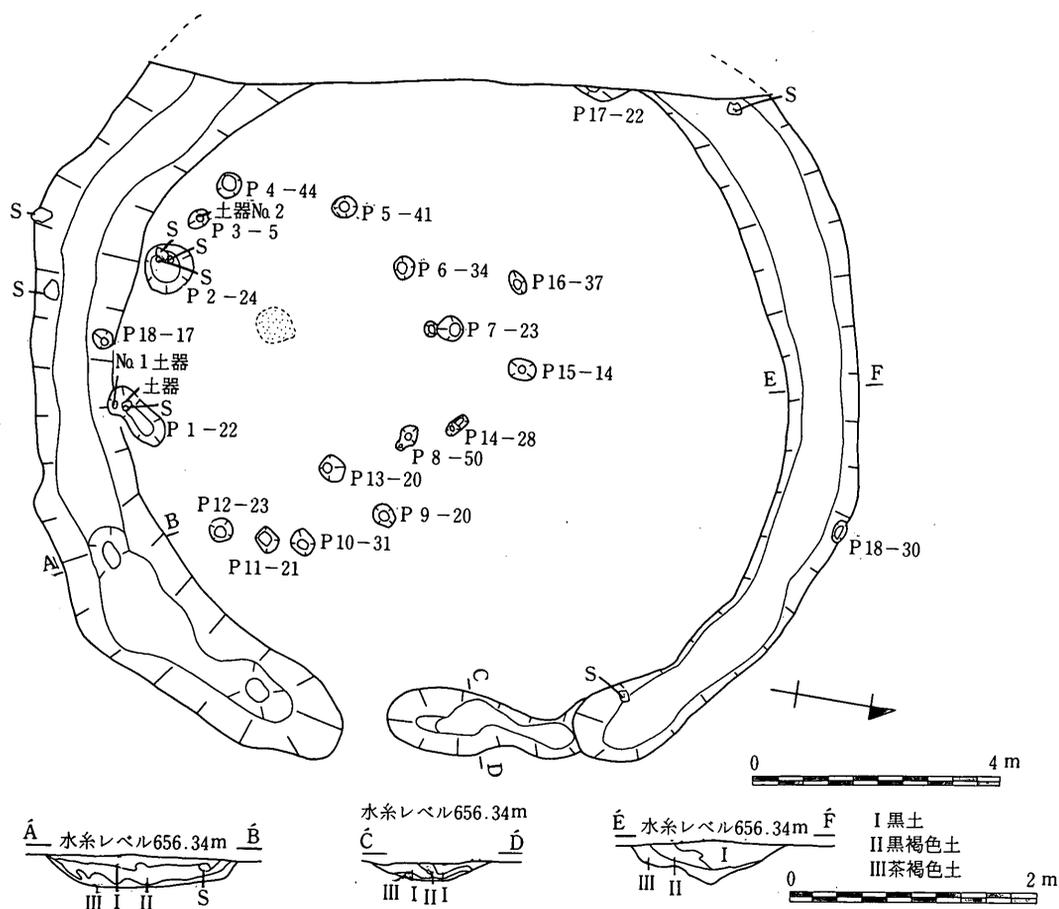
第1項 縄文時代

(I) B-7号住居址 (第24図 図版17)

本址はB地区の最西端に発見され、構築当時は多分竪穴住居址であったと推定されるが、後世の古墳築造時に壁は破壊されてしまった。現存する柱穴の配置からみて円形状の平面プランを呈していたと想定できる。

床面は構築時は堅く叩いてあったと思われるが、現段階では軟弱であった。柱穴群に取り囲まれたほぼ中心部に焼土のかたまりが残存しており、地床炉の形態を有している。

P1の中から加曾利E期の新しい方の土器がかなり集中的に出土した。従って本址は縄文中期後半の住居址と考えられる。



第24図 B-7号住居址・古墳実測図

第2項 弥生時代

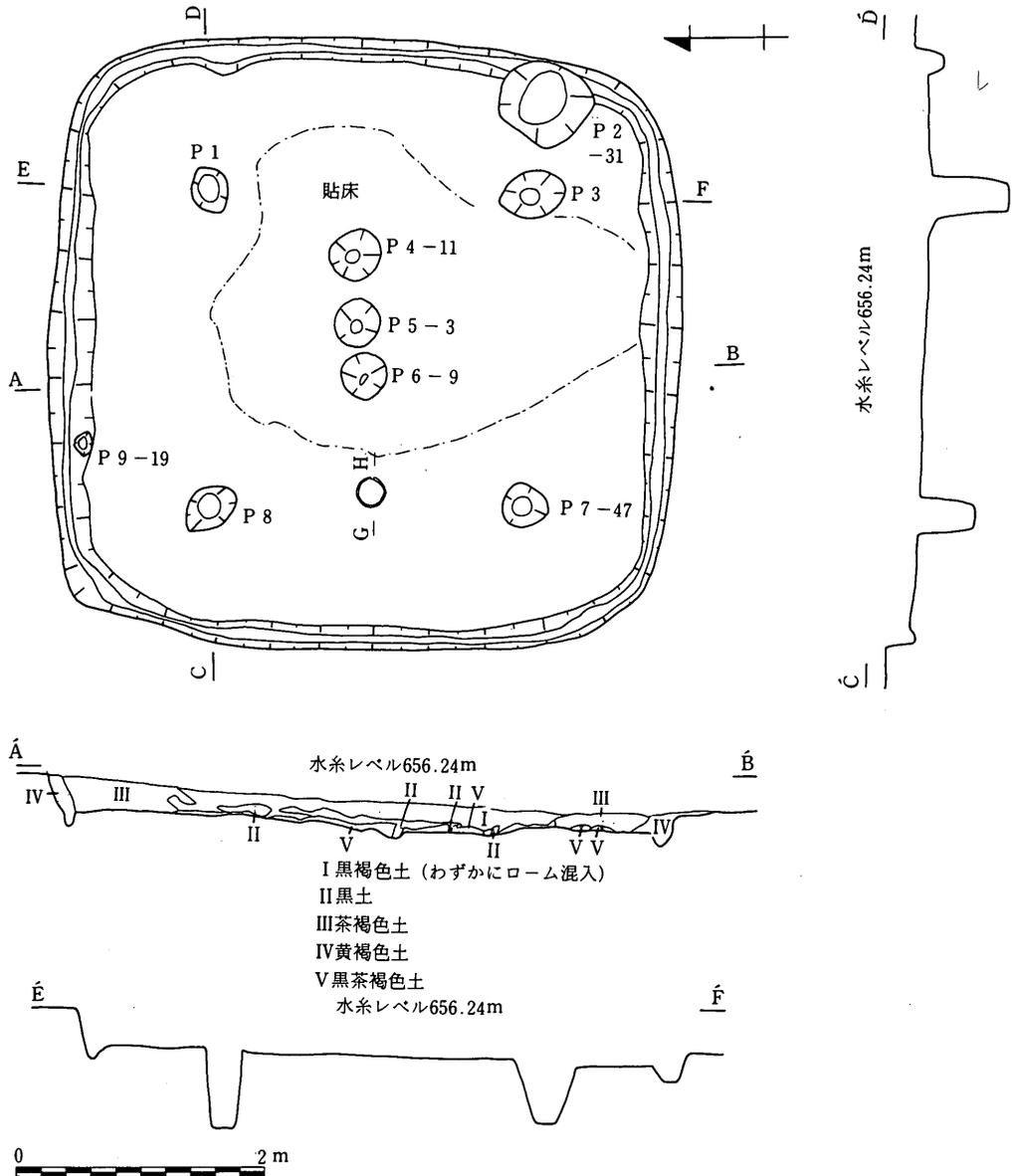
(I) B-1号住居址 (第25図 図版17)

本址はB地区の最西端、北にB-7号住居址に近接して発見された。平面プランは隅丸方形を呈し、南北5m10cm位、東西4m90cm位の規模を持っている。壁高25cm内外を測り、ゆるやかに外傾

している。

床面は大般水平であったが、ところどころにブロック的な凹凸があった。その硬度はやや硬かった。床面中央部付近は貼床状を呈していた。壁面直下に幅20~30cm内外、深さ5~10cm位の周溝が全周していた。

柱穴は典型的な4本主柱穴の形態をとっている。中央部付近に存在するP4、P5、P6は間仕切りのなピットと思われる。P7とP8のほぼ中間地点に弥生時代終末期の埋甕が逆位状態で検出され、これは埋甕炉の形態を成していた。よって、本址は弥生時代終末期の竪穴住居址となった。

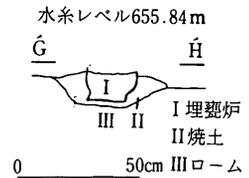


第25図 B-1号住居址実測図

(2) B-3号住居址 (第27・28図 図版18)

本址はB地区発掘地点の中央部付近、西側にB-2号住居址、東側にB-4号住居址に近接した位置に発見される。本址は重複もなく、覆土は黒味が強かったので、検出は容易であった。

プランは隅丸方形であり、プラン検出土層面までには表土面より60cm位下っていた。規模は南北5m55cm位、東西5m25cm位を有す。壁高は40cm～50cm位を測り、割合に良好であった。つまり、本址は典型的な竪穴住居址の形態をとった。壁面はやや外傾を呈し、堅く叩いてある。



第26図 B-1号住居址
埋壺炉断面図

床面はかたい叩きで、ところどころブロック的な凹凸があった。壁面直下に幅5cm前後の断面u字形状の周溝が多少は蛇行しながら全周していた。床面上に存在する柱穴でP5、P4、P14に接して多量の炭化物が検出された。これらの事例は本址が火災にあったことを実証してくれる。全般的にみて、多量の炭化物は中心部に向かって放射状に存在していた。

主柱穴はほぼ等間隔に4本方形に配されており、それらはP4、P5、P12、P14であった。床面中央部に存在するP6、P7、P8の3つのピットは間切りの用途を有すると推測される。

炉は住居址の西側に寄った、P12、P14のほぼ中間点に位置し、埋壺炉の形態を成し、それは正位で埋めてあった。壺の周囲には多量の焼土が充満しており、鮮明な赤色を呈していた。壺は下半分は欠損しており、廃品を利用した事実を明瞭に実証してくれた。

埋壺炉に使用した土器からみて、本址は弥生終末期に位置づけられよう。

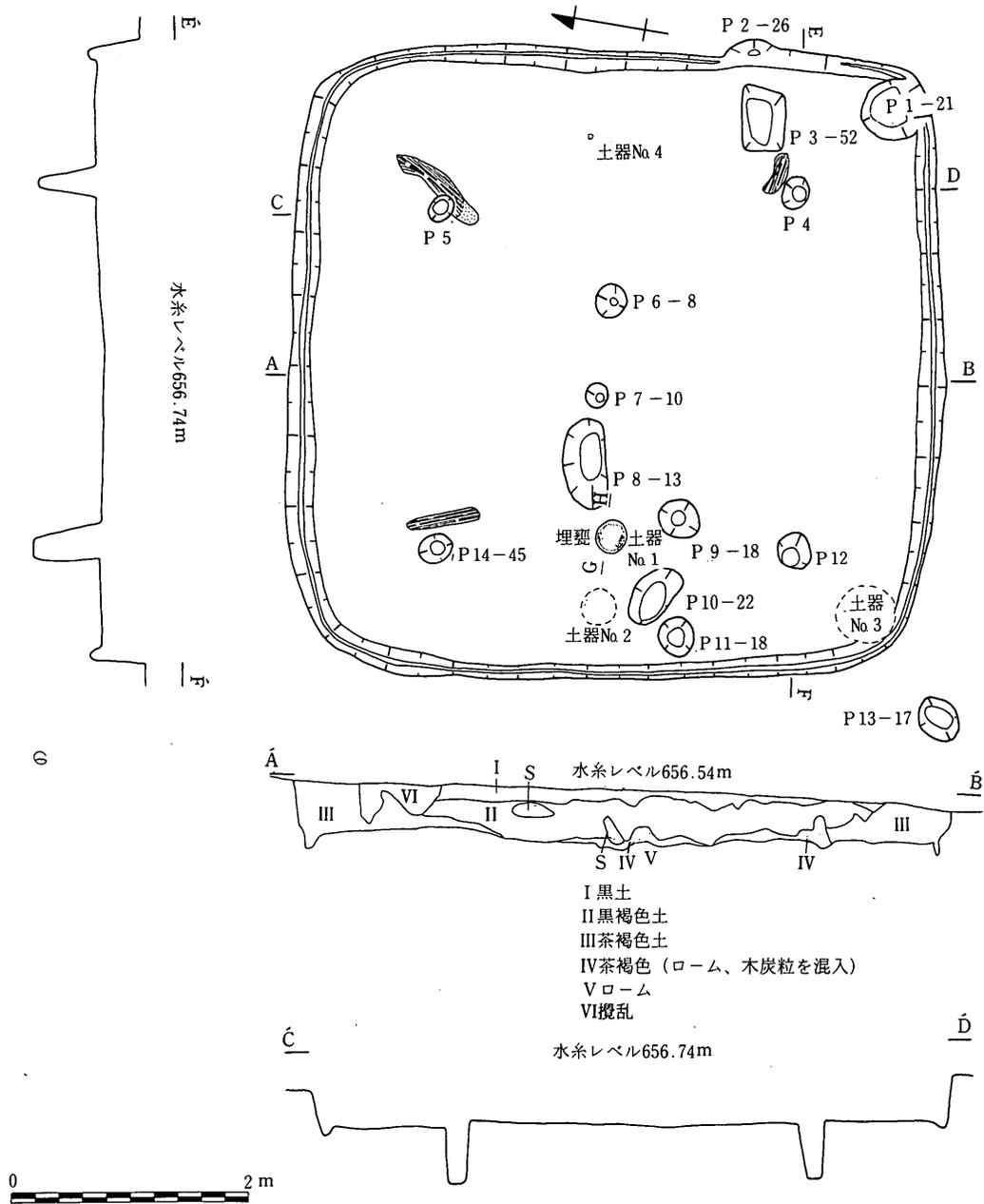
(3) B-5号住居址 (第30図 図版18)

本址の検出された付近には何も遺構は検出されなかった。プランは隅丸方形で、ローム層を50cm前後掘り込んだ竪穴住居址である。規模は南北5m50cm、東西6m5cm前後を測る。壁は外傾気味で、軟弱状態だった。

壁面直下に10cm前後の周溝が回っていた。周溝はところどころでわずかに波を打つように屈曲していた。床面は大般水平で、ローム層を堅く叩いて構築してあった。

柱穴は30本近く検出されたが、主柱穴は4本で構成されていると思われる、それはP3、P8、P11、P18であり、これらはほぼ等間隔に方形に配してある。主柱穴の形状は円形状を呈している。主柱穴を中心にして、北壁に4本、南壁に3本それぞれ列状に補助的なピットがそれぞれ認められた。前者のそれはP12、P14、P17、P19、後者のはP2、P5、P7であった。床面中央部付近を東西に4本ピットが存在し、それはP1、P4、P9であり、これらは、存在している位置からみて、間切りの機能を兼備したピットと推測される。

炉は北壁に近いP18、P11の主柱穴の中間地点の床面下に土器を埋めた、いわば埋壺炉の形態を成している。埋壺炉の周囲には赤々と多量の焼土堆積が見られた。埋壺炉に使用された壺は口頸部から上、胴下半部から下をそれぞれ欠損していた。炉に使用していたので、全体が赤く変色して破損しやすい状態を呈していた。



第27図 B-3号住居址実測図

床面上に多量の木炭が散乱しており、あるいは火災にあったのかも知れない。また、同面上に存在する石は花崗岩製が主で、おそらく天龍川原へ行って採集してきたのであろう。

本址は弥生時代終末期頃の住居址と思われる。

第3項 古墳時代

(I) 古墳 (第24図 図版17)

今回の調査で検出された古墳は近くに現存する八基の本城古墳群にかつては加わっていたのであろう。殿島城築城以前まではおそらく墳丘を有していたが、築城に墳丘は破壊されたのであろうことは相違ないと思われる。

今回検出された個所の墳丘は破壊されたため、周溝の部分だけが存在した。尚、西側の一部は用地外の為に今回は調査できなかった。

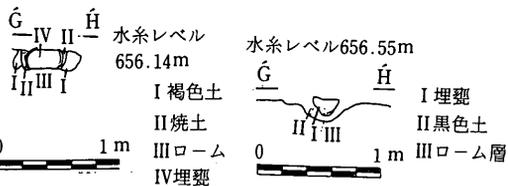
構築時の規模は周溝のカーブから想定するに直径13m50cm位の円墳を呈していたと思われる。古墳の主体部と推測される部分に、また、周辺に石の散在が全くなかった。このことからみて、主体部は木棺直葬の形態を成していたのではないかと推測される。

周溝は南側の一部分で途切れているが、これはおそらく、古墳の入口であろう。

周溝の上幅は1m～2m位、底面幅は1m～50cm位、深さは15

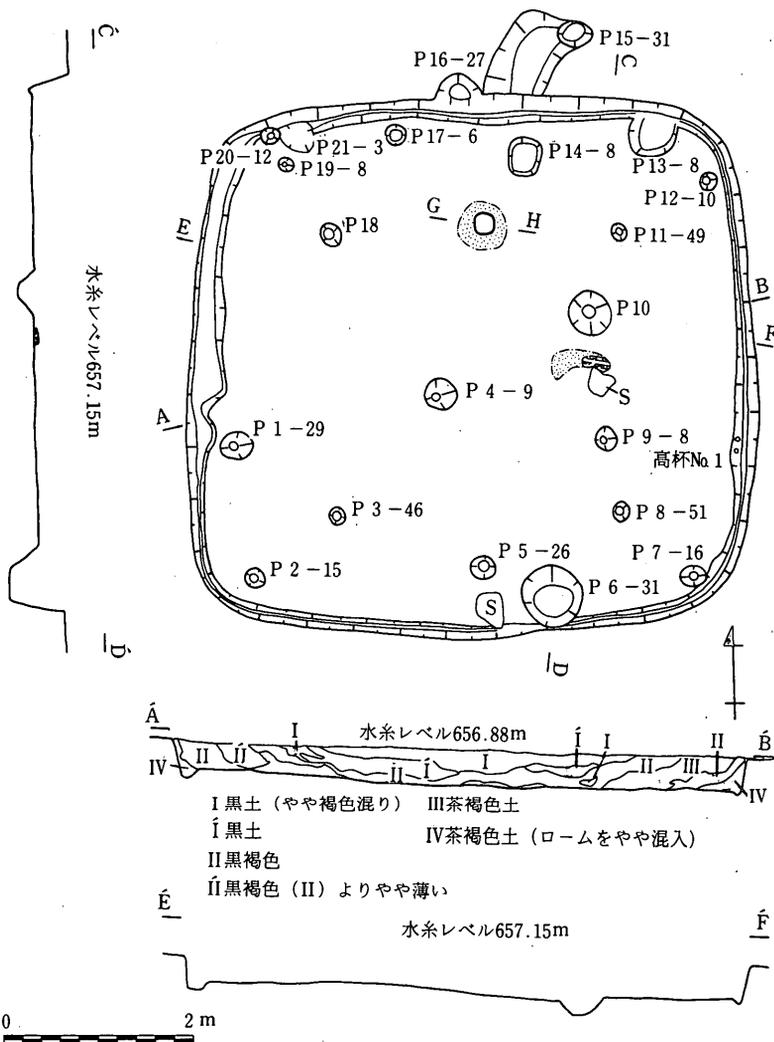
cm～45cm位を測る。壁面はなだらかで、軟弱で、従って崩落しやすい状態であった。

遺物の出土は何も無かったが、周辺の現存している古墳の状態、あるいは古墳の分布状態からみて本古墳は後期群集墳に含まれると思われる、従って、6世紀後半から7世紀前半頃に編年づけられると思われる。



第28図 B-3号住居址 埋壙炉断面図

第29図 B-5号住居址 埋壙炉断面図



第30図 B-5号住居址実測図

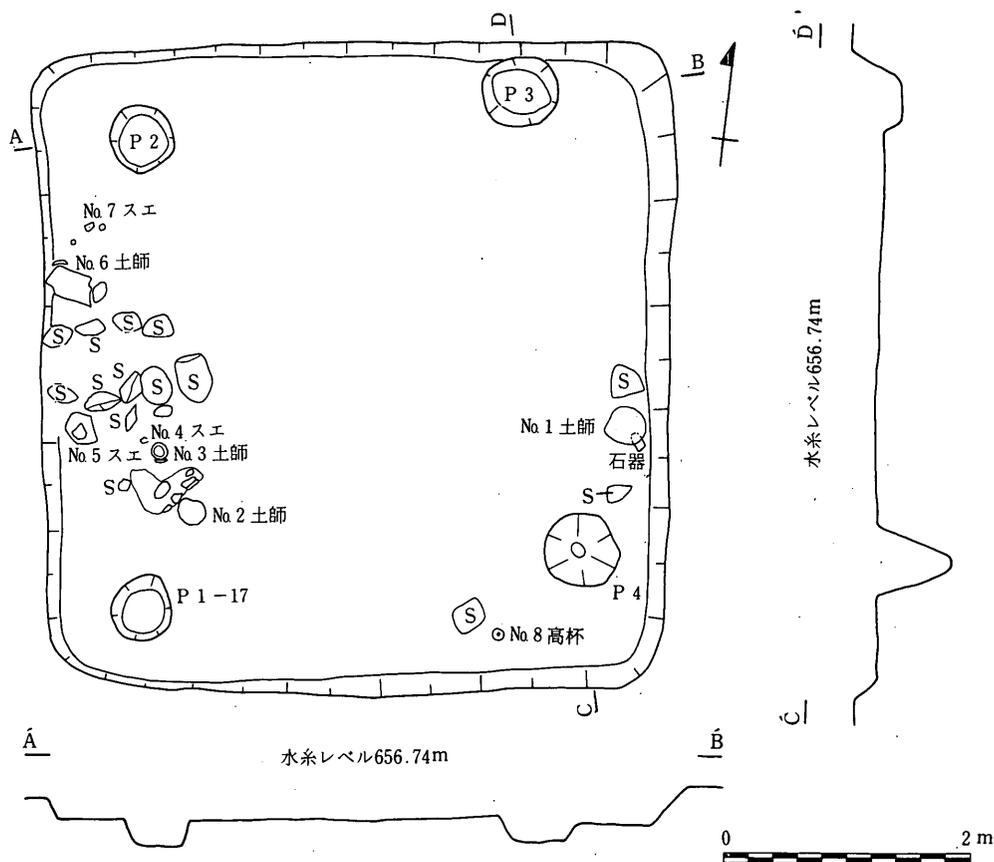
(2) B-2号住居址 (第31・32図 図版1)

本址は西側にB-7号住居址、東側にB-3号住居址、南側にB-1号住居址にはさまれた位置に検出された。表土面より30cm位下ったローム層面を掘り込んだ竪穴住居址である。隅丸方形の平面プランを呈し、規模は南北5m25cm位、東西5m5cm位、壁高20cm位を測る。

壁面は外傾がやや強くなっている。かたく、若干凹凸が認められた。カマドは西壁の中央部に位置しており、その形状は石芯粘土カマドと思われるが、粘土はほんの微量使用されていたのに過ぎなかった。カマドの残存状態は極めて良好であった。

床面は大般水平で、堅くなっていた。カマドに、あるいは床面上に使用されていた石は緑泥岩や花崗岩がその主体を占めており、天竜川から運搬してきたのであろう。柱穴は四本支柱穴である。それはP1、P2、P3、P4であり、その形状は円形状を呈している。これらの規模を記すと次のようになる。P1は南北50cm、東西48cm、深さ23cm。P2は南北55cm、東西54cm、深さ25cm。P3は南北55cm、東西55cm、深さ25cm。P4は南北58cm、東西61cm、深さ60cm。

遺物は土師器甕、土師器高杯等々、相当量出土しており、それらの土器片からみて、鬼高期の住居址であろう。従って、近く存在する古墳群の関係をも考えてみる必要がある。



第31図 B-2号住居址実測図

第4項 平安時代

(1) B-4号住居址 (第33図)

本址はB地区発掘調査区のほぼ中央部付近に検出された竪穴住居址である。表土面より40cm位下ったソフトローム層を掘り込んで構築しており、その規模は南北5m33cm位、東西5m70cm位を測る。

プランは隅丸形状を呈す。壁高は20cm位から45cm位を測り、やや外傾気味で軟弱であった。

本址の覆土は軟質のローム層に上から黒土、黒褐色土、茶褐色土が落ち込んでおり、一部攪乱土層も認められた。攪乱土層は床面中央部付近に検出された大きな土塊状遺構に埋まっていた。従ってこの土塊状遺構は住居址とは別時期と考えると良いと思われるが、その時代決定は何も出土していないので不詳である。ただ埋没した攪乱土層の状態からみて、本竪穴住居址よりも新しいことは確証されるところと思われる。

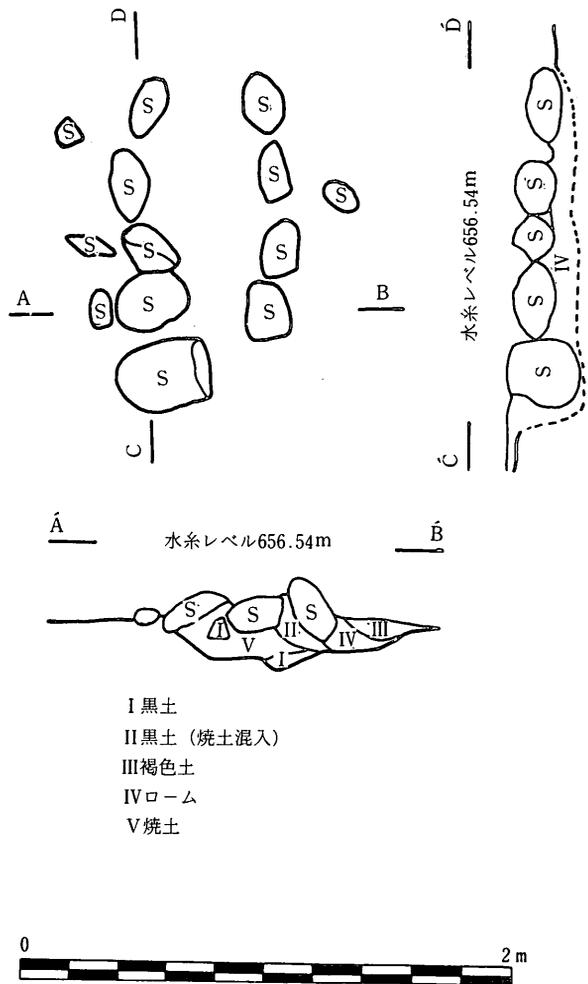
床面は堅く、ところどころで大きな凹凸がある叩き床が主で、部分的に黒褐色土を混合した貼床も認められた。壁面を一周して幅5cm位～15cm位の、深さ10～20cm位の断面u字状形の周溝が全周していた。

ピットは全部で14本検出されたが、そのうち支柱穴となりそうなのはP1、P5、P10、P11の4本と想定され、P14のように壁外に斜目状に穿けた柱穴も確認された。

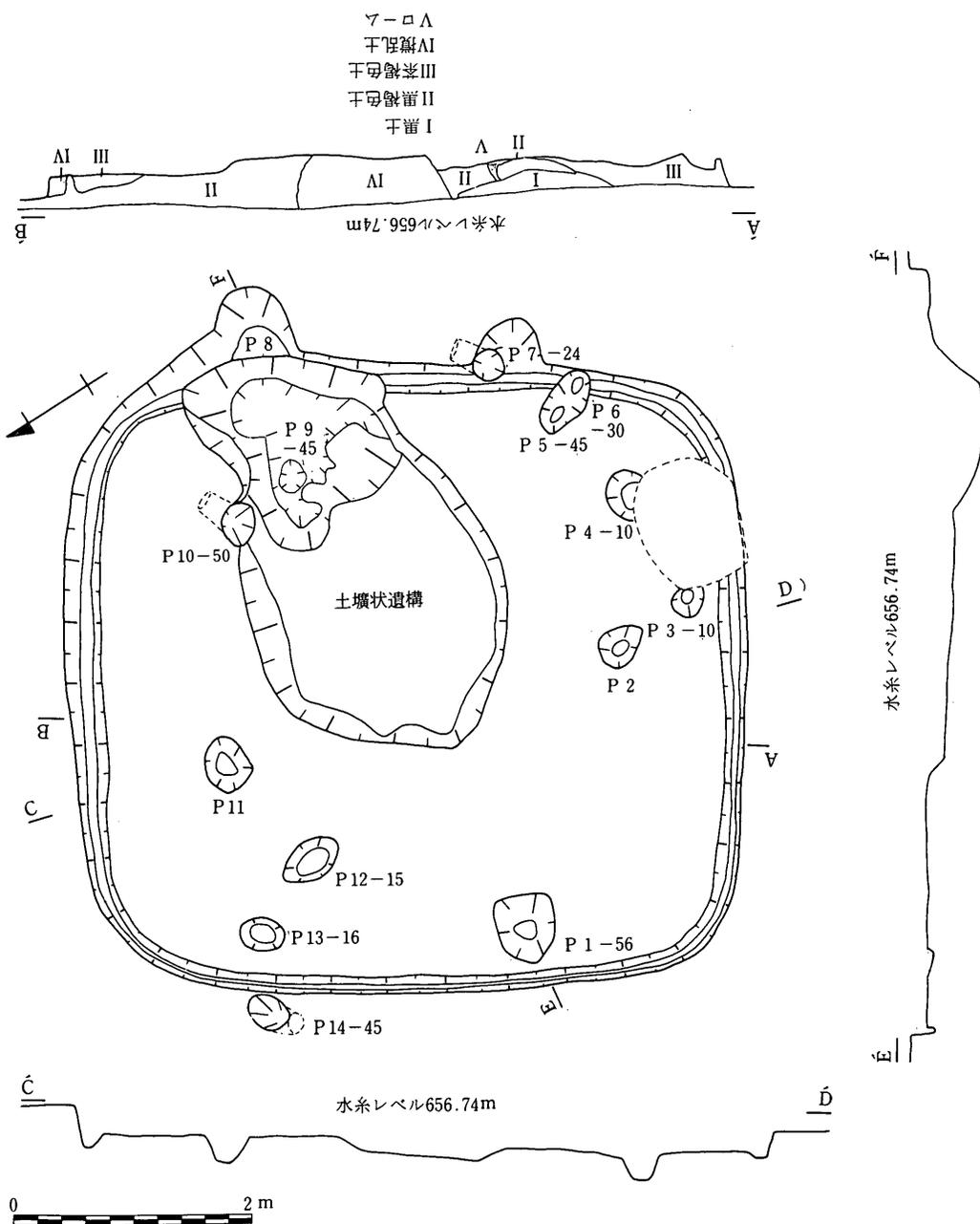
遺物として、土器類は全く出土しなかった。ただ、鉄製紡錘車が1点出土した。形態からみて、これは平安時代に属しており、よって本址は平安時代に位置づけられよう。ただ、平安時代の住居址にはカマドのあるのが一般的であるが、本住居址にはカマドの存在は発掘時点では確認できなかった。床面中央部付近の土塊状遺構が破壊してしまったのであろう。

(2) B-6号住居址 (第34図 図版20)

本址はB地区で検出された遺構群中、東側の位置にある。角がカーブを描く、不規則な隅丸方形



第32図 B-2号住居址カマド実測図



第33図 B - 4号住居址実測図

状プランを呈し、規模は南北3 m75cm位、東西4 m40cm位、壁高30cm位を測る。

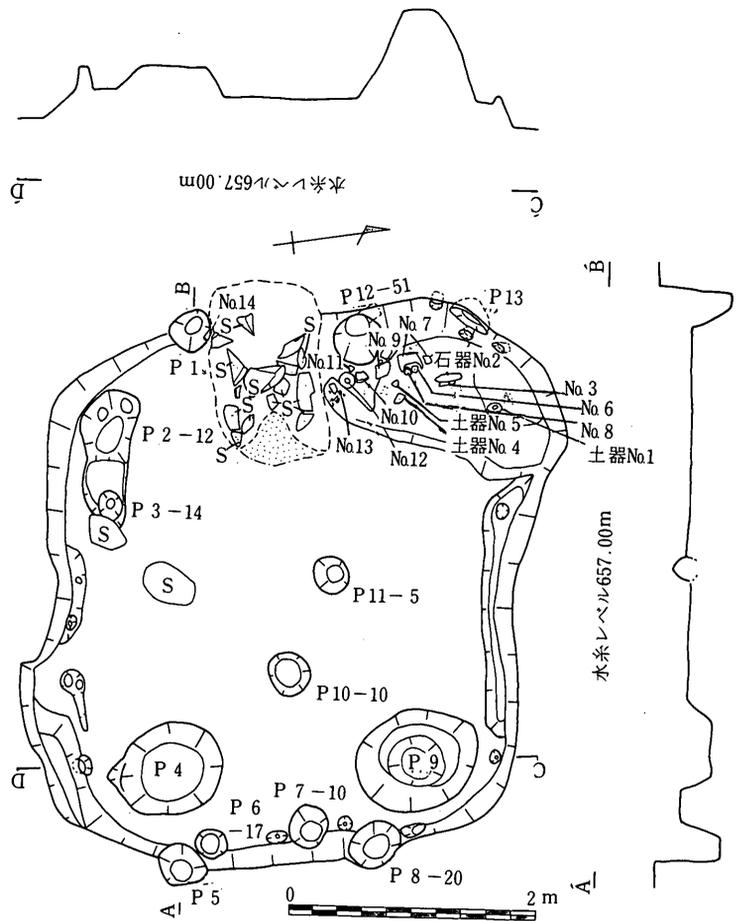
覆土の下層はローム粒混入の茶褐色土であった。カマドは西壁の中央部付近の壁内に構築されており石組粘土カマドであった。カマドとしては袖石、支脚石ともしっかりと残っており、しかも煙道の道筋もはっきりと認められた。

壁面はやや外傾を呈し、堅くなっていた。床面はかたく叩かれており、ブロック的な起伏が認められた。北壁面直下の床面の一部に周溝が若干カーブを成しながら残存していた。

隅の大きくてタライ状のピットが主柱穴となりそうであり、これらの壁面及び底面は堅く叩いてあった。

遺物は第34図B-6号住居址実測図に図示したようにカマドの北側に数多く出土した。これらの遺物が出土した地点は若干凹み状になっていた。主な遺物は土師器耳皿、灰釉陶器

器坏、灰釉陶器段皿であった。従って本址は平安時代中期頃の住居址と思われる。



第34図 B-6号住居址実測図

第5項 中世

(I) B-1号竪穴 (第36図 図版20)

本竪穴はB地区で最北端に近いところに検出された。表土面より30cm位下った軟弱ローム層面を1 m30cm位掘り込んで構築してある。平面プランは隅丸長形状を呈し、規模は南北2 m50cm位、東西3 m60cm位を測る。

覆土は層位堆積の状況によって、人為的な埋没の仕方をしている。北壁と南壁はやや外傾している。東壁と西壁の上面は外傾が強く、中・上部は垂直に近くなっている。四壁の上面はソフトローム層、中・下部はハードローム層より成り立っている。

床面はハードローム層に築かれており、堅く、若干凹凸があった。南壁直下と北壁直下には溝状的な遺構が走っていた。柱穴は西壁と東壁にそれぞれ接し、3本づつ等間隔に配列してあった。東壁上面にピットが2本並んで存在していた。

遺物の出土は何も無かったが、遺構の状態からみて城に関係したものと思われる。

(2) B-2号竪穴

(第37図 図版20)

B-1号竪穴の北側に検出された竪穴で、掘り込み面までのレベルはB-1号竪穴とほぼ同一である。

平面プランは隅丸方形を呈し、規模は南北2m60cm位、東西2m20cm位を、さらに深さは40cm位を測る。

北壁は急傾斜、その他三壁はやや外傾していた。

床面は大般平坦でかたくなっており、浅かったので床面はソフトローム層面自体につくられていた。また、同

面上に存在する石は天竜川産の硬砂岩、緑泥岩であった。

遺物の出土は何もなかった。柱穴が全く存在しない点は他の竪穴と異質である。

(3) B-3号竪穴 (第38図)

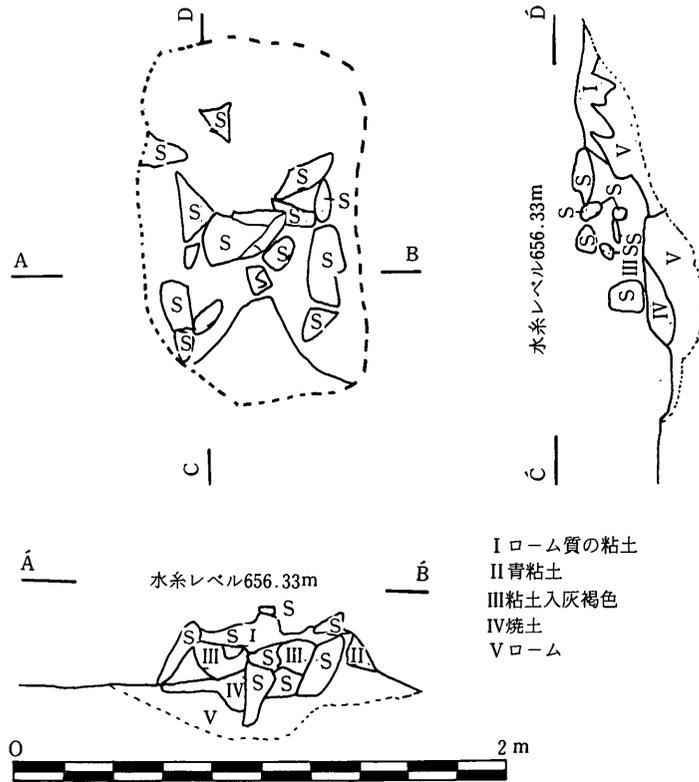
B-1号竪穴の南東の位置に検出された竪穴で、軟質ローム層を30cm前後掘り込んで構築してある。南北1m65cm位、東西1m95cm位の規模を有し、隅丸形状を成す。壁面は四壁ともやや外弯状態を呈して、軟弱気味。床面は凹凸が多く、軟弱気味。遺物の出土は何もない。

(4) B-2号溝址 (第39図 図版21)

B地区の最南端部に東西に走る溝状遺構で表土層面から60cm位下ったローム層を掘り込んで構築してある。最大幅は2m近く。最少幅は1m位であり、深さは30cm~50cm位を測る。溝の中央部付近で溝が切れており、何か入口的な所ではないか、ところどころにブロック的に拳大から人頭大程の河原石が存在していた。

この石は大部分硬砂岩や緑泥岩であり、天竜川から運搬してきたのである。溝底は東から西へやや傾斜しており、東から西へ流れたのであろう。溝底には赤く変色した鉄分の沈澱が各所に認められた。遺物の出土はない。

(飯塚 政美)



第35図 B-6号住居址カマド実測図

第三章 遺物

第1節 A地区

第1項 土器 (第40～43図)

第40図に掲載した土器片はA地区で表面採集されたものである。器厚7mm程度で中厚手に属し、明茶褐色を呈し、焼成は良好で、少量の長石を含んでいる。文様構成は口縁上部に二条の沈線が横走している。加曾利B式一派と思われる。



第40図 縄文土器拓影
(1:2)

第41図(1～8)は弥生土器である。(1)はA-2号住居址埋甕炉に使用された土器である。口頸部と胴下部を欠損している。口頸部に数条からなる櫛描波状紋が横走している。赤黄褐色を呈し、焼成は中位、胎土に大きな長石や砂粒を含んでいる。

第41図(2～8)はA-5号住居址出土した土器であり、調査の過程で集中的に出土したのにはNoをつけ、(2)はNo.2、(4)はNo.1を明示してある。(2)は口縁径19.4cmを有し、平縁口縁で、口頸部は鋭いくの字状で外反する甕型土器である。口縁部文様は無数にわたって波長の長い櫛描波状文が横走している。口頸下部から胴上部にかけては10数本のヘラ先による沈線をほぼ直線状に配す。胴部主体文様帯は5本一束単位で大きな波の波状文が右上がりから左下がり気味で入り、これらの文様帯間のわずかな空白部は無文帯となっている。内面は主壁にわたってヘラ磨きが行きとどいている。外面のところどころは火を受けて変色している。この現象は埋甕炉に使用されたのではないかと思われるが、ただ、出土状況からみて、このことは現段階では確認できない。

色調は赤褐色を呈し、焼成は良好で、多量の雲母、長石、石英粒を含んでいる。

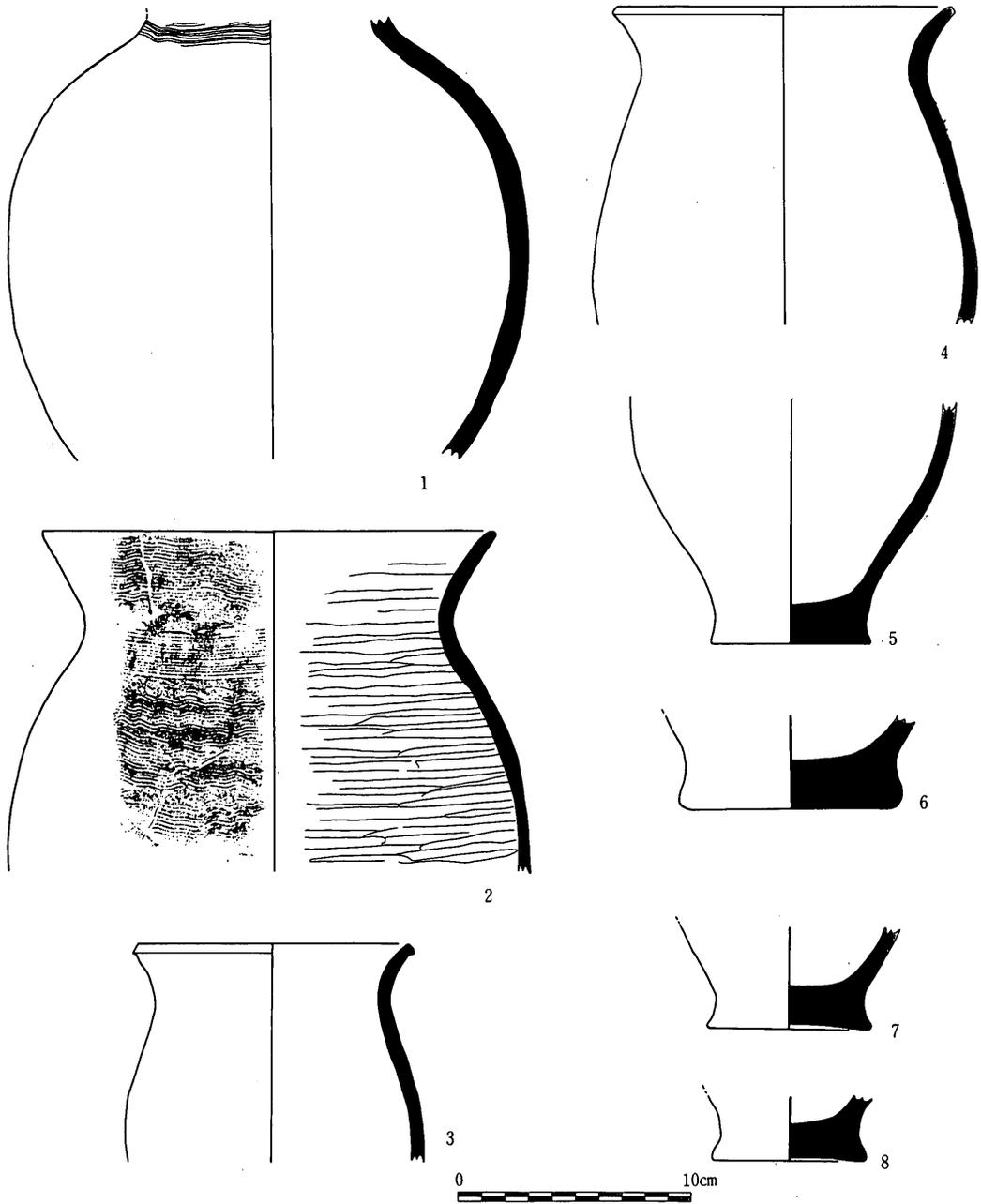
(3)は床面上より出土。口縁径12.1cmを測り、口唇は外そきで、口頸部はカーブを描きながら屈折する小型甕の一派である。内、外面ともにヘラ状工具による横ナデが見られる。赤褐色を呈し、焼成は普通、胎土中に微量の長石、石英を含む。

(4)は口縁径14.6cmを計り、口縁がくの字状に外反し、胴中央部付近で最大径を有する甕型土器である。内、外面ともに横ナデを施してある。色調は明茶褐色を呈し、焼成は良好で、胎土中に少量の長石、雲母、石英を含む。(5～8)はA-5号住居址より出土した底部破片である。(5)は現状図面からみて、胴部がややふくらむ甕型土器で、無文。内、外面ともに横ナデが多い。平底を呈す。明茶褐色を呈し、焼成は良好である。胎土に雲母、長石を含む。

(6～8)は屈折気味の底部破片であり、全て平底状を呈している。これだけの破片では器型の判断はつかない。赤茶褐色を呈し、焼成は良好で、少量の雲母、長石を含む。(1～8)は弥生後期中島式の新しい方に属していると思われる。

第42図(1～11)は土師器であり、そのうち(1～6)はA-1号住居址出土である。

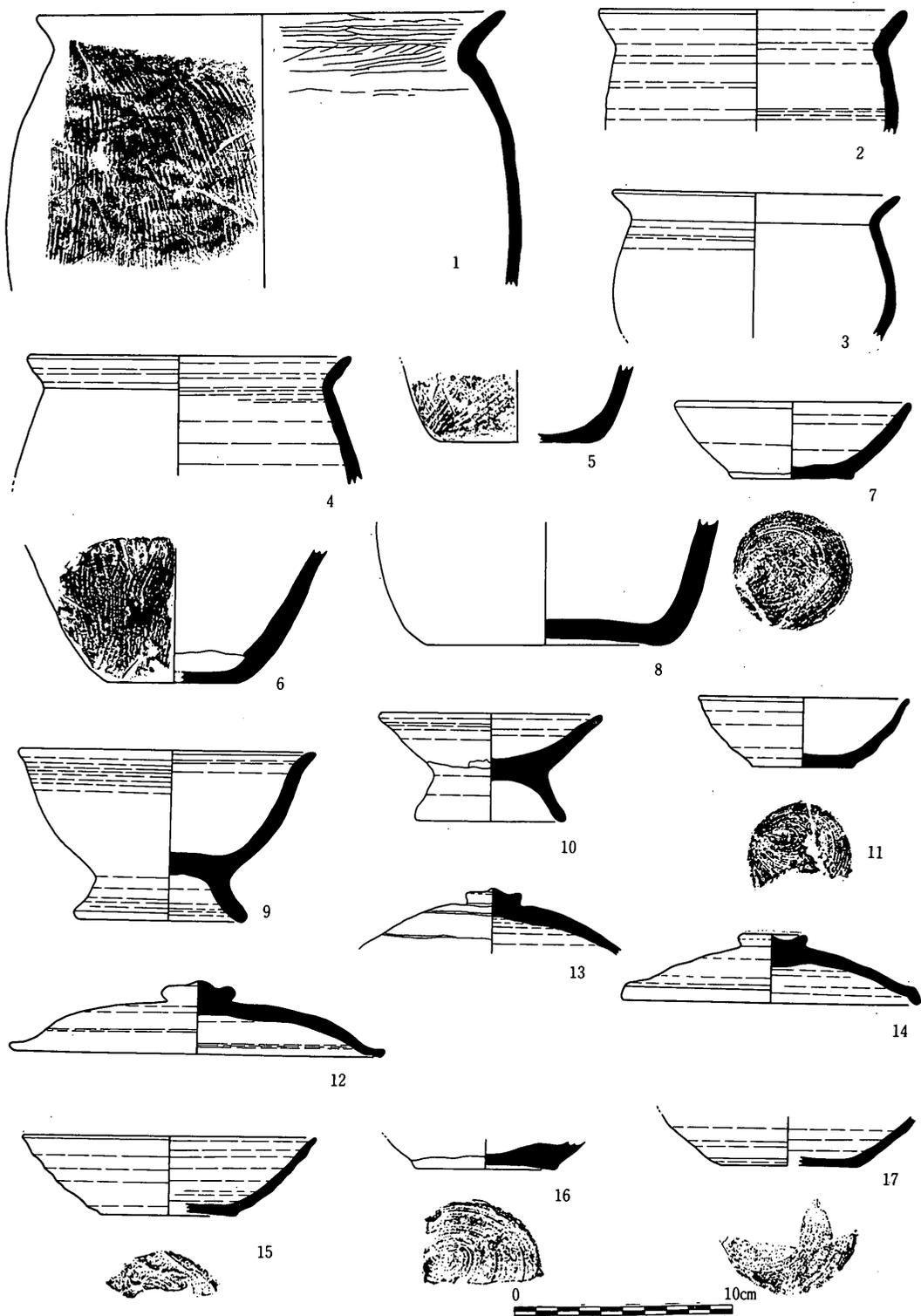
(1)は口縁径21.6cm、最大胴径23.4cm程を測り、口縁はくの字状に大きく外反し、口唇部はや



第41図 弥生土器実測図

や丸味を呈する甕型土器である。外面文様は縦位及び斜位の刷目、内面文様は横位の刷目をそれぞれ施してある。茶褐色を呈し、少量の雲母を含み、焼成は普通である。

(2～3)の現存破片部は全体の5分の1位であるが、破片よりの図上復元である。(2)は口縁径14.2cm、(3)のそれは13.3cmを測り、ともに大きくくの字状に外反している。(2)の口唇部は



第42図 土師器・須恵器実測図

やや丸味を呈するのに対し、(3)のは平坦になっている。ともにロクロの整形が見事である。色調は黒褐色(2)、赤褐色(3)を呈す。焼成はともに中位、少量の雲母を含む。(4)も(2、3)も同様に図上復元をした土器片である。法量等は実測図参照。口縁部は大きくくの字状に外反、口唇部はやや内そぎ状態を成す。黒褐色を呈し、焼成は良好で、多量の雲母粒を含む。(5～6)は平底を呈する破片であり、外面には斜目状のカミ目文様を施してある。黒褐色を呈し、焼成は普通、多量の雲母を含み、キラキラ光沢を放っている。(1～6)は平安時代の土師器である。

(7～8)はA-4号住居址より出土した奈良時代の土師器であり、(7)は同住居址No.2、(8)は同住居址カマド内よりそれぞれ検出されている。(7)は口縁径10.9cmを測り、わずかに外反し、口唇部は丸味を呈す坏である。内・外面ともにロクロ痕が顕著であり、糸切り底となっている。(8)はやや上底状を成し、内・外面ともにナデがよくみられる。色調は明茶褐色(7)、黒褐色(8)を呈し、焼成はともに良好、雲母を多量に含む。

(9～11)はA-3号住居址出土の平安時代土師器であり、その出土地点は(11)は覆土、(9)はNo.2、(10)はNo.1である。(9～10)は高台付坏である。(9)は口縁径13.7cmを測り、わずかに外反し、口唇はやや内そぎである。脚部はやや屈折気味、(10)は口縁径10.8cmを測り、直線状に口唇が走り、脚部はハの字状に開く。双方ともロクロ痕が顕著である。色調は黒褐色(9)、明茶褐色(10)を呈し、少量の雲母を含み、焼成は良好。(11)は口縁径9.7cmを測り、わずかに外反する坏で、口唇部はやや丸味を呈す。外面はロクロ痕顕著、糸切り底。赤褐色を呈し、焼成は良好。

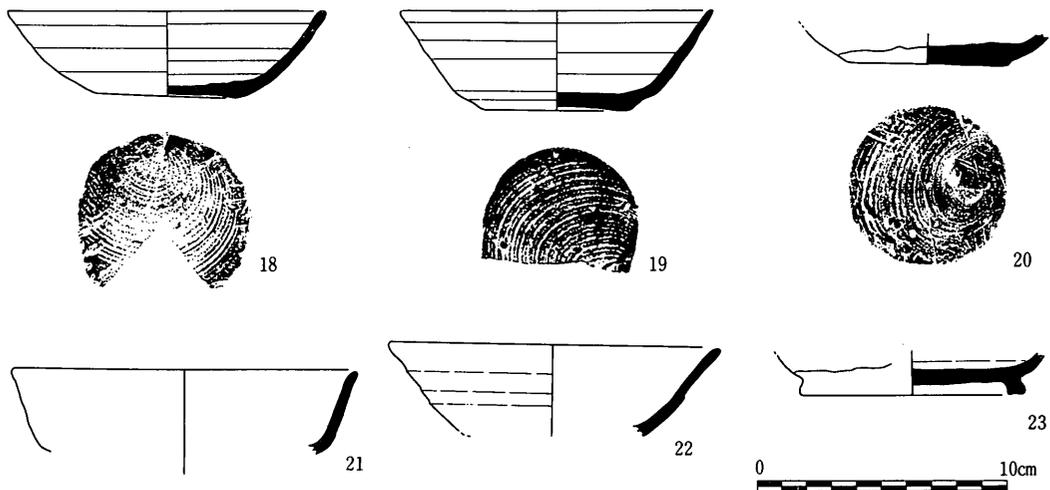
(12～17)は奈良時代の須恵器と思われる。(12～13)はA-1号住居址出土の須恵器の蓋。(12)はNo.1、(13～14)は覆土中よりの検出。(12～13)のつまみは中央部がややとびだす。(14)はつまみ中央がやや凹んで平坦を呈す。(15～17)はA-1号住居址出土の須恵器坏である。(15)はやや直線状の口縁を成し、(16～17)は底部破片で、(16)は上底で、(17)は平底を呈す。

(18～23)はA-1号住居址出土の須恵器坏である。これらは大部分が欠損しており、わずかな破片から図上復元をしたので、詳細な特徴は現段階では把握できない。(18～20)は糸切り底、(23)は高台を有している。色調は(1～23)まで須恵器独特の灰色や灰黒色を呈し、焼成は良好である。

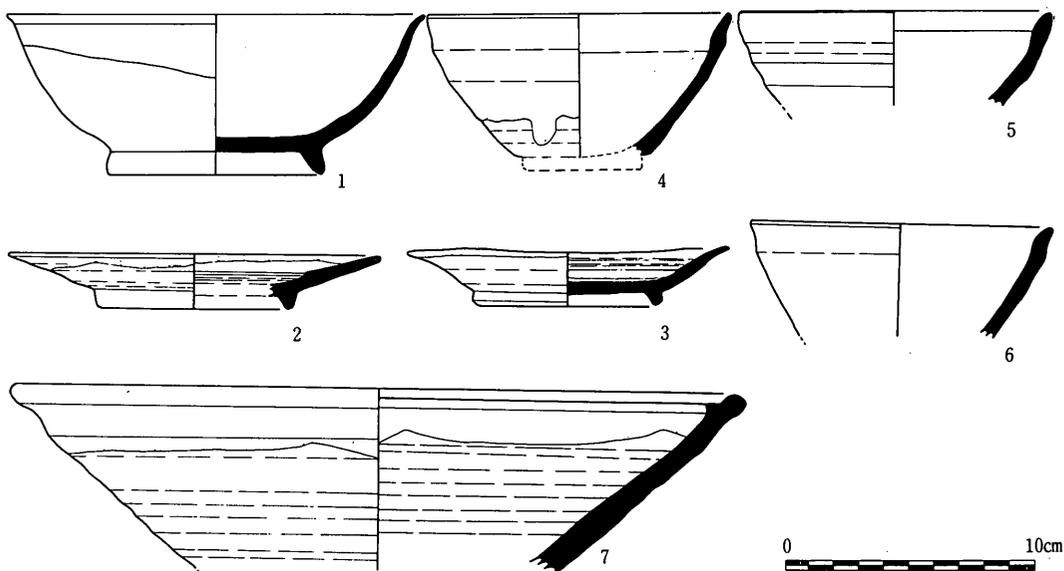
第2項 陶器及び内耳土器

第44図(1)は灰釉陶器碗である。口縁径16.7cmを測る。わずかに外反し、口唇部は丸味を呈する。外面の釉は薄く、内面のそれはやや濃い、高台は断面方形に近い。A-3号住居址No.1の出土である。(2～3)はA-7号住居址床面より出土した灰釉陶器である。(2)は口縁径14.9cm、底径7.9cmを測る段皿である。ロクロ整形痕が顕著であり、断面方形に近い高台を有す。(3)は口縁径13cm、底径7.7cmを測る皿である。口唇部は平坦に近い状態を呈す。ロクロ整形痕が明瞭で、良質である。断面方形に近い高台を有す。

第44図(4)は室町中期頃の古瀬戸天目茶碗である。天目釉の光沢は美しく、釉薬は下端部で溜状になっている。A-1号竪穴より出土。(5)は室町中期頃の古瀬戸天目茶碗である。天目釉の光沢は黒くくすんでいた。A-2号竪穴の柱穴より出土。(6)は室町中期頃の古瀬戸灰釉平茶碗である。灰釉の光沢は美しく、破片の内・外面全面に及んでいる。A-10号竪穴出土。(7)は室町中期



第43図 須恵器実測図



第44図 灰釉陶器・中世陶器実測図

頃の古瀬戸灰釉大平鉢である。口縁直下に一段を有する。釉薬は内・外面とも口縁上部に集中し、中・下部は無釉である。A-15号竪穴出土。

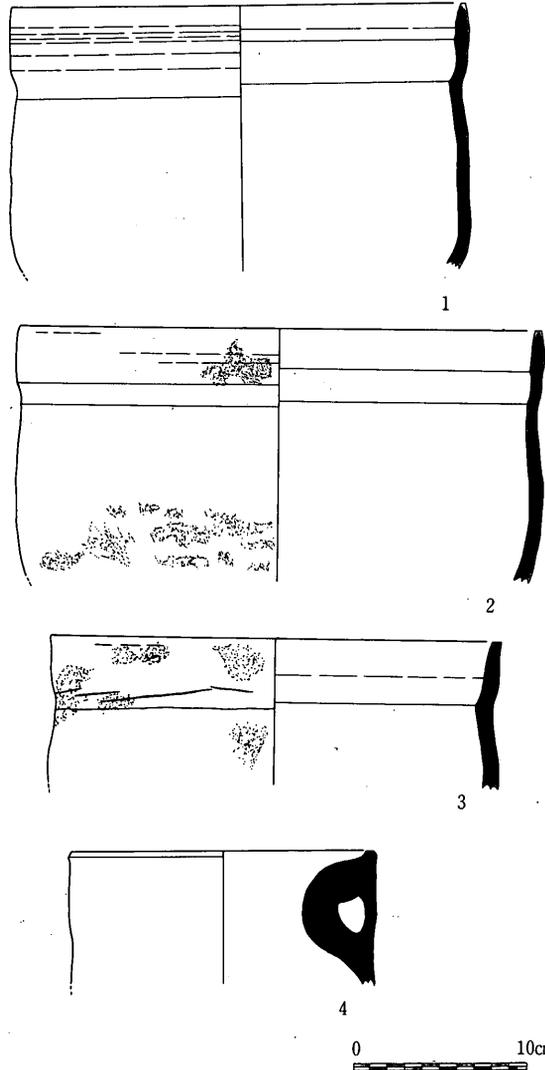
第45図に掲載したのは全て内耳土器類である。(1~3)はA-2号竪穴出土。(4)はA-13号竪穴出土。(1)は口縁径26.5cm、(2)は30.2cm、(3)は25.9cm、(4)は17.7cmを測る。

これらは図上に基づいて復元したので、内耳の有無は破片が小さいためによくわからない。ただ焼成は内耳質であった。(2~3)は外面に多量の煤が付着していた(第45図に点々で明示してある)。

(4)ははっきりと内耳の付着状態がわかり、いわば内耳土器としては小型化を呈している。

第3項 石器

第46図(1~2)はA-3号住居址床面上より出土した棒状石器であり、緑泥岩製の石を用い、一部分磨かれている(1)は上、下端の一部に打痕を認める、(2)の上端は欠損している。(3)はA-4号竪穴より出土した方形状の砥石である。砥石に使用した面は三面に及び、それらの面には金属製石を磨いた痕跡が線状に走っている。油性の石であり、形態からみて荒砥に含まれると思われる。



第45図 内耳土器実測図

第4項 金属製品 (第47図 図版26)

A地区出土の金属製品としては、鉄製の刀子2、鉄製の分銅1、銅製の切刃1の合計4点である。量的には少ない部類に含まれる。

刀子(第47図(1~2))

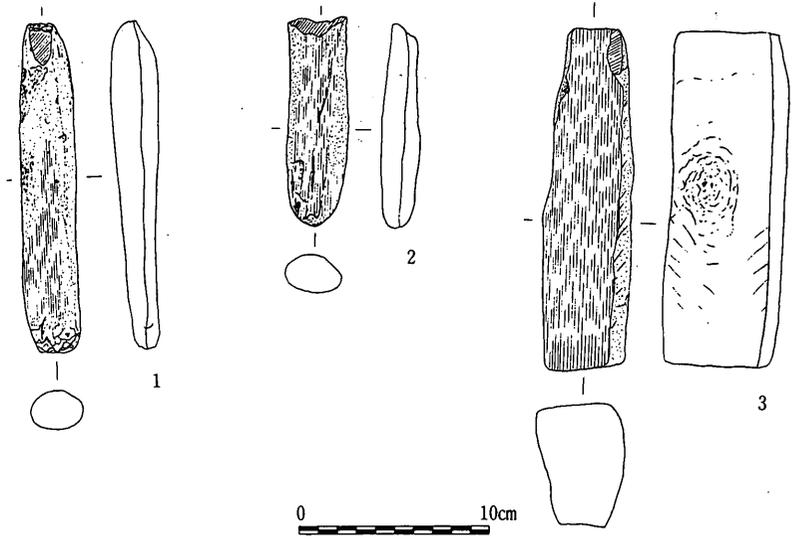
(1)はA-1号竪穴、(2)はA-2号竪穴よりそれぞれ出土。(1)は刀、(2)は柄の部分の残存が多い。ともに腐食度の進行が顕著である。前者は現長8.6cm、後者は現長10.3cmを算している。

分銅(第47図 図版26)

堀3-2セクション付近の堀の最底部で発見された天びんばかりに使用された鉄製の分銅である。底面は一辺1.4cm位の方形状を呈し、上部に断面円形状の釣手をつけてある。重さは50gを測る。腐食の度合はかなり進行している。出土層位からみて、堀の築造年代とほぼ一致すると思われ、よって、室町中期頃と思われる。

切刃 (第47図 (4))

堀3-2セクション
 付近の堀の底面
 で出土した銅製
 の切刃である。
 『切刃とは刀の
 鏢の表側、裏側
 に柄と鞘とに当
 たる部分に添え
 る板金。中ほど
 の刀身を貫く孔
 を設ける』(広辞
 苑より)。短径
 2 cm位、長径
 4.4 cm位、厚さ
 0.5 mm位を測
 り、長円形状を
 呈す。周縁は鋸
 歯状に模様をつ
 けて、裝飾効果
 を増している。と

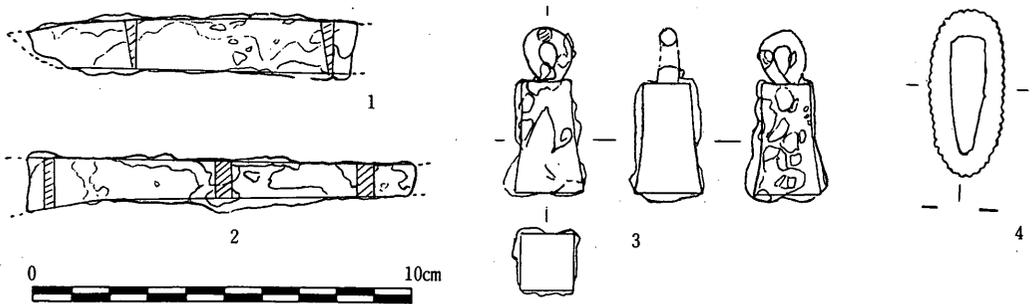


第46図 石器実測図

ところどころに青々と緑青が吹き出している。出土層位からみて、室町中期頃の作と思われる。

第5項 古 銭 (第48図)

第48図(1~3)はA-1号竪穴、(4)はA-3号竪穴出土。(1)は元祐通宝、(2)は永樂通宝、(3)は不明、(4)は熙寧元宝である。それぞれの鑄造年代は次の通りである。(1)は1093年、(2)は1411年、(4)は1068年である。(1・4)は北宋銭で、日宋貿易時に、(3)は明銭で勘合貿易時にそれぞれ輸入されたのであろう。

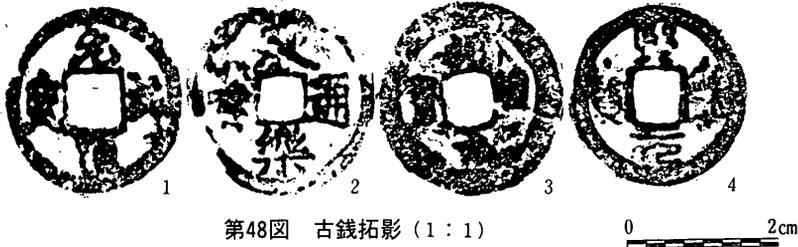


第47図 金属製品実測図

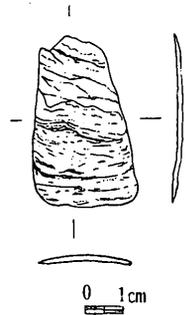
第6項 貝製品 (第49図 図版27)

A地区の表採で検出されたものである。三味線の撥に使用されたとと思われる。出土層位がはっきりしないので、時期決定は困難である。

(飯塚 政美)



第48図 古銭拓影 (1:1)



第49図 貝製品実測図
(1:2)

第2節 B地区

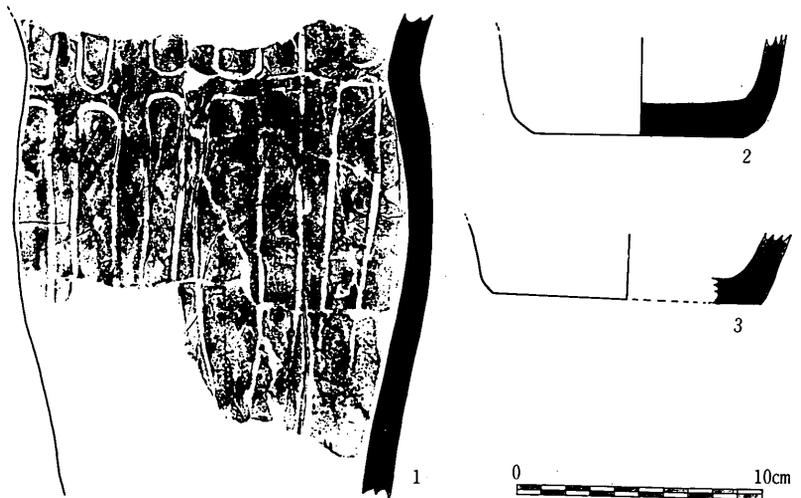
第1項 土器 (第50図)

第50図 (1~3) はB-7号住居址より出土した土器であり、(1) はNo.1、(2~3) は覆土内の検出である。(1) は上部、下部は欠損して、胴部の一部分だけ残存して最大胴径16.9cmを測る深鉢型土器である。無文地にヘラ状工具によって沈線を隅丸長方形状に上・下二段にわたって配してある。(2~3) は底部破片である。その他の特徴は3片ともほぼ同じである。色調は茶褐色、焼成は中位、少量の雲母を含む。縄文中期後葉加曾利E II式と思われる。

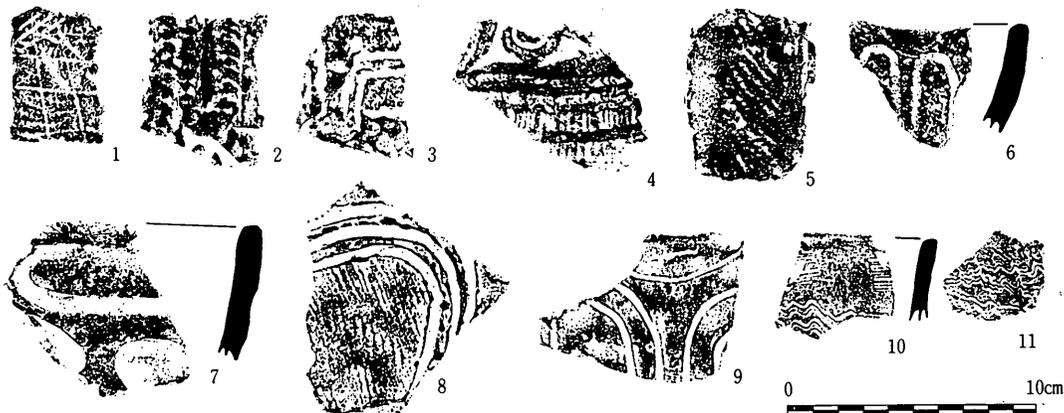
第51図 (1~9) は縄文中期、(10~11) は弥生後期に含まれている。(1) は斜縄文地へ細かく、鋭角の沈線を格子目状についてある。明茶褐色を呈し、焼成は中位、大量の雲母を含む、縄文中期初頭に位置づけられよう。(2~4) はB-7号住居址の覆土上層より出土した土器片で、意匠文の発達が目立つ。 (2) は隆帯上に大きな刻目をつけてある。(3) は隆帯の縁に細かな刻目を押捺、(4) は所謂キャタピラ文やムカデ文の隆盛がよくみられる。色調は黄褐色(2)、黒褐色(3)、赤茶褐色(4)を呈し、

焼成は三片とも中位、同じく胎土中に少量の雲母、長石を含んでいる。藤内式や井戸尻式に属していると思われる。

(5~7) は古墳の周溝内より出土した。ようするにおそらくB-7号住居址のものが古墳築造時に飛び込んだものであろう。斜縄文地に幅広の沈線が直線状



第50図 縄文土器実測図



第51図 縄文・弥生土器拓影

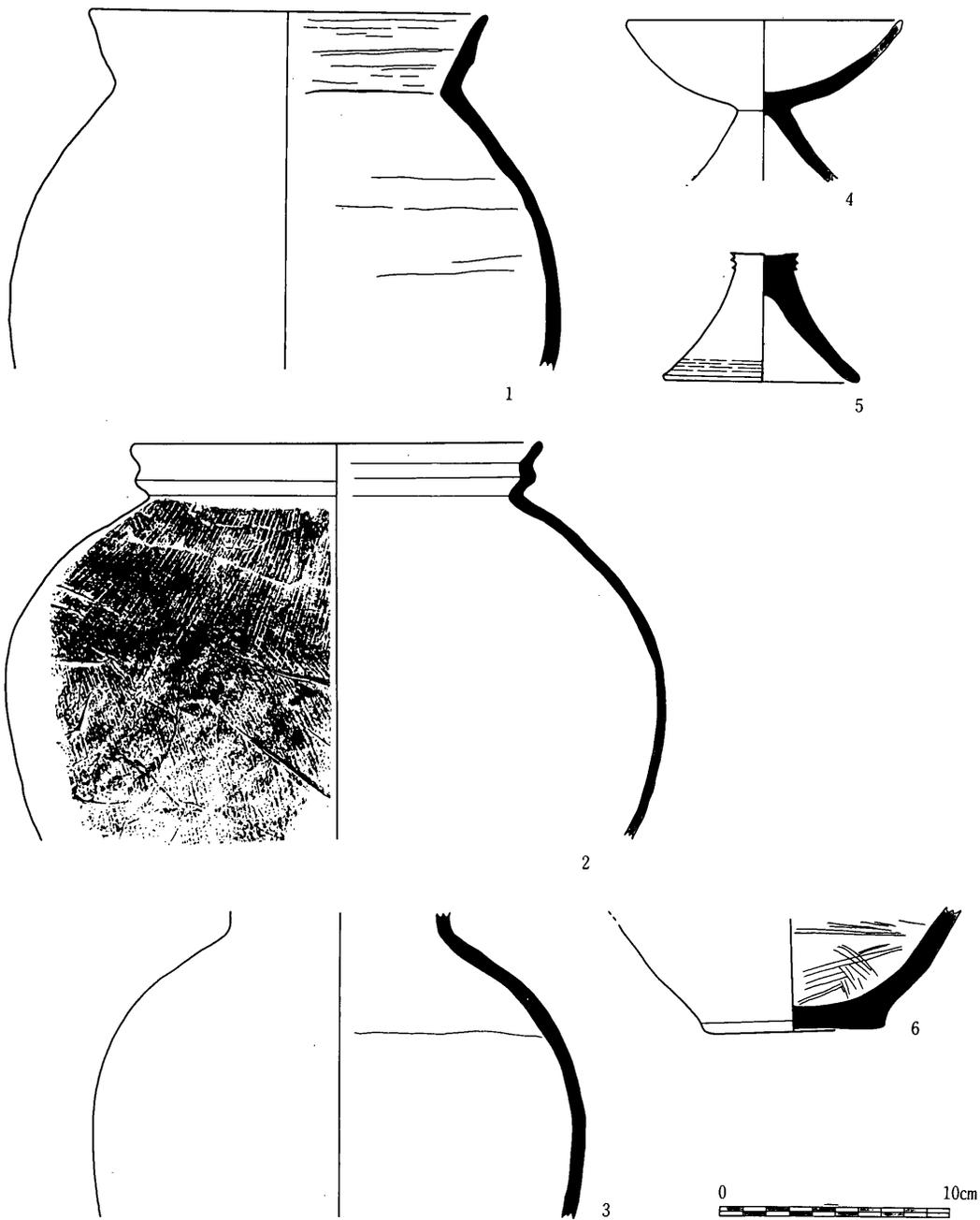
(5)、縦位弧状(6)、横位弧状(7)に配してある。色調は明黄褐色(5)、黄褐色(6)、赤褐色(7)を呈する。加曾利E II式頃に含まれよう。(8)は細かな斜縄文の上に沈線を3本ほぼ同心円状に配してある。(9)は無文地の上に弧状沈線を走らせてやや複雑化を成している。(8)は黒褐色、(9)は茶褐色を呈す。(8～9)は加曾利E II式頃に位置づけられると思われる。表面採集による。(10～11)はA-5号住居址より出土。櫛形波状文の最も流行する時期である。明黄褐色を呈し、焼成は良好である。中島式の新しい方に含まれると思われる。

第52図(1～6)は弥生土器を全て掲載してある。(1)はB-1号住居址埋壺炉、(2)はB-3号住居址埋壺炉、(3)はB-5号住居址埋壺炉にそれぞれ利用していた。(4～5)はB-5号住居址出土の高杯。(6)はB-1号住居址覆土より出土。(1～3)は最大径を胴部にもつ壺型土器であり、それは(1)は23.6cm、(2)は28.3cm、(3)は21.2cmを測る。(1～2)はやや直線状に外反し、口唇部は丸味を呈す。(1)は内・外面ともナデ整形、(2)の口縁部はやや複合口縁を呈し、櫛目文様の細線が斜走している。色調は3個の土器ともに赤褐色を呈し、焼成は中位である。中島式の新しい方に属すると思われる。

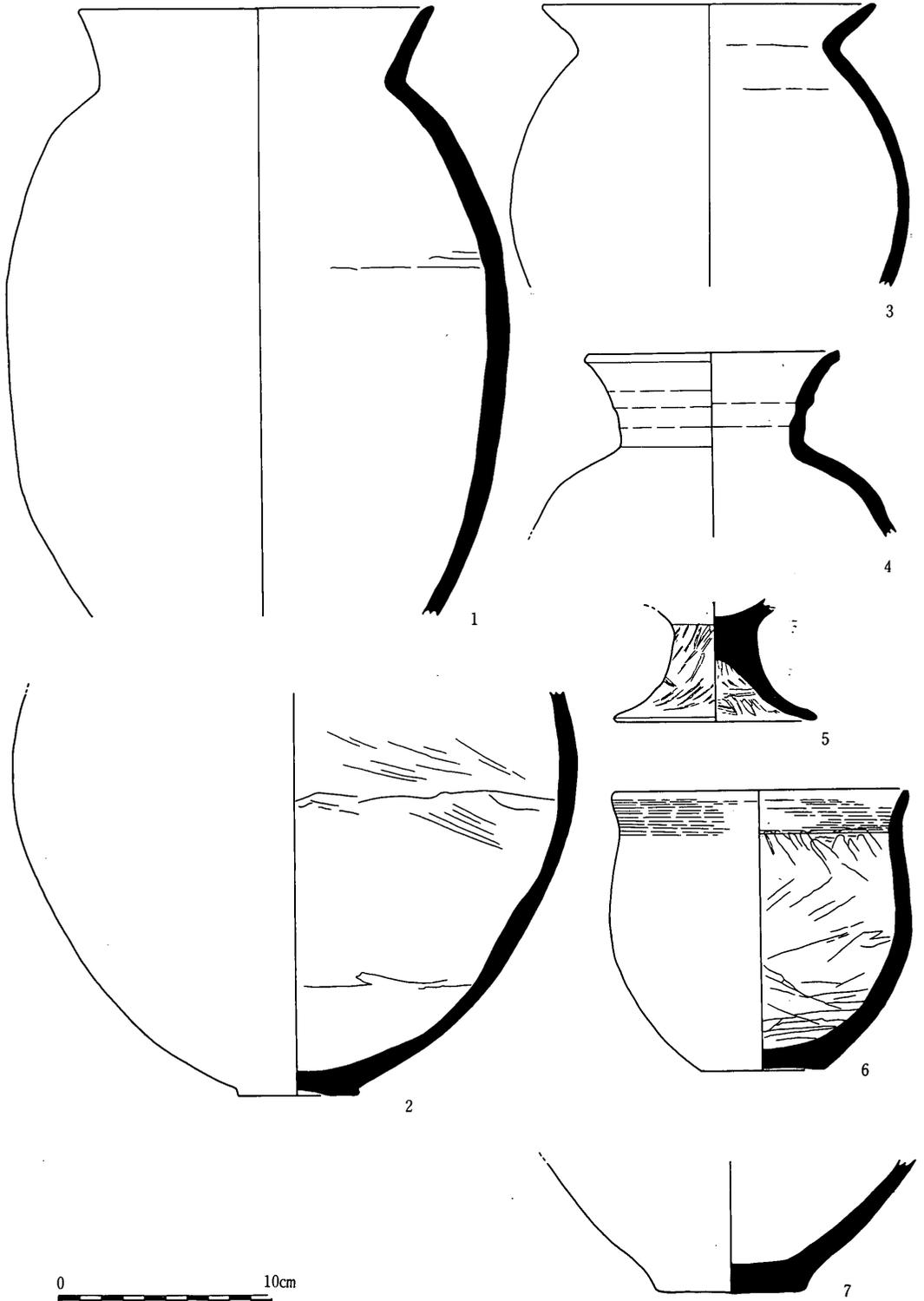
(4)は脚部の下端、(5)の坏はそれぞれ欠損している中島式の新しい方の高杯である。(4)は赤褐色、(5)は明茶褐色を呈し、焼成は良好である。(6)は前述した土器の時期とほぼ同じである。内・外面ともにナデ整形、茶褐色を呈し、焼成は良好。

第53図(1～7)はB-2号住居址出土の鬼高期の土師器である。これらの出土地点を記すと次のようになる。(1)はNo.1、(2～3)は床面、(4)はNo.3、(5)はNo.8、(6～7)はNo.2。これらは第31図B-2号住居址実測図の中に出土地点を明記してある。(1)は口縁径16.4cmを測り、胴部に最大径23.4cmを持つやや大型の胴張甕の一種かと思われる。(2～7)は胴張甕の底部である。全般的に平底状を呈している。(1・2・7)はともに赤褐色を呈し、焼成は良好、雲母、長石粒を少量含んでいる。

(3～4)は口縁部がS字状に外反し、肩部から胴部にかけて強く、丸く、張り出し気味の中型甕である。(1)の口縁径15.5cm、(2)のそれは、11.8cmを測る。内・外面ともにナデ痕を認め、



第52图 弥生土器実測图

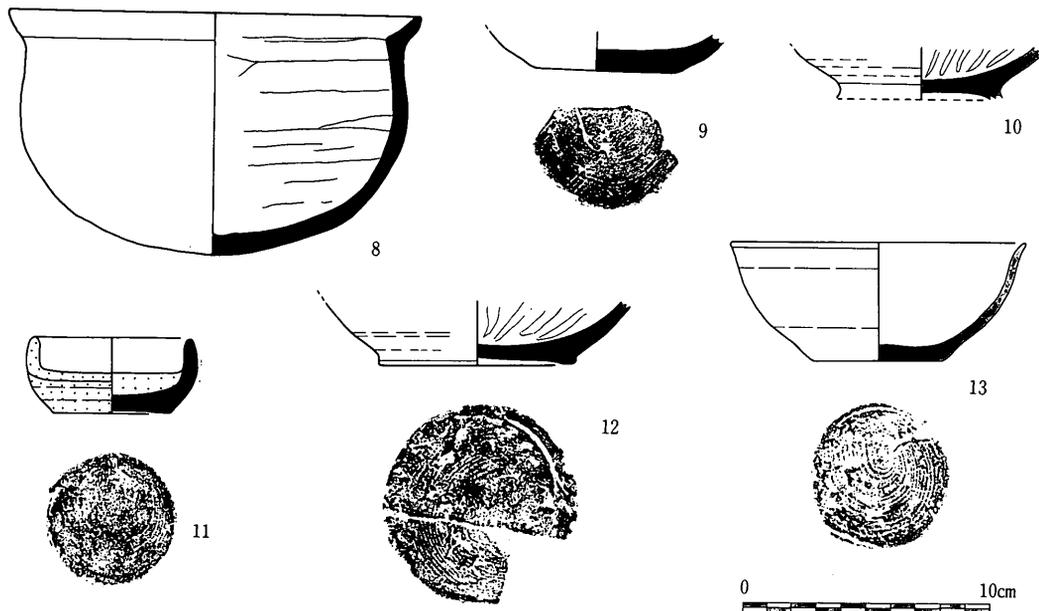


第53図 土師器実測図

焼成は良好で硬い。赤褐色を呈し、少量の雲母を含む。(5)は上部の杯が欠損している高杯で、脚部は太目で開いている。内・外面ともにナデ痕が顕著。堅く焼きしめられており、明茶褐色を呈する。(6)は口縁部がやや外反し、胴部は球形に張り出し気味で、底部は上底気味の小型甕である。口縁径13.7cm、底部5.8cm、器高12.8cmを計る。良質で硬く、明茶褐色を呈す。

第54図(8~11)は全て土師器である。(8)は口縁部が大きくくの字状に外反し、胴部は球形に張り出し、底部は丸底気味の小型甕である。内・外面ともにヘラ磨きが成され、堅く焼きしめられ、赤褐色を呈する。朱彩を施してある。口縁径16.7cm、高さ9.7cmを計る。B-2号住居址No.2出土。

(9~13)はB-6号住居址出土、それらの内訳は次の通りである。(9)はNo.4、(10、12)は覆土、(11)はNo.1、(13)はNo.13、(9、10、12、13)は杯である。(9、10、12)は大部分欠損しており、わずかに底部付近が残存しているに過ぎない。(9、12)は糸切り底を呈し、そのうち(12)は内面に暗文を刻してある。明茶褐色を呈し、焼成は良好。(11)は内黒の耳皿で、糸切り底を成す。内・外面ともに光沢を放つほどに黒色研磨されている。(8)は鬼高期、(9~13)は平安時代国分期に該当可能と思われる。



第54図 土師器実測図

第2項 陶器(第55図)

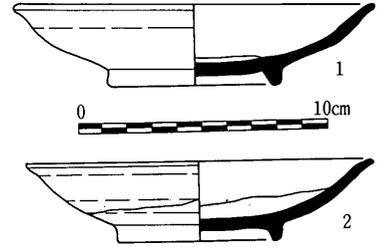
第55図(1~2)はB-6号住居址出土の灰釉陶器の皿である。(1)はNo.8、(2)はNo.12である。第35図B-6号住居址実測図参照。(1~2)ともに口唇部がやや外側へ平坦気味、高台は断面方形状を呈す。釉のかかり具合はやや薄目である。10世紀後半の所産であろう。

第3項 石器(第56~57図)

第56図はB-7号住居址出土の石皿で、凹みはほんのわずか、磨いた個所もわずかであった。花崗岩を利用している。

打製石斧（第57図（1～4））

4点は撥形の打製石斧に含まれる。下端部の開きは（1）が大きく、その他は下へ行くに従ってやや直線状に開き気味になる。4点の出土地点は次のようになる。（1～2）は古墳周溝内、（3）はB-2号住居址、（4）はB-1号住居址、これらはいずれも覆土上層より出土しており、後世の飛び込みの可能性が強い。（1～2、4）は硬砂岩製、（3）は緑泥岩製である。



第55図 灰釉陶器実測図

棒状石器（第57図（5～7））

石器の上・下端を部分的に磨いてある。形状が棒状であるので棒状石器と命名した。（5）はB-6号住居址No.5、（6～7）はB-5号住居址の覆土より出土している。3点とも硬砂岩製である。

砥石（第57図（10～12））

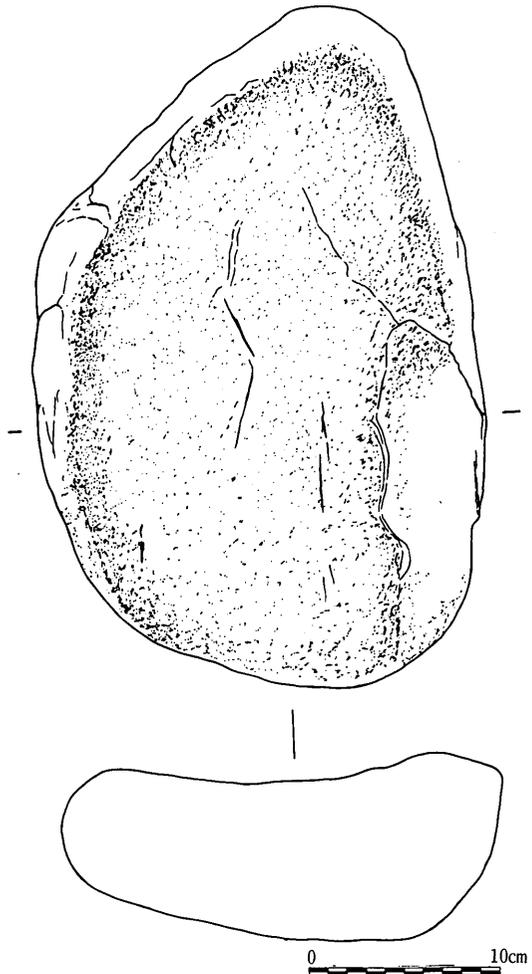
粘板岩製の砥石で、やや方形（10、12）、やや長楕円形状（11）を呈する。（10）はB-1号住居址出土。（11～12）はB-5号住居址出土。いずれも荒研に使用。

磨製石斧（第57図（8～9）、13）

（8～9）は乳棒状であり、上端を欠損し、周縁を磨いてある。（13）は定角式で刃先は鋭角にたっている。（8）はB-6号住居址No.2、（9）は古墳の周溝、（13）はB-7号住居址の柱穴内よりそれぞれ出土。3点とも緑泥岩を用いる。

横刃型石器（第57図（14））

刃部を下端につけた所謂横刃型石器であり、刃先は鋭角を示す。B-5号住居址出土。硬砂岩製。



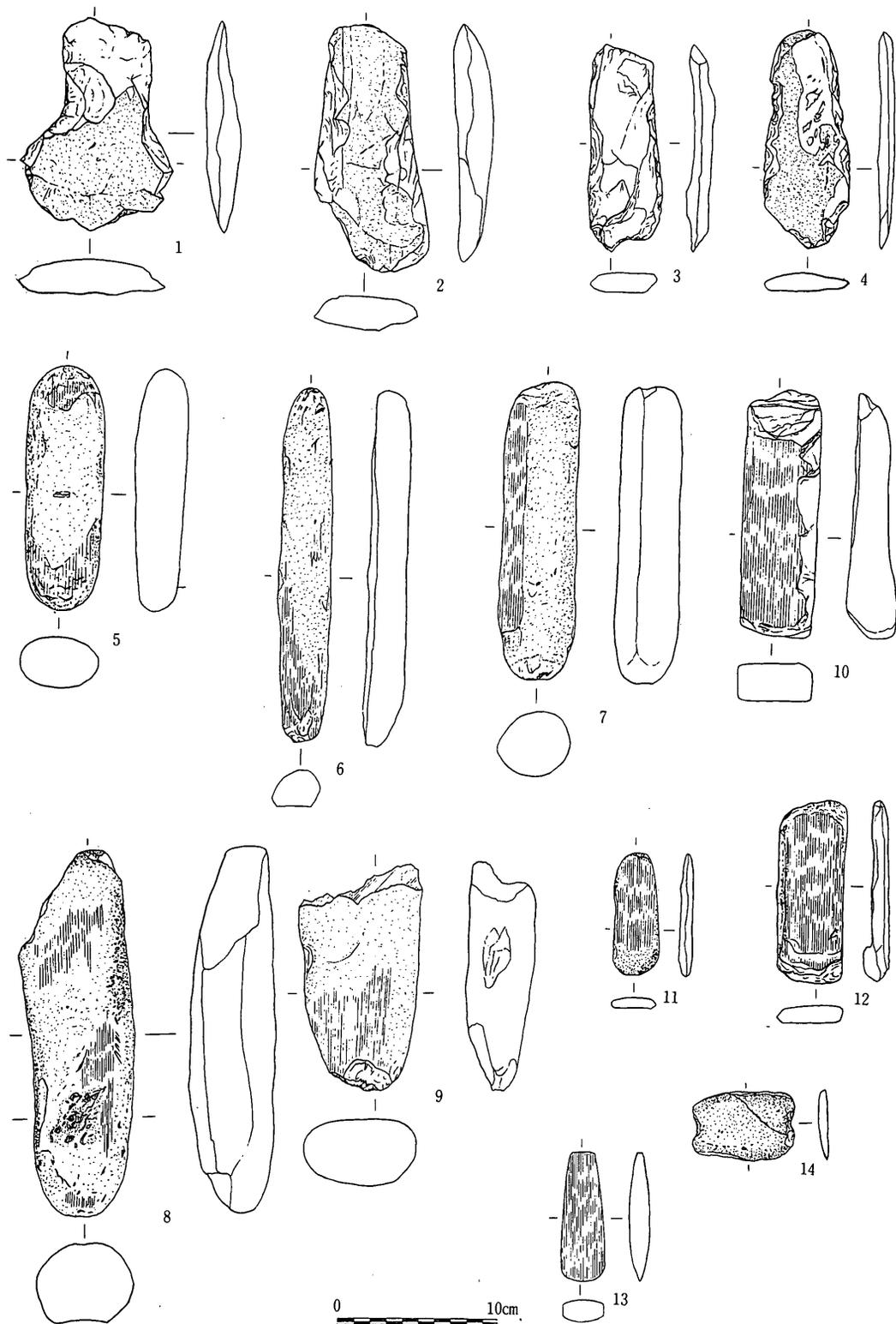
第56図 石器実測図

第4項 金属製品（第58図）

鉄製の紡錘車である。中央部に直径1・3cmの真円に近い孔があげられている。扁平の形態を有する。B-4号住居址床面より出土。腐食状態は少ない。

図版27の番号2左側のは土師器の底部片を利用した紡錘車であり、造成中出土した。ここに後になつたが掲載しておく。

（飯塚 政美）



第57图 石器实测图

第IV章 まとめ

急拠、持ち上がった緊急発掘調査であり、時間的制約があるため十分な考察及び検討を加えることはできないが、現時点においてある程度わかった事柄を記述しておく。

遺構—縄文中期後葉堅穴住居址1軒、弥生後期堅穴住居址5軒、古墳時代堅穴住居址1軒、古墳一基、奈良時代堅穴住居址2軒、平安時代堅穴住居址4軒、中世溝址2本、中世堅穴20基、中世住居址1軒、堀址、掘立柱址であった。

次に、各々の遺構の総合的な特徴を記すことにする。縄文中期後葉の住居址はB-7号住居址、1軒の検出だけであった。壁は後世古墳築造時に破壊されたとみえて、壁の残存は全く認められなかった。現存している柱穴の配列状態からみて、多分、円形プランを成していたと想定されよう。

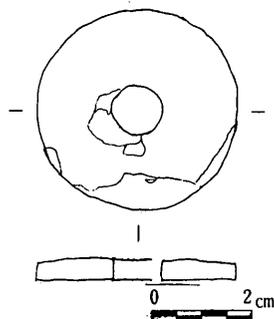
弥生後期堅穴住居址はA-2号住居址、A-5号住居址、B-1号住居址、B-3号住居址、B-5号住居址の5軒であった。5軒とも隅丸形状を呈していた。A-5号住居址は3軒の切り合いのために、他の4軒と比較して諸特徴はあまり明瞭でない。A-2号住居址（正位埋甕炉、4本主柱穴、下屋施設、間仕切的施設）、B-1号住居址（逆位埋甕炉、4本主柱穴）、B-3号住居址（正位埋甕炉、4本主柱穴）、B-5号住居址（正位埋甕炉、4本主柱穴）。

古墳及び古墳時代の堅穴住居址がそれぞれ一基ずつ検出された。まず、古墳について触れてみることにする。現存する本城古墳群8基のグループと考えられる。殿島城築城の時点で封土は取り去られたのであろう。調査していく段階で石は皆無状態であった。考えてみるに、この古墳は木棺直葬形式をとっているように想定される。周溝のカーブの仕方から見て円墳状を呈し、周囲の状況からみて、6世紀後半から7世紀前半頃に編年づけられる後期群集墳に属していると思われる。

古墳時代の堅穴住居址はB-2号住居址であった。隅丸形状を呈し、西壁中央部付近に石芯粘土カマドを持ち、割合に西壁より内側に向かってやや長目に構築してあった。四本主柱穴を成し、ごく、一般的な住居址であった。土師器の編年からみて、鬼高II期頃の住居址と思われ、近くに存在する本城古墳群の編年づけにも大いに役立つと思われる。

奈良時代堅穴住居址はA-1号住居址、A-4号住居址の2軒であった。A-1号住居址は隅丸形状を呈し、主柱穴の配列は漠然としていた。カマドは西壁中央部付近に存し、残存状態は良好な部類に属していた。A-4号住居址は3軒の切り合いの為に、住居址としては極だった特徴は不詳であった。

平安時代堅穴住居址はA-3号住居址、A-7号住居址、B-4号住居址、B-6号住居址の4軒であった。A-3号住居址、A-7号住居址のように切り合いの為に全体のプランは不明であるが、現存している部分からみて、隅丸形状を呈していると思われる。B-4号住居址のカマドは



第58図 鉄製品実測図
(1:2)

後世の土壇状遺構によって破壊されてしまったと見えて、現存はしなかった。B-6号住居址はほぼ完全な姿で、西壁中央部付近に発見された。土師器・須恵器・灰釉陶器類の遺物はカマド付近に集中的に出土し、当時の食生活の仕方がある程度究明できるのではないだろうか。

中世竪穴住居址はA-6号住居址1軒であった。隅丸形状のプランを呈し、床面にほぼ等間隔に平坦な河原石を配列してあり、これが柱の土台になったと思われる。

中世の竪穴はA地区では17基検出され、それらのうち、隅丸方形は10基、方形1基、隅丸長方形1基、円形1基、不明4基となっている。17基は全て、床面及び周囲に柱穴を伴っており、屋根が付属していたことが考えられる。大部分の竪穴に細礫が多量に埋め込まれており、その堆積状態からみて人為的に埋められた可能性が強いように思われる。全体的にみて、倉庫群的色彩が強いように思われる。B地区では竪穴が3基検出され、隅丸方形プランが2基、隅丸長方形が1基であった。周囲及び、床面上に柱穴の存在が認められたのは1基だけで、他の2基は柱穴の存在は全くなく、用途的な違いがあるのではないか。

掘址の状況については、前に述べてあるので、今回は省略する。

A地区の一角に200カ所に達しようとする柱穴が、南北24m位、東西27m位の範囲にわたって検出された。柱穴は角柱のものや、円形状のものが混合していた。200カ所に達しようとする柱穴を配列してみると、おおよそ4棟の建物址に分けられた。

2基の溝址はともに水の流れた跡が認められ、いずれも東方から引かれてきていた。付近の状況からみて、この溝址を東へと追っていけば、おそらく、南側にある火沢の洞に達するのであろう。つまり火沢から流水した可能性が濃厚と思われ、流し堀用引水址であろう。

遺物-土器、陶器、石器、金属製品、古銭、貝製品が出土している。それらの内訳は土器では井戸尻式、藤内式、加曾利B式、中島式、鬼高式、真間式、国分式、内耳土器であった。その他、奈良・平安時代の須恵器が少量ではあるが出土した。陶器類では平安中期頃の灰釉陶器、室町中期頃の古瀬戸天目茶碗、同時期の古瀬戸灰釉大平鉢であった。石器としては棒状石器、砥石、打製石斧、磨製石斧、横刃型石器・石皿であった。金属製品としては鉄製紡錘車、鉄製刀子、鉄製分銅、青銅製の切刃であった。古銭としては元祐通宝、熙寧元宝、永樂通宝、その他、銘の不明のものがあつた。貝製品が極めて特殊な遺物として出土している。

遺構面からみた考察を加えてみよう。縄文中期の住居址は伊那市で一般的にみられるものであつた。弥生時代の生活基盤は西側の天竜川氾濫原湿地帯に依存した水田農耕が主と考えられ、それらを耕作するために都合のよい、段丘突端面に集落を営んでいたのであろう。古墳及び古墳時代の住居址検出は古代福智郷の母胎となる。奈良・平安期に至って福智郷の存在があり、その範囲はこの殿島の段丘突端面にまで及んでいたことを証明してくれる。

A地区で検出された中世竪穴、柱穴群、中世住居址の存在は殿島城の範囲把握に大いに役立った。これら中世遺跡群からの陶器類の出土は極めて少なく、その点からみて、殿島城の居館址は段丘崖下面上に存在したのであろう。現在、この辺には城という小字名の存在がある点からみても納得できるのではないだろうか。

竪穴群の中には穀類の貯蔵痕跡は全く認められず、殿島城の合戦はまず全くなかつたと考えられ

る。つまり、大きな合戦を行うには、この堅穴群に多量の穀類を収納して、籠城作戦を展開したものと推察できるのである。

堀址内より出土した鉄製の分銅及び、市坂という小字名の存在、また古銭出土はかなり商業が発達し、物品の流通が隆盛していたことを物語ってくれる。

次に殿島城の築城形態について述べてみることにする。

殿島城は北は宮狭間坂、南は火沢の洞までの範囲で、その面積は約五町歩に達する伊那市でも最大級の平山城であった。この中は本城と外城とに堀によって分離されている。それら堀は流し堀になっており、その配置具合は第1図 殿島城跡遺跡配置図を参考にして下さい。本城は約1haの面積を有し、四方に土塁が全周しており、それは段丘崖面に近い西側は低くなっており、東側は極めて高くなっている。最も高い所では4m位、低いところで1m位を測る。北東の一角に土塁の切れたところがあり、これが大手ではなかっただろうか、ただ、大手の位置については今後の検討を用する。西側の段丘崖面に数段にわたって何か所も帯郭がめぐっている。

殿島城は殿島氏の城であるといわれているので、殿島氏の文献上に現われた動きについて述べることにする。

嘉暦四年（1329年）諏訪上宮五月会付流鎗馬之花会頭（中畧）結番之事、流鎗馬、殿島、小出、黒河内三ヶ郷地頭（諏訪家史料 鎌倉殿下知状）

永享十二年小笠原軍に従い結城の戦に参加（結城陣番帳）

文正二年（1467年）神林越後守盛兼（諏訪御符礼之古書）

文明八年（1476年）神林河内守政兼（同右）

文明十八年（1486年）（同右）

神林氏のこの後は、赤羽記によると、高遠頼継の老臣に「上林上野入道」があり、殿島の地頭であったらしい上林氏は高遠氏滅亡後は武田氏に仕えた。

天文初年（1532年）殿島大和守重度百五十貫文を領す（伊那武鑑根元記）

天文七年（1538年）葦崎合戦参加（小平物語）天文十四年（1545年）下諏訪合戦参加（同右）

弘治二年（1557年）殿島新左衛門重国信玄のため御成敗也（伊那武鑑根元記）

今回、発掘調査した成果をみて、殿島城は室町中期頃の築城で、戦国期に滅亡したのであろう。従って、室町中期以前の殿島氏は下の段に居館を構えていたのであろう。

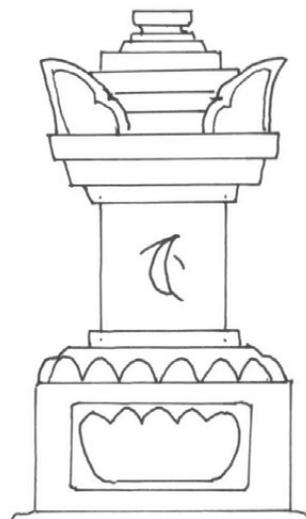
中殿島窪田幸徳氏宅裏庭に室町期の宝篋印塔が存在している。これは開田の時、地中1m位の所から出土したと窪田氏は語ってくれた。



本城に建立された碑



伝殿島大和守宝篋印塔



第59図 伝殿島大和守宝篋印塔実測図（1：10）

これは、あるいは室町中期以前の殿島氏と関係する塔かも知れない。

第59図に掲載した宝篋印塔は伝殿島大和守の宝篋印塔と言われているが、隅飾突起の角度からみて、室町前期頃に位置づけられ、時期的にみて殿島大和守の墓とはならない。この塔は現在、本城の北側、護国寺所有の山林に建立されているが、その状態からみて、いずれかの地から移転されたのであろう。いづれにしろ、このような塔は武士階級の人でなければ建立できないので、かたく考えてみて殿島氏に関連した武士の塔に間違いのないと思われる。最初に建立された場所が、究明できれば、殿島氏の存在及び動向がより一層明らかになるとと思われる。

（飯塚 政美）

図 版



遺跡地を西側より眺む



遺跡地を東側より眺む



A 地区を東側より眺む



B 地区を南側より眺む



A 地区遺構群を東側から眺む



A 地区遺構群を西側から眺む



A - 2号住居址



A - 3・4・5号住居址



A - 1 号住居址



A - 7 号住居址



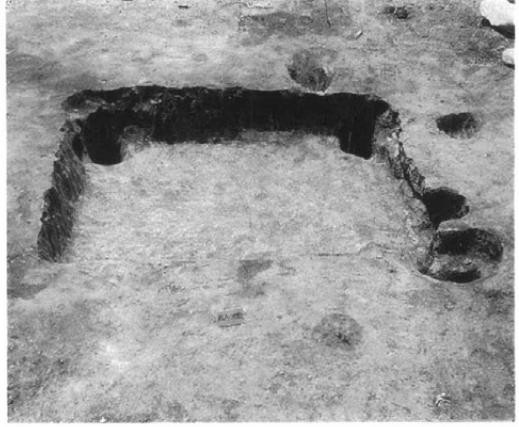
A-6号住居址



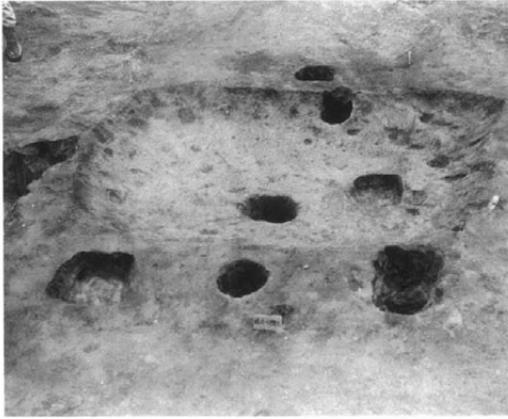
A-1号竖穴



A - 2 号竖穴



A - 3 号竖穴



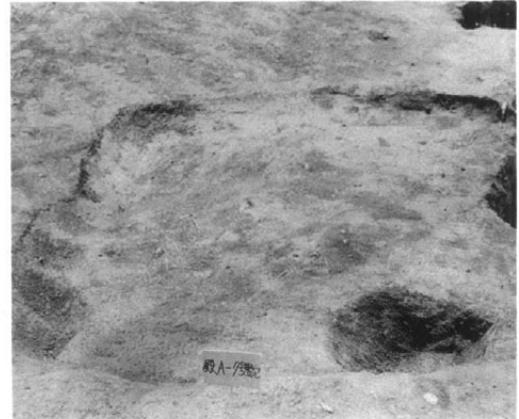
A - 4 号竖穴



A - 5 号竖穴



A - 6 号竖穴



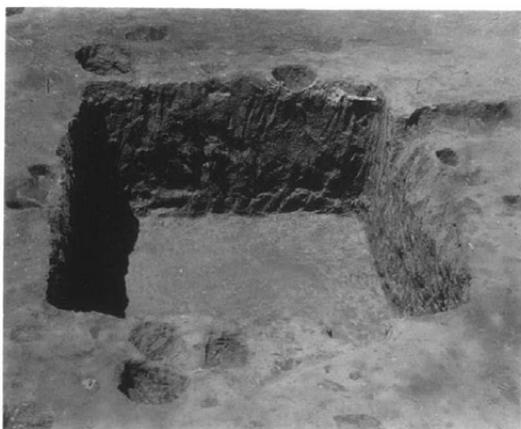
A - 7 号竖穴



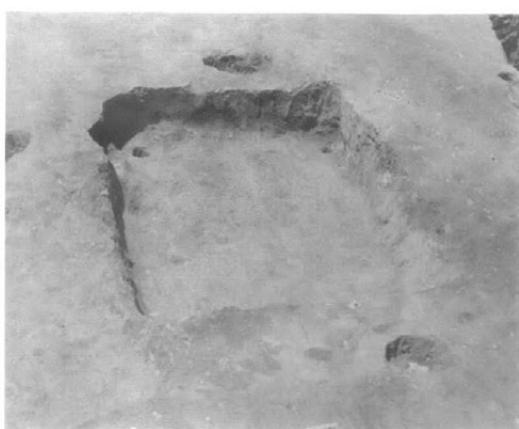
A-8号竖穴



A-9号竖穴



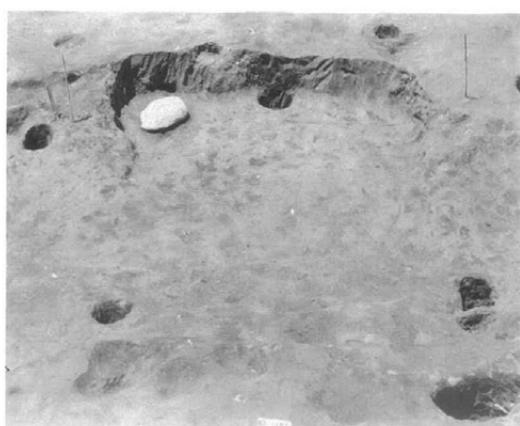
A-10号竖穴



A-11号竖穴



A-12号竖穴



A-13号竖穴



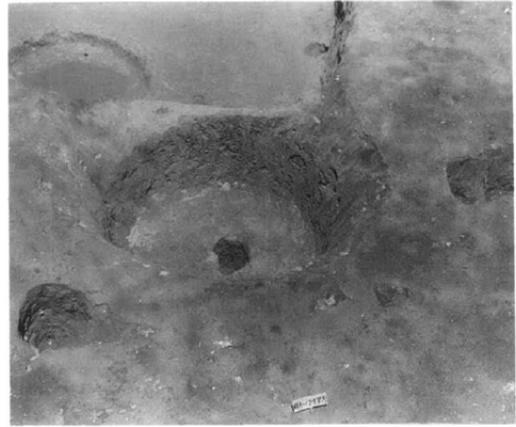
A-14号竖穴



A-15号竖穴



A-16号竖穴



A-17号竖穴



竖穴群配列状態 (A-10号竖穴~A-15号竖穴)



A地区堀-2, 堀-3全景(南側より)



A地区堀-2, 堀-3近景(南側より)



1号建物址



2号建物址



3号建物址



4号建物址



A - I 号溝址



A - I 号溝址断面



A - 2号住居址埋甕炉上面



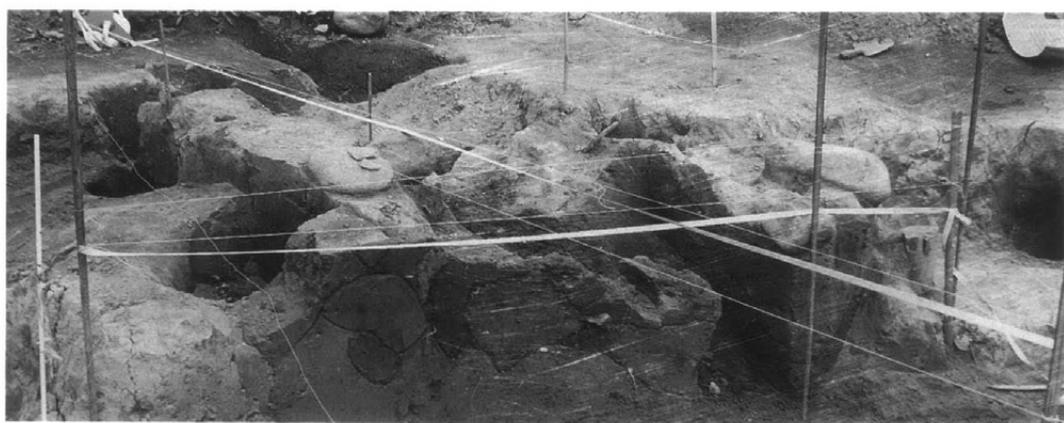
A - 3号住居址埋甕炉



A - 2号住居址埋甕炉断面



A - 1号住居址カマド



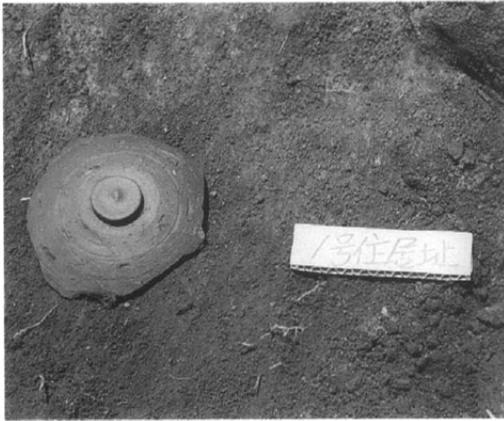
A - 3号住居址・A - 4号住居址カマド



土器出土状況 (A-3号住居址)



土器出土状況 (A-5号住居址)



土器出土状況 (A-1号住居址)



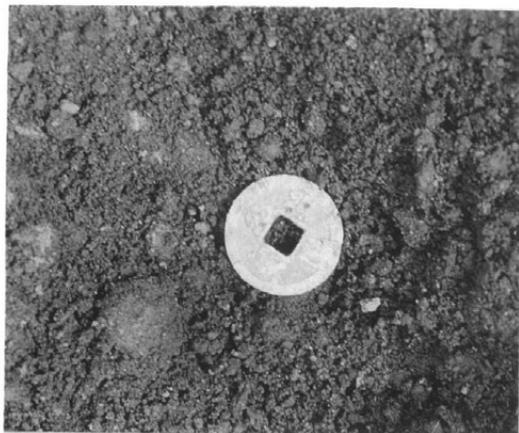
土器出土状況 (A-1号住居址)



土器出土状況 (A-1号住居址)



土器出土状況 (A-1号住居址)



古銭出土状況 (A-1号竖穴)



陶器出土状況 (A-13号竖穴)



内耳土器出土状況 (A-2号竖穴)



刀子出土状況 (A-2号竖穴)



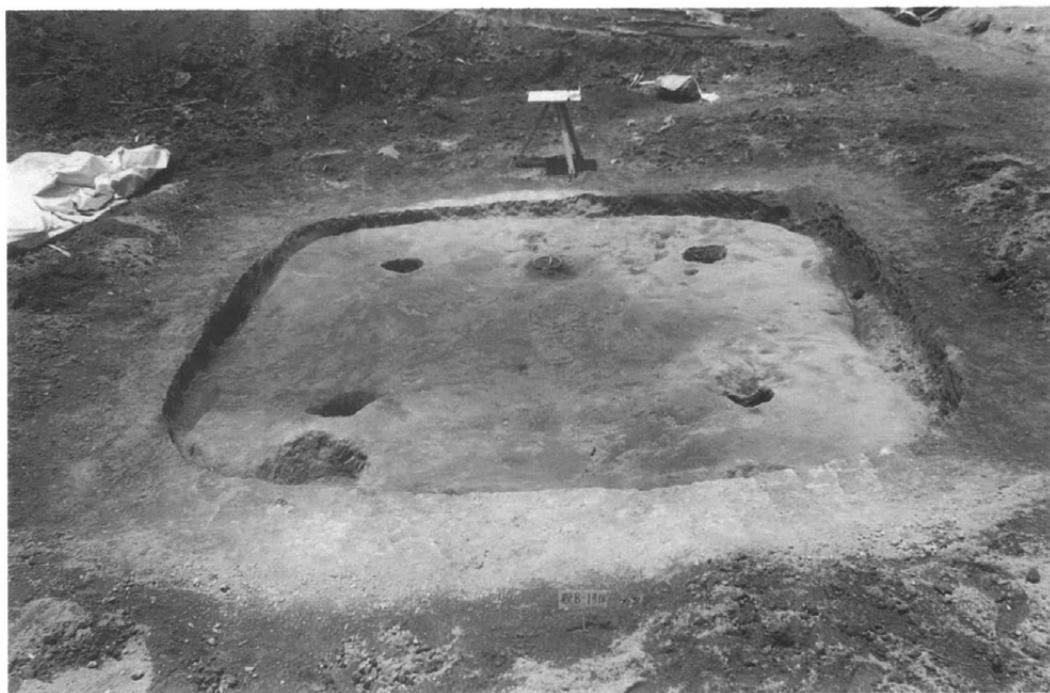
切刃出土状況 (A地区 堀-2)



分銅出土状況 (A地区 堀-2)



B-7号住居址・古墳



B-1号住居址



B - 3号住居址



B - 5号住居址



B - 2号住居址



B - 4号住居址



B-6号住居址



B-1号竖穴・B-2号竖穴



B - 2 号溝址



B - 2 号溝址



B-1号住居址埋壺炉上面



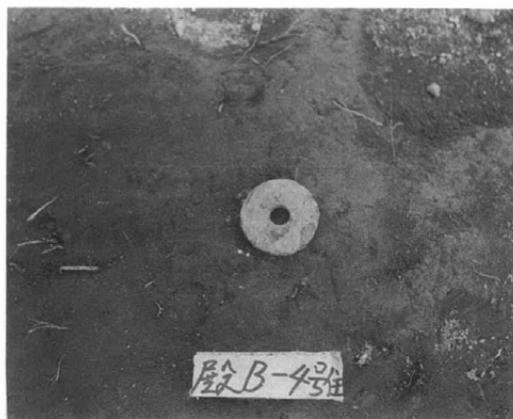
B-1号住居址埋壺炉断面



B-5号住居址埋壺炉断面



B-3号住居址埋壺炉断面



紡錘車出土状況 (B-4号住居址)



土器出土状況 (B-6号住居址)



弥生土器 1



弥生土器 2



弥生土器 3



弥生土器 4



弥生土器 6



弥生土器 5

A-2 住埋甕炉(1) A-5 住 No.2 (2) B-1 住埋甕炉(3) B-3 住埋甕炉(4)
B-5 住埋甕炉(5) B-5 住 No.8 (6)



土師器

1



土師器

2



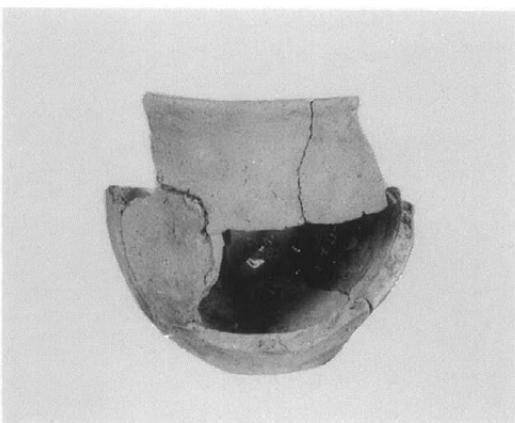
土師器

3



土師器

4



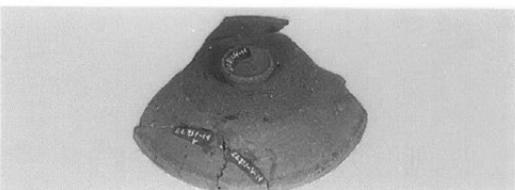
土師器

5



弥生土器

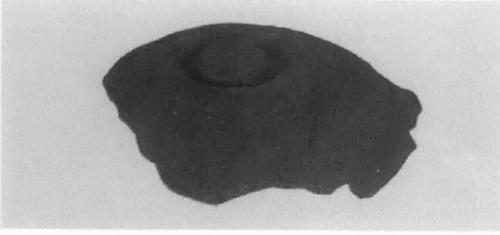
6



須恵器

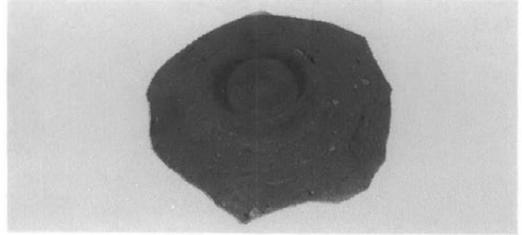
7

A-1 住覆土(1) B-2 住 No. 2 (2) B-2 住床面(3) B-2 住 No. 1 (4) B-2 住覆土(5)
B-5 住床面(6) A-1 住覆土(7)



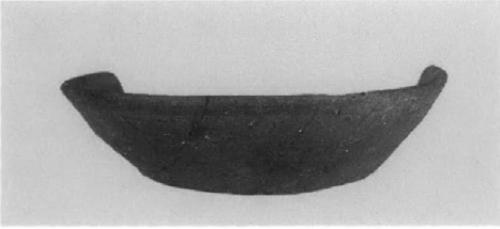
須恵器

1



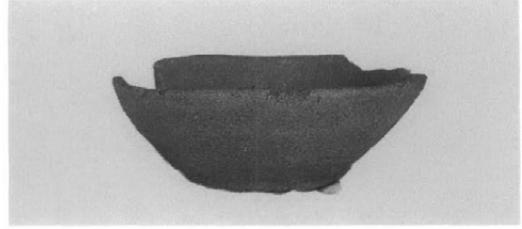
須恵器

2



須恵器

3



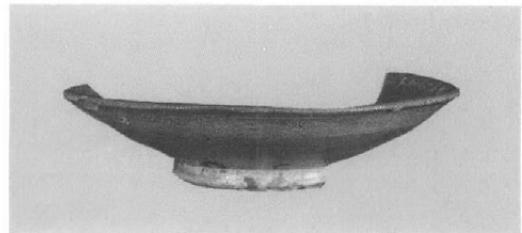
土師器

4



土師器

5



灰釉陶器

6



灰釉陶器

7



土師器

9



灰釉陶器

8

A-1住 No.1 (1)

A-1住覆土(2~3)

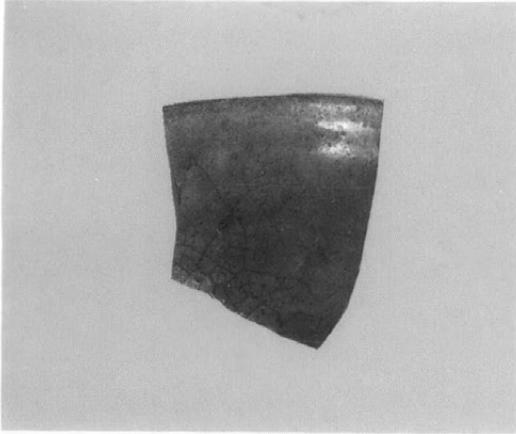
A-4住 No.2 (4)

B-2住 No.8 (5)

B-6住覆土(6,8)

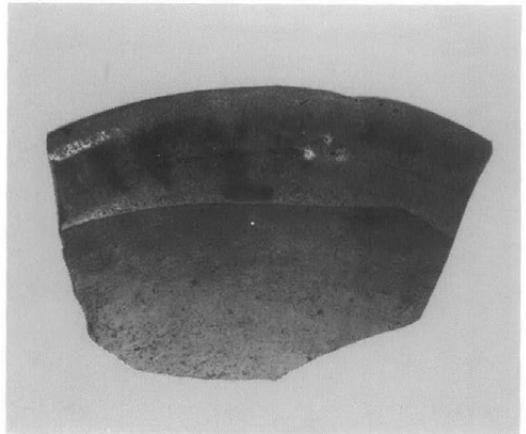
A-3住 No.1 (7)

B-6住 No.1 (9)



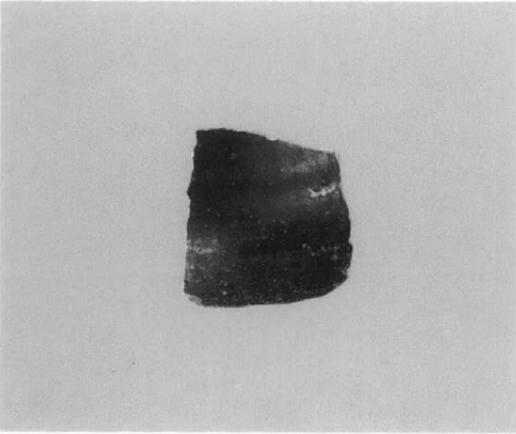
古瀬戸灰釉平茶碗

1



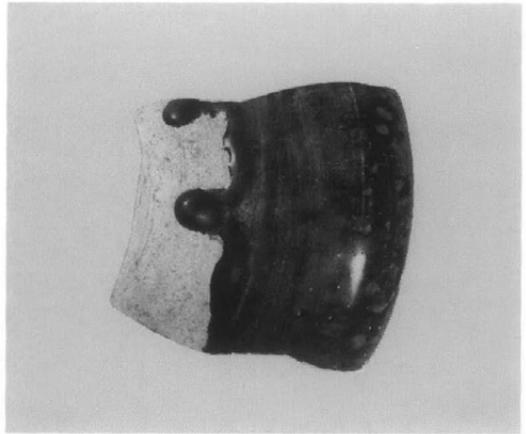
古瀬戸灰釉大平鉢

2



古瀬戸天目茶碗

3



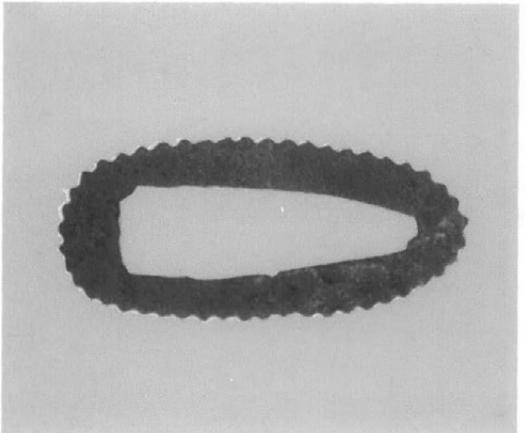
古瀬戸天目茶碗

4



分銅

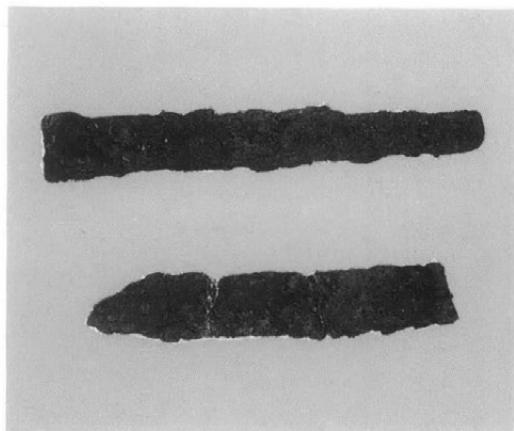
5



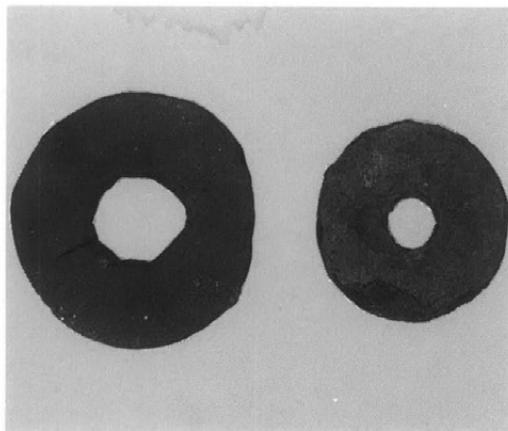
切刃

6

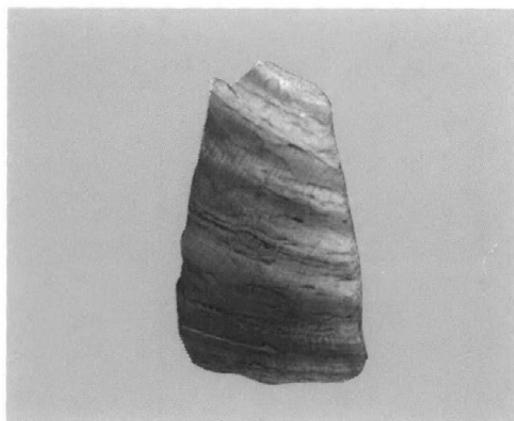
A-10号竖穴 (1) A-15号竖穴 (2) A-2号竖穴 (3~4) A地区堀-1 (5) A地区堀-2 (6)



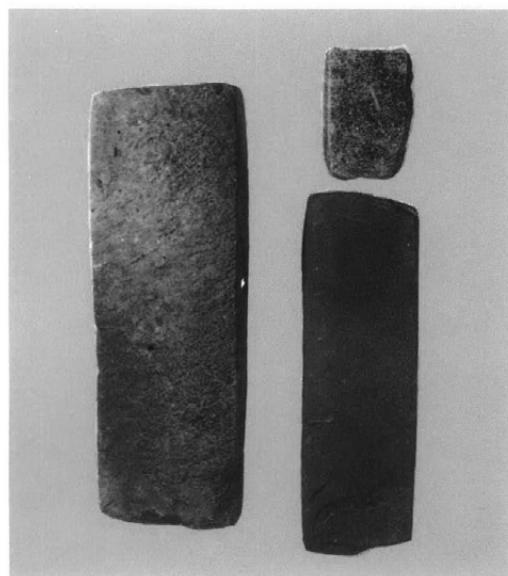
刀子 1



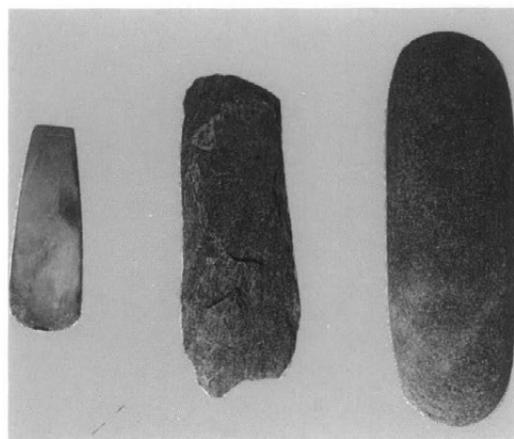
紡錘車 2



貝製品 3



石器 5



石器 4

A-2 竪穴(1上) A-2 住(1下) 表採(2左)
 B-4 住(2右) 表採(3) B-7 住(4左)
 B-2 住(4中) B-6 住 No.5 (4右)
 B-1 住フク土(5左上) A-1 号竪穴(5左下)
 A-4 号竪穴(5右)



本城東側の土塁



本城北側の土塁



本城東側の堀



本城東側の堀



本城入口付近と堀



本城北側の堀

宮場間様十三塚遺跡

目 次

| | | | |
|--------------|-----|------------|------|
| 目 次 | (3) | (7) 7号墳丘 | (9) |
| 挿図目次 | (3) | (8) 8号墳丘 | (10) |
| 図版目次 | (3) | (9) 9号墳丘 | (11) |
| | | (10) 10号墳丘 | (11) |
| 第I章 発掘日誌 | (4) | | |
| | | 第2節 火 葬 墓 | (11) |
| 第II章 遺 構 | (5) | | |
| | | 第III章 遺 物 | (13) |
| 第1節 墳丘及び内部施設 | (6) | | |
| (1) 1号墳丘 | (6) | 第1節 古 銭 | (13) |
| (2) 2号墳丘 | (6) | 第2節 金属製品 | (15) |
| (3) 3号墳丘 | (7) | 第3節 陶 器 | (16) |
| (4) 4号墳丘 | (8) | 第4節 装身具 | (16) |
| (5) 5号墳丘 | (8) | | |
| (6) 6号墳丘 | (8) | 第IV章 ま と め | (16) |

挿図目次

| | |
|-------------------------|------------------------|
| 第1図 墳丘及び土葬墓・火葬墓配置図 (付図) | 第10図 8号墳・8号墳—1・8号墳—2・ |
| 第2図 1号墳丘及び地層実測図 (7) | 8号墳—3実測図 (12) |
| 第3図 1号墳丘底部実測図 (8) | 第11図 9号墳丘及び地層実測図 (12) |
| 第4図 2号墳丘及び地層実測図 (8) | 第12図 10号墳丘及び地層実測図 (12) |
| 第5図 3号墳丘及び地層実測図 (9) | 第13図 古銭拓影 (13) |
| 第6図 4号墳丘及び地層実測図 (9) | 第14図 古銭拓影 (14) |
| 第7図 5号墳丘及び地層実測図 (10) | 第15図 金属製品実測図 (15) |
| 第8図 6号墳丘及び地層実測図 (11) | 第16図 煙管実測図 (15) |
| 第9図 7号墳・7号墳—1・ | 第17図 陶器実測図 (16) |
| 7号墳—2実測図 (12) | 第18図 玉類実測図 (16) |

図版目次

| | | |
|----------|---------|---------------|
| 図版1 遺構遠景 | 図版5 遺 構 | 図版9 遺物出土状況 |
| 図版2 遺 構 | 図版6 遺 構 | 図版10 出土遺物 |
| 図版3 遺 構 | 図版7 遺 構 | 図版11 式典及び記念撮影 |
| 図版4 遺 構 | 図版8 遺 構 | |

第 I 章 発掘日誌

昭和62年 5月18日 (月) 晴 宮場間様十三塚付近の材木のあとかたづけをする。

昭和62年 5月19日 (火) 晴 宮場間様十三塚付近の材木のあとかたづけをする。十三塚の全測図及び墳丘の作図。

昭和62年 5月20日 (水) 晴 十三塚周辺の清掃をして、写真撮影をする。さらに墳丘にコンターを入れる。南側の桑畑へ堀の確認のため重機を入れる。

昭和62年 5月21日 (木) 晴 十三塚の2～4号墳丘の南側を断面を残しながらカットをする。3号墳丘より多量の河原石が出土した。夕方までに2号、4号墳丘の南側断面を調査する。3号墳丘の石の間を掘り下げていく。南側の桑畑へブルドーザーを入れる。

昭和62年 5月22日 (金) 晴 3号墳丘の石の広がり調査のためにセクションの北側の掘り下げをする。4～5号墳丘の南側のセクションを清掃する。2～5号墳丘の南側セクションの写真撮影をする。南側の桑畑へブルドーザーを入れる。

昭和62年 5月25日 (月) 晴 6号～10号墳丘の南側のセクションの掘り下げをする。夕方までかかってほぼ南側のセクションを掘り下げていく。7号墳丘の中央部付近に焼土と木炭が多量に検出された。8号墳丘には石が配列してあった。南側の桑畑へブルドーザーを入れる。

昭和62年 5月26日 (火) 晴 6号～10号墳丘のセクションを清掃し、写真撮影を済ませる。1号墳丘の南側のセクションを掘り下げていく。南側の桑畑へブルドーザーを入れる。

昭和62年 5月27日 (水) 晴 2～4号墳丘の断面を実測する。1号墳丘の掘り下げを開始する。南側の桑畑へ重機を入れて堀の確認をする。

昭和62年 5月28日 (木) 晴 5～7号墳丘の断面実測をする。1号墳丘の掘り下げをする。南側の桑畑へ重機を入れる。

昭和62年 5月29日 (金) 晴 8～10号墳丘のセクションをとる。1号墳丘の掘り下げをする。南側の桑畑へ重機を入れる。

昭和62年 5月30日 (土) 晴 1号墳丘の掘り下げ、周溝の清掃をする。

昭和62年 5月31日 (日) 晴 十三塚付近にかけておいたシートが風でまくれたので、それをかけ直す。

昭和62年 6月 1日 (月) 晴 1号墳丘の掘り下げと周溝の掘り下げをする。

昭和62年 6月 2日 (火) 晴 前日と同様な作業をする。

昭和62年 6月 3日 (水) 曇時々雨 1号墳丘の掘り下げをする。午後雨降りのため、作業は午前中で終了する。

昭和62年 6月 4日 (木) 晴 1号墳丘の掘り下げ、1号墳丘の断面をとる。

昭和62年 6月 5日 (金) 晴 1号墳丘の掘り下げと、3号墳丘の石の実測をする。

昭和62年 6月 6日 (土) 晴 1号墳丘の周溝の掘り下げ及び3号墳丘の石の実測をする。

昭和62年9月～昭和62年11月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集、報告書を印刷所へ送る。
昭和62年12月 報告書を刊行する。 (飯塚 政美)



発掘風景



遺骨収集

第II章 遺 構

第I節 墳丘及び内部施設

(1) 1号墳丘 (第2～3図、図版2)

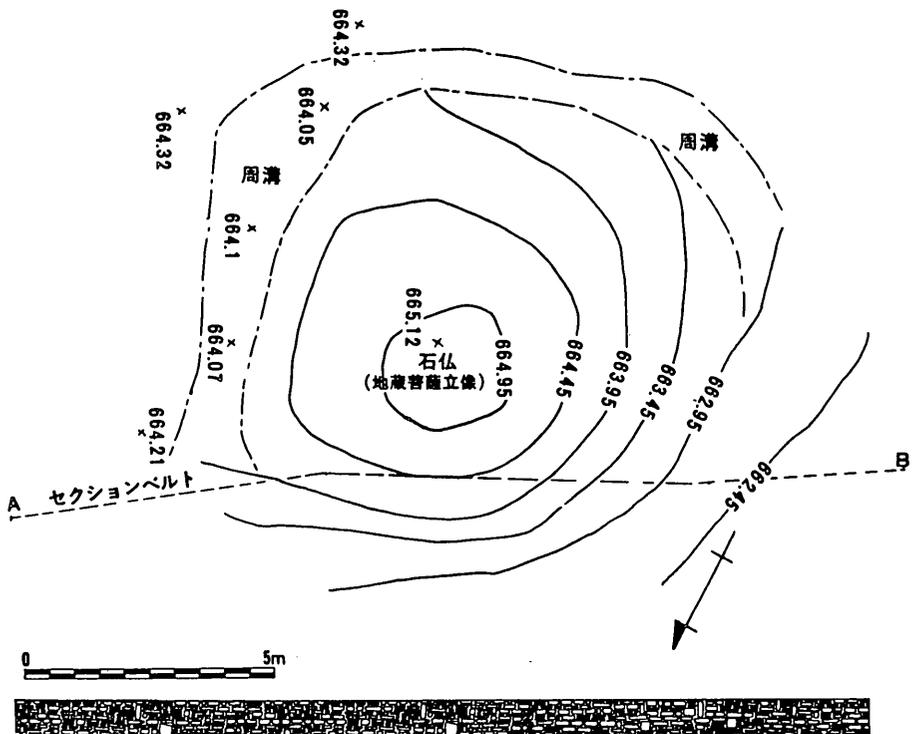
十三塚群中で最北西端に位置し、しかも最も大きかった。第2図は昭和59年度中に県道沢渡・高遠線を拡幅するとのことで北側の一部分を発掘調査した図面を掲載した。本墳丘の規模は南北10m50cm位、東西10m50cm位の方墳状で、高さは約1m10cmを測る。周溝が北側を除いて、南、東、西へ回っており、その幅は40cm～85cm位を測り、断面タライ袋を呈していた。墳丘の頂上付近には南北2m30cm位、東西2m50cm位の規模で平坦部が存在しており、この所に花崗岩製の地藏菩薩立像が安置されていた。

封土を取り除いて最下部(ローム直上)の地層まで掘り下げてみると、その部分は堅くなっていた。墳丘中央部付近の最下層面から鉄製の脇差、小柄、人骨、古銭6枚(内訳元祐通宝2枚、天禧通宝1枚、不詳1枚、太平通宝1枚、貨泉1枚)が出土している。古銭6枚の出土は六文銭風習の現われである。古銭出土枚数、古銭鑄造年代、その他出土遺物の質からみて、戦国期の武将の墓と考えられる。人骨の出土状態からみて、土葬の可能性が強いと推定される。

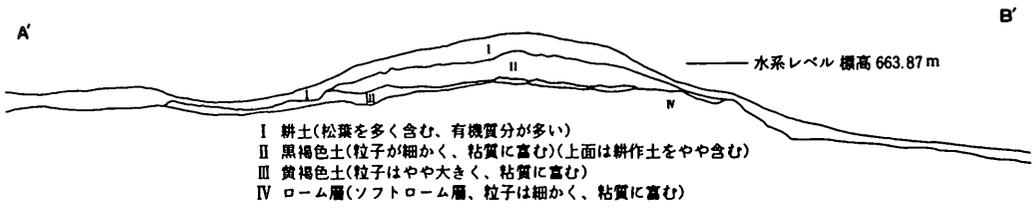
(2) 2号墳丘 (第4図、図版2)

本墳丘は西側は1号墳丘の周溝と接し、東側に3号墳丘が近接してある。南北4m70cm位、東西4m35cm位、高さ50cm位の規模を有し、円墳状を呈する。周溝及び遺物出土は全くない。従って、時代決定は不詳である。

封土は極めて軟弱であった。



道路 (県道沢渡・高遠線)



第2図 1号墳丘及び地層実測図

(3) 3号墳丘 (第5図、図版3)

本墳丘は西側に2号墳丘、東側に4号墳丘が近接している位置に存在し、南北4 m60cm位、東西4 m65cm位、高さ55cm位の規模を有し、円墳状を呈する。封土を取り除いていくと、第II層目(黒褐色土)の下部から第III層目と黒土にかけて天竜川の河原石が埋没していた。これらの河原石は大部分が閃泥岩や粘板岩であった。

配石状態は墳丘の中央部付近に集中的に存在しており、場合によっては二段になっている個所もあった。遺物の出土は何もなく、従って時代決定は不明である。

(4) 4号墳 (第6図、図版4)

西側は3号墳丘、東側は5号墳丘に近接し
てある墳丘である。南北3m95cm位、東西4
m位、高さ40cm位の円墳状を呈する。封土の
土層は上層よりゴミ層、黒褐色土層(軟らか
い)、黒土層(やや堅い)、ローム層と黒土層
混合(やや堅い)であり、基盤はローム層よ
り成り立っていた。

墳丘の周囲に周溝の跡がわずかに認められ
た。遺物の出土は何も無く、如何なる時代の
構築物かは現段階では全く不明である。周囲
の状況から判断するしか手段はないと思われ
る。

(5) 5号墳丘 (第7図、図版4)

西側に4号墳丘、北側に6号墳丘が存在し、
この2つの墳丘と鍵の手状になった位置に本
墳丘が存在している。南北3m95cm位、東西
4m50cm位、高さ40cm位を測るやや楕円形状
の墳丘である。

封土は上からゴミ層、黒褐色土層(軟らか
い)、黒土層(やや堅い)、ローム層と黒土層
の混合(堅い)の順序で盛り上げてあり、こ
れらの基盤はローム層であった。墳丘上には
大きな松の根があり、その取り除き作業には
難渋した。

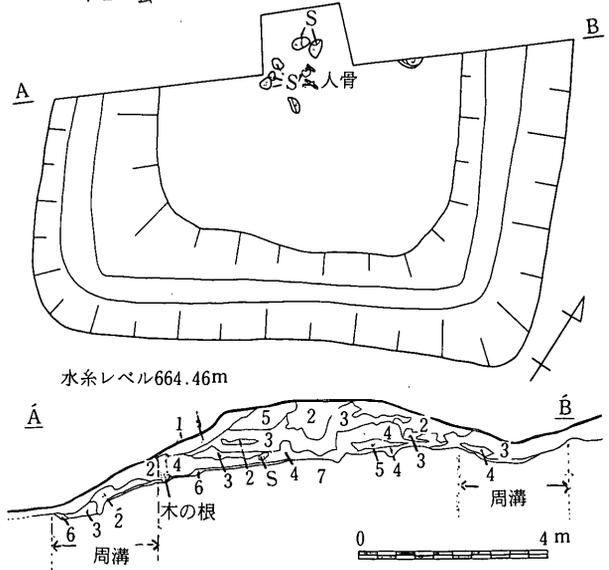
遺物は何も出土せず、従って墳丘の構築時
期は不詳である。

(6) 6号墳丘 (第8図、図版5)

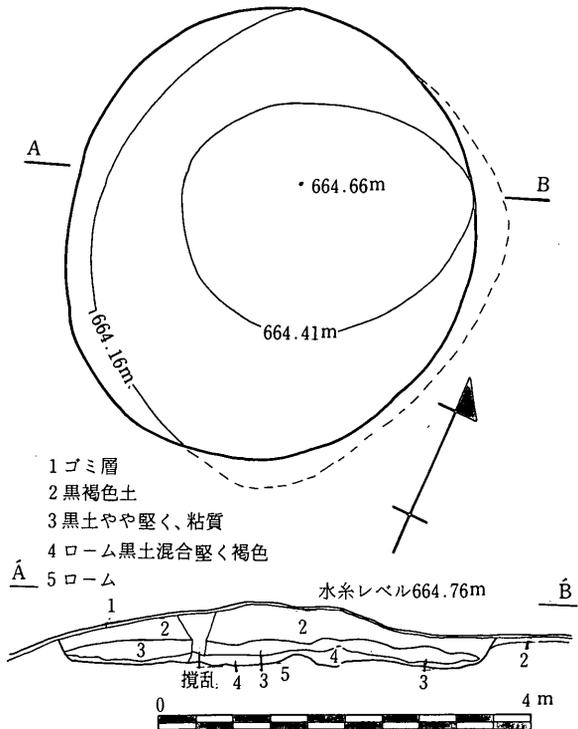
本墳丘は本十三塚群中最東端に位置し、南
側に5号墳丘が位置している。南北5m30cm
位、東西4m75cm位、高さ50cm位を測る不整
円形状の墳丘である。

封土は上からゴミ層、砂礫層(コブシ大か
ら小砂利、ザラザラの砂混じりで、黄色中に
点々とパミス混合)、黒褐色土層(軟らかい)、
黒土層(やや堅い)、ローム層、黒土層混合(堅

- 1 ゴミ層
- 2 黒褐色土 2よりやや褐色を呈す
- 3 褐色土(堅い)
- 4 黒土
- 5 黒土よりやや赤味を呈し堅い
- 6 黒土混りのソフトローム
- 7 ローム



第3図 1号墳丘底部実測図



第4図 2号墳丘及び地層実測図

い)の層位で積み上げられていた。基盤はローム層であった。層序の関係で、第II層に砂礫層が盛り上げられているのは他の墳丘とは異質である。

周溝の存在は全くなかった。同様に遺物の出土も全く無く、従って、本墳丘の築造年代は明らかとはなりにくい。周辺との関連あるいは他の墳丘と比較して決めるべきであろう。

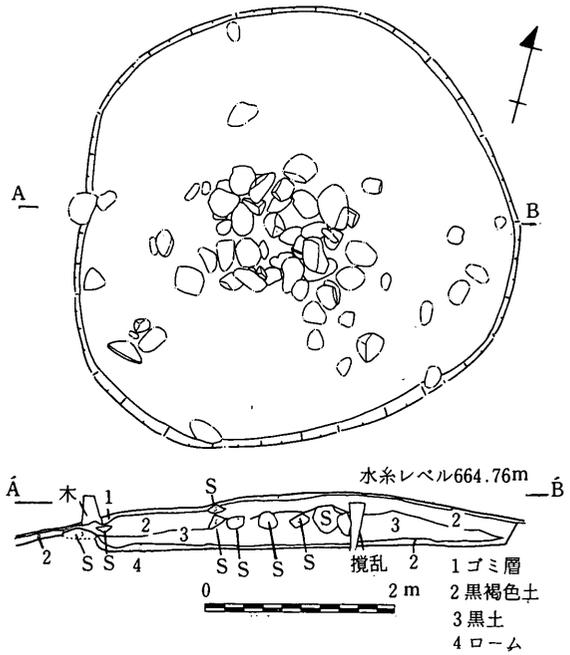
(7) 7号墳丘 (第9図、図版5)

本墳丘は北側に2号墳丘・3号墳丘・4号墳丘が、西側に10号墳丘、南側に7号墳・8号墳丘が近接して存在していた。南北6m80cm位、東西6m80cm位、高さ70cm位の規模を有し、ほぼ円形状を呈していた。墳丘を取り囲くように、ほぼ同心円状に周溝が幅30cm～50cm位で回っていた。これらの周溝の断面はトライ状を呈していた。

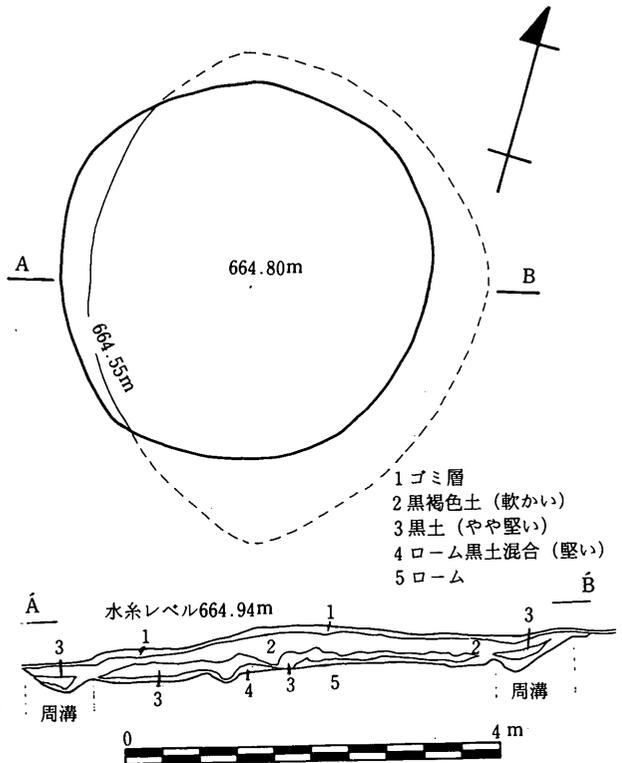
封土は上からゴミ層、黒褐色土層、黒土層(やや堅い粘質)、褐色土(黒土混じりのローム)で積み上げられてあった。封土内からの遺物は何も無かった。

封土を全て取り除いてみると、7号墳丘のほぼ中央部付近と思われる所に木炭を含む焼土の堆積が発見され、精査していくと平面プランが判別できた。南北1m65cm位、東西1m5cm位の規模で、若干、東壁中央部付近、西壁中央部付近は凹凸があるが、全般的にひょうたん形を呈している。深さは20cm位を測る落ち込みになった。

この落ち込み内の状況を記すと次のようになる。床面に天竜川の河原石をほぼ平坦状に敷きつめ、その上に南北に長く列状に炭化物が検出され、さらに焼土はプランの壁外、しかも掘り込みレベル面にプランに沿って赤々と堆積していた。

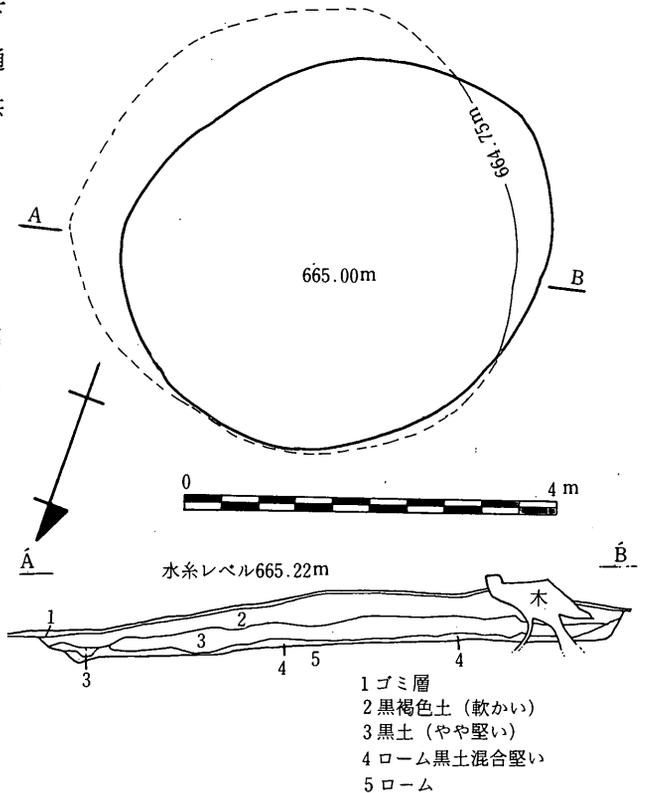


第5図 3号墳丘及び地層実測図



第6図 4号墳丘及び地層実測図

さらに精査を重ねていくと、木炭質の下から古銭6枚（内訳開元通宝2枚、皇宋通宝1枚、熙寧元宝1枚、祥符元宝1枚、洪武通宝1枚）、角釘2点、人骨少量が検出された。以上の点を踏まえて考えてみるとこの落ち込みは火葬墓の形態を有していると考えついた。これをさらに遺物から類推してみよう。上面に検出された炭化物は火葬時に用いた木材であろう。炭化物の下層の石はよく焼けるように敷き詰めた一工夫であろう。角釘は木棺を留めたものでであろう。周辺の焼土は灰が飛び散った事実であろう。6枚の古銭は六文銭の風習であろう。以上のことからしてこの落ち込みは戦国期頃の火葬墓と判明した。これを7号墳丘と命名した。



第7図 5号墳丘及び地層実測図

7号墳丘をとり除いて南西の一角に南北1m10cm位、東西1m30cm位の円形状の黒い落ち込みが発見された。この一角は墳丘が攪乱状態気味で、後世に掘られた可能性が強いように思われた。掘り進めていくと、70cm位下層に女性の頭骨が検出された。頭骨の近くには青銅製の剃刀、髪刺が出土した。さらに古銭6枚が紐のようなものでたばねた状態で発見され、これを7号墳丘一2と命名した。出土した遺物より江戸時代後期の土葬墓と判明した。

(8) 8号墳丘 (第10図・図版6)

本墳丘は北側に7号墳丘、西側に9号墳丘が接近してある。南北4m80cm位、東西4m85cm位、高さ70cm位を測る円形状の墳丘である。周溝は存在しなかった。また、封土内からの出土遺物は何もなかった。封土を取り除いて基盤のローム層面まで落とすと3カ所に黒い落ち込みが発見された。中央部付近のを8号墳の1、南西のを8号墳一2、8号墳一3と命名した。

8号墳一1は南北1m30cm位、東西1m位、深さ1mを測り、南西に段を有する円形状プランを呈する。底面に密着して3体からなる人骨が検出された。1体は男性(40才位で背がやや低目、頑強で骨太である。歯並び良好であった。) 1体は女性(35才位であり、やや面長、虫歯ナシ)、1体は7~8才位の子供であった。3体の人骨に密着して6枚の寛永通宝、キセルが出土した。

8号墳一2は南北1m20cm位、東西1m20cm位、深さ55cm位を測り、長楕円形状を呈する。壁面及び底面に河原石を置いてあった。寛永通宝6枚、人骨が出土している。

8号墳一3は南北75cm位、東西80cm位、深さ60cm位を測り、平面円形状プランを呈する。男性の頭骨が出土。以上の点からみて、8号墳一1・8号墳一2・8号墳一3は江戸時代後半の土盛状土葬墳墓群と判明した。

(9) 9号墳丘 (第11図 図版7)

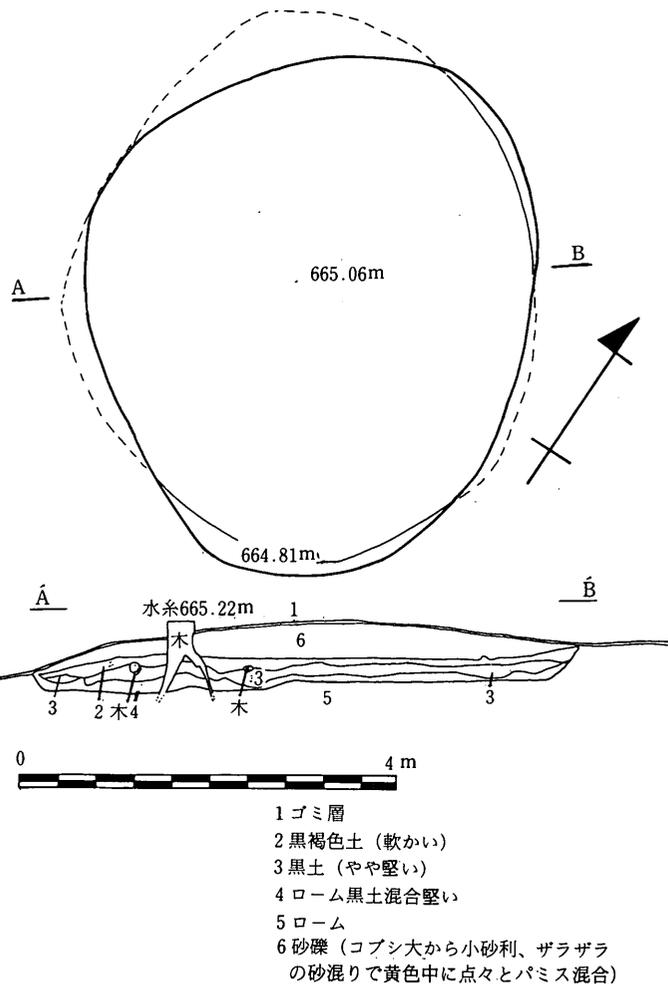
本墳丘は東に8号墳丘、北に10号墳丘にはさまれた所に位置している。南北4m50cm位、東西4m30cm位、高さ50cm位を測る円形状の墳丘である。

封土は軟弱であった。遺物の出土は何も無く、時期決定に当惑する次第であるが、周辺との関係から考えてみなければならぬ。

(10) 10号墳丘 (第12図 図版7)

本墳丘は南に9号墳丘、北に1号墳丘、2号墳丘にはさまれている。南北5m45cm位、東西5m50cm位、高さ65cm位を測る円形状の墳丘である。

封土層面に河原石が、しかも中心部付近に存在した。石の組み方及び配列は漠然としており、何の為に並べたかは判然としない。周囲にわずかに周溝が残存していた。遺物の出土は何も無く、時期決定には問題点が多くあると思われる。



第8図 6号墳丘及び地層実測図

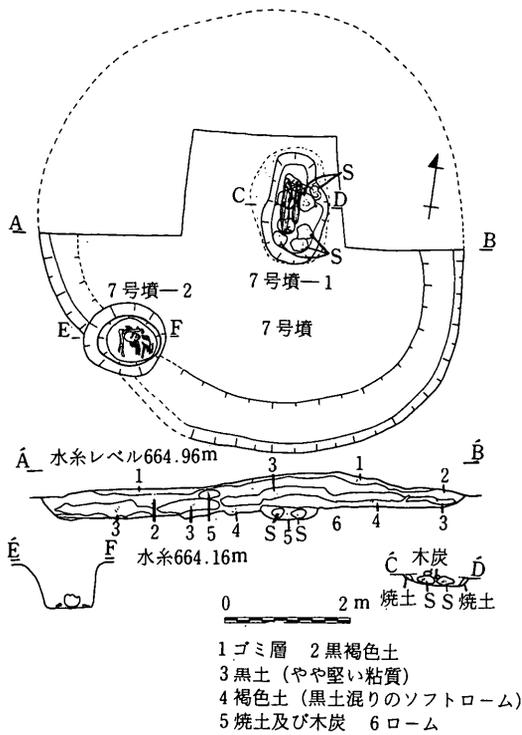
第2節 火葬墓群

(第1図、図版8)

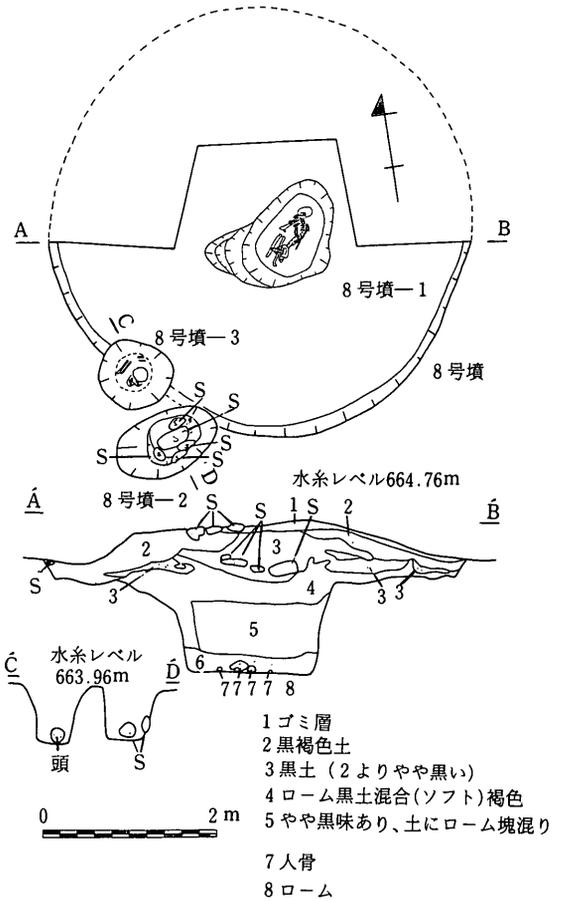
今回の調査で10基の墳丘の周辺に南北20m位、東西30m位にわたって30数基からなる火葬墓群が検出された。これらには量の違いはあるが必ず骨粉がみられた。墳丘の中で7号墳—1は火葬墓とみてよかろう。これらの中で中世か、近世かは出土銭貨より判断しなければならない。銭貨出土墓名と銭貨の名称を記すと次のようになる。

4号墓—不明2枚 5号墳—元豊通宝1枚 7号墳—1—開元通宝2枚 皇宋通宝1枚 熙寧元宝—1枚 祥符元宝—1枚 洪武通宝1枚。20号墓—不明1枚 熙寧元宝1枚 元祐通宝1枚 永樂通宝1枚 24号墓—祥符元宝1枚。30号墓—不明1枚。8号墳—永樂通宝1枚。

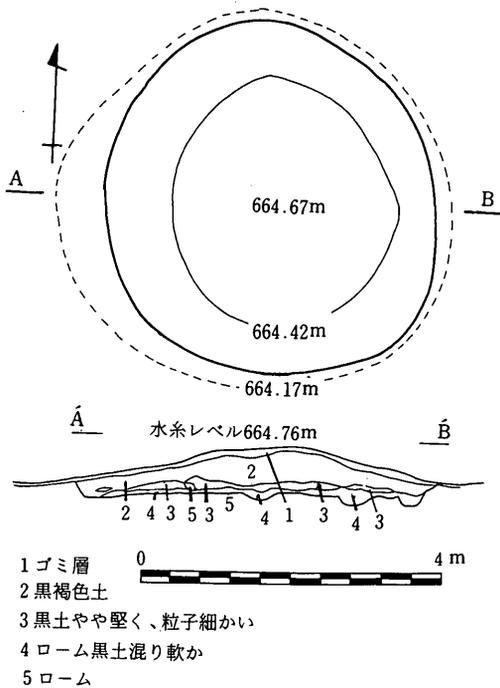
(飯塚 政美)



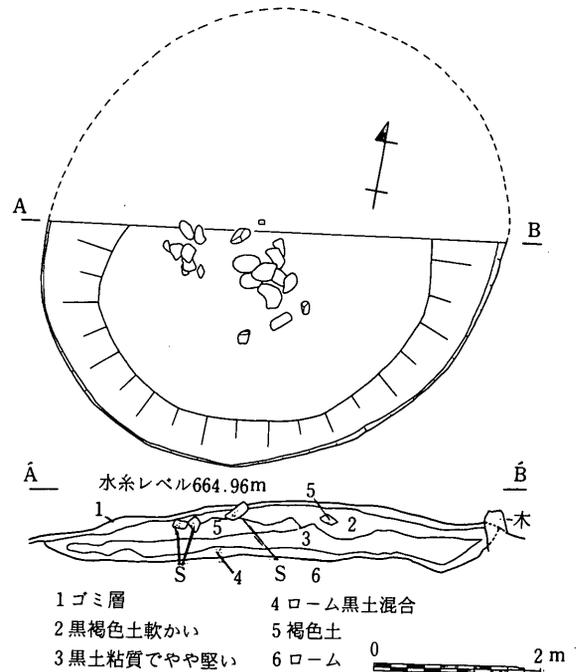
第9図 7号墳・7号墳-1・7号墳-2実測図



第10図 8号墳・8号墳-1・8号墳-2・
8号墳-3実測図



第11図 10号墳丘及び地層実測図



第12図 9号墳丘及び地層実測図

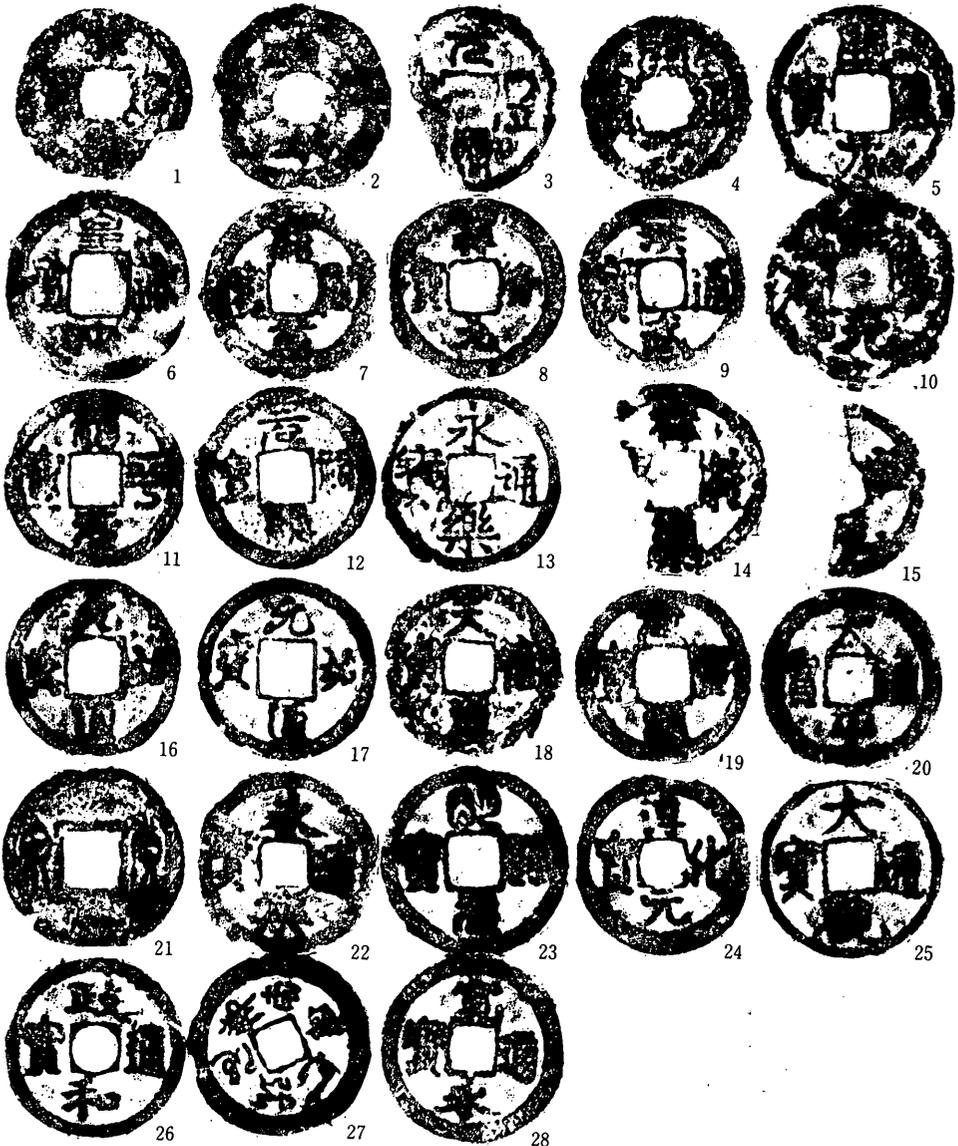
第三章 遺物

第1節 古銭 (第13~14図、図版10)

第13図、第14図に掲載した古銭拓影は火葬墓や土葬墓より出土したものである。出土遺構の内訳を記すと次のようになる。

第13図の(1~2)は4号火葬墓、(3)は5号火葬墓、(4~9)は7号火葬墓、(10~13)は20号火葬墓、(14)は24号火葬墓、(15)は30号火葬墓、(16~21)は1号墳丘土葬墓、(22)は8号火葬墓、(23~

28)は7号墳—1土葬墓。(1~2)は不明、(3)は元豊通宝、(4~5)は開元通宝、(6)は皇宋通宝、(7)は熙寧元宝、(8)は祥符元宝、(9)は洪武通宝、(10)は不明、(11)は熙寧元宝、(12)は元祐通宝、(13)は永樂通宝、(14)は祥符元宝、(15)は不明。(16~17)は元祐通宝、(18)は天禧通宝、(19)は元豊



第13図 古銭拓影 (1:1)

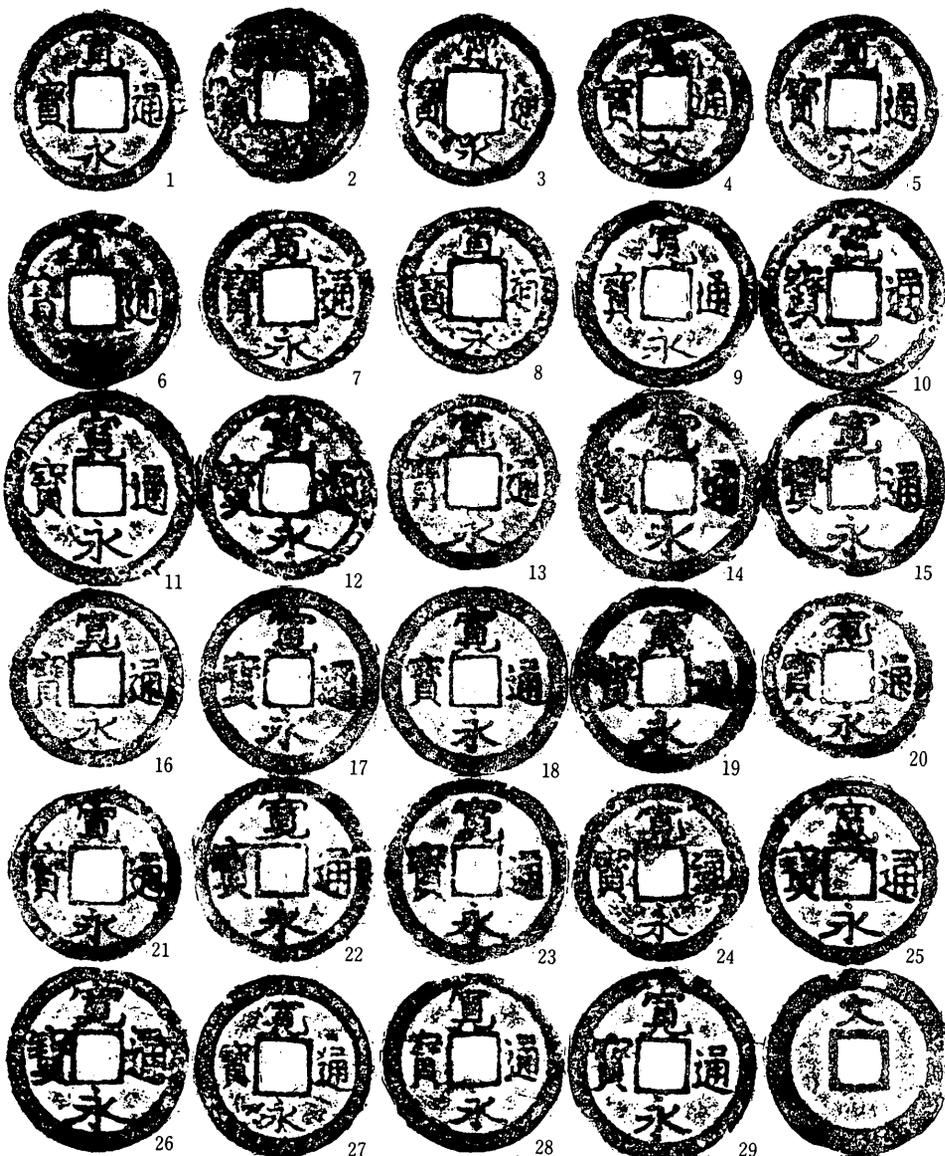
通宝、(20)は太平通宝、(21)は貨泉、(22)は永楽通宝、(23)は熙寧元宝、(24)は淳化元宝、(25)は大観通宝、(26)は政和通宝、(27)は南無阿彌陀仏、(28)は寛永通宝。今回出土した古銭の鑄造年代を記すと次のようになる。元豊通宝—1078年、開元通宝—621年、皇宋通宝—1039年、熙寧元宝—1068年、祥符元宝—1008年、洪武通宝—1368年、元祐通宝—1093年、永楽通宝—1411年、天禧通宝—1017～1021年、太平通宝—976～983年、淳化元宝—991年、大観通宝—1167年、政和通宝—1111年。

詳細に分類してみると、唐銭は開元通宝、北宋銭は元豊通宝、皇宋通宝、熙寧元宝、祥符元宝、元祐通宝、天禧通宝、太平通宝、大観通宝、政和通宝、明銭は洪武通宝、永楽通宝とになる(21)の貨泉は南宋時代によくつくられたといわれている。(27)の南無阿彌陀仏は六文銭の風習が流行

してきて、
葬式用に鑄造したのである。これは江戸中期以降に隆盛してくる。

第14図の(1～29)は全て寛永通宝である。六文銭として供えたものと思われ、この銭貨の使用年代によってその墓の年代決定になりえる。

(1～6)は8号墳—1土葬墓、
(7～12)は8号墳—2土葬墓、
(13～19)



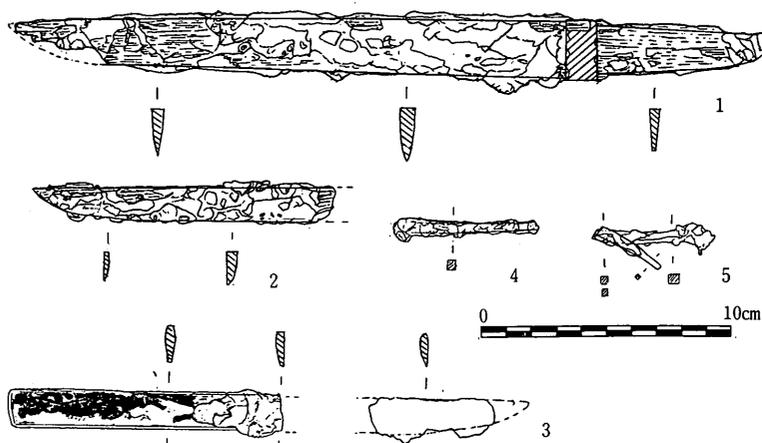
第14図 古銭拓影 (1 : 1)

はイ号火葬墓、(20~23)は1号火葬墓、(24~29)は零号火葬墓からそれぞれ出土している。

第2節 金属製品 (第15図、図版10)

第15図(1~2)は鉄製で1号墳丘の中央部付近最下層より出土。(1)は全長30.5cmの脇差であり、鋒者部分は破損し、刃先は鋭角である。柄の部分にあたる個所に木質部が残存し、残存状態は良好である。(2)は現長12.2cmを測る。鋒者部分の残り良好。刃先は鋭角で、柄にあたる部分は大部分欠損している。大きさからして小柄のように思われる。(1)の上に(2)が重なった状態で出土し、いわばセット的機能を有していると思われる。中世後半の時期の作であろう。

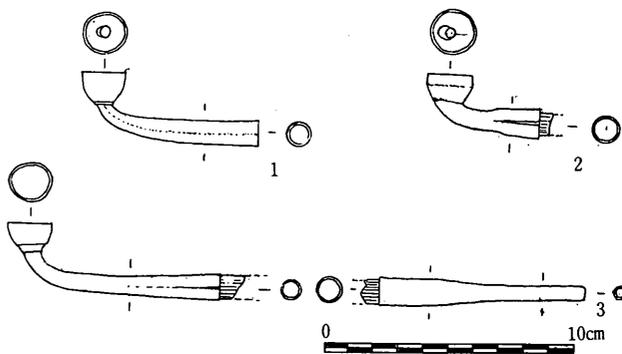
(3)は7号墳—2土葬墓より出土した青銅製の剃刀と思われ、刃先の方は欠損していた。柄の方は龍の彫刻を施し、その上にわずかに金張りをしていた。人骨のすぐ近くから古銭と一緒に出土しており、死者の供物として埋葬したのであろう。古銭の年代からみて江戸後期頃の作と思われる。



第15図 金属製品実測図

(4~5)は7号墳—1火葬墓より出土した鉄製の角釘である。木棺の留めに使用された後、火を受けたためにボロボロの状態であった。この火葬墓から中世の古銭6枚が出土しており、したがってこれらの釘も中世後半のものであろう。

第16図(1~3)は青銅製の煙管である。(1)はイ号より、(2)は1号墓、(3)は8号墳—1より出土。これらはいずれも土葬墓の形態をとっており、江戸時代後半頃と位置づけられる。(1~2)は完型品、(3)は柄の中央部が一部欠損している。長い間土中に埋まっていたので、緑青が見事に吹き出している。

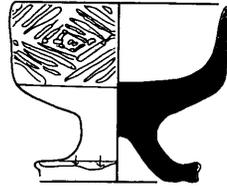


第16図 煙管実測図

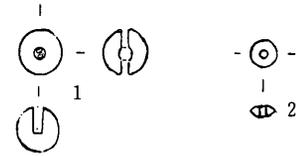
第3節 陶器

(第17図、図版10)

7号墳丘と8号墳丘の境付近に出土した有田焼の仏花器である。口縁径5.9 cm位、高さ4.6 cm位、底径4.3 cm位を測る。口唇部は丸味を呈し、腰を張り、高台付近は大きくの字状に張り出す。



第17図 陶器実測図
(1:1)



第18図 玉類実測図 (1:1)

外面は花柄模様の藍色の呉須で飾っている。死者を埋葬した後、水か何かを供えた供献具の一種であろう。江戸時代後半の作風を有している。

第4節 装身具 (第18図、図版10)

第18図(1)は7号墳一2、(2)は1号墳丘より出土。1は直径1.1 cm位で、球状を呈し、中心部の孔のあけ具合からみてカンザシのように思われる。水晶製で、表面に白い着色塗料を着けてある。人骨のすぐ近くより出土した。一緒に出土した古銭の年代からみて江戸時代後半の作と思われる。

(2)は直径7 mm位の扁平状のガラス玉であり、見事な光沢を放っている。人骨の近くで、古銭と一諸に出土している。古銭の年代からみて、中世後半頃に位置づけられると推測される。

(飯塚 政美)

第IV章 ま と め

宮場間様十三塚遺跡は今回住宅団地造成内に大部分が該当し、十三の墳丘のうち十の墳丘が破壊され、三の墳丘が現状のままで残るようになった。破壊される十の墳丘を調査の都合上、1~10号墳丘と命名した。その配置及び規模については別添の宮場間様十三塚遺跡全体配置図を参考にして下さい。

それによると、10個の墳丘は約1000㎡の面積内に集中的に存在していた。1号、2号、3号、4号、5号の墳丘はほぼ直線状、その線状にほぼ直角状に9号、10号の2つの墳丘が並んでおり、計画的に配列、築造されたと思われ。形態はほぼ円形状を呈し、規模は直径5 m~10 m位、高さは数十 cmから3 m位であった。1号墳丘のように周溝が見事に回っているのも認められた。

墳丘の封土を取り除いてみると3号墳丘、7号墳丘、10号墳丘のように河原石を無雑作に配列してあった。総合的に見て、次のようなことが成り立つと思われる。

1号墳丘の封土の最下層より刀、人骨・古銭の出土があり、遺物の内容・古銭製造年代から見て、戦国期の武将の墓と思われる。

2号墳丘、4号墳丘、5号墳丘、6号墳丘、9号墳丘のそれぞれの実態は単なる土盛りの墳丘であ

るため、また、出土遺物が全くなかったので、何を意味しているかは全く不明である。

7号墳丘の封土を取り除いてみると、墳丘の中央部に黒い方形状の落ち込みが発見され、周辺には多量の木炭、焼土が検出され、さらに中世古銭6枚が検出されたので、これを7号墳丘-1と命名した。以上の事柄からして、この墳丘は戦国期の武将の墓と考えられる。発見された位置からして、火葬をしたのちに、土盛を構築したのではないか。つまり7号墳丘は前述したように戦国期武将の火葬墓であろう。

8号墳丘の封土を取り除いてみると、封土の下に3カ所の落ち込みがみられた。これらは出土遺物より江戸時代後期の土葬墓と判明した。人骨を埋葬したのち、土盛を構築した姿になろう。

火葬墓群は600㎡位の範囲内に30数ヶ所検出され、どの個所にもその出土量はまちまちではあるが人骨が出土した。火葬墓群の中に8カ所、古銭が出土し、古銭製造年代から察して、中世火葬墓と近世火葬墓が混じっている状態であった。

中世墳墓の存する一帯は近くに存在する中世殿島城の墓域的性格を成していたのであろう。ただ、墳丘とか、火葬墓が用いられている点からして、武将級集団の墳墓群の色彩が濃厚と思われる。

近世墳墓の存する場所には墓に関係する小字名の存在も無く、さらに住民の伝承すら全く無く、人骨の出土状態からみて、伝染病が猛威を奮い、多くの住民が死亡した時に集団的に埋葬したのであろう。最初に埋葬する時点で、やたらに所に埋めるわけにはいかない為に、中世墳墓の存する(江戸時代にはこの一帯に中世墳墓の存在を知っていたのであろう)この地を選択して埋葬したのであろう。江戸時代後期と言え、古文書類が相当量現存しているので、それらを精査すれば、前述した事象に出会える期待も多いに持てると思われる。出土人骨の鑑定は信州大学医学部解剖学教室西沢寿晃先生にお願い致しました。新ためて、お礼を申し上げます。 (飯塚 政美)

圖 版



遺構群を西側より眺む



遺構群を東側より眺む



1号墳丘全景



2号墳丘全景



3号墳丘全景



3号墳丘底部



4号墳丘全景



5号墳丘全景



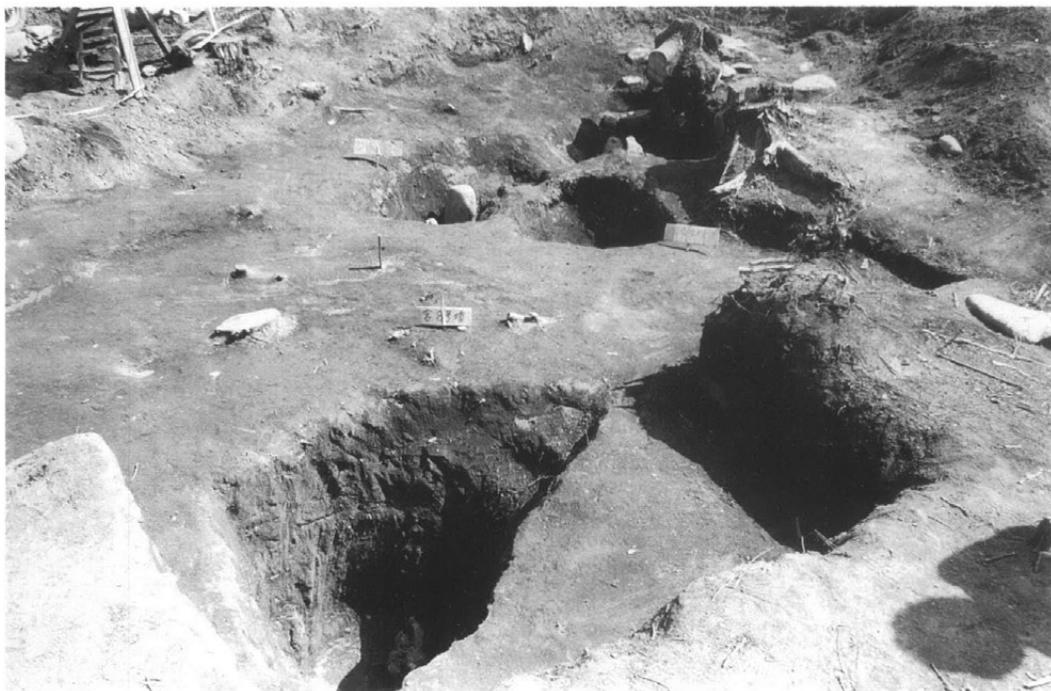
6号墳丘全景



7号墳丘全景



8号墳丘全景



8号墳丘下部 (8号-1・8号-2・8号-3) 全景



9号墳丘全景



10号墳丘全景



1号火葬墓



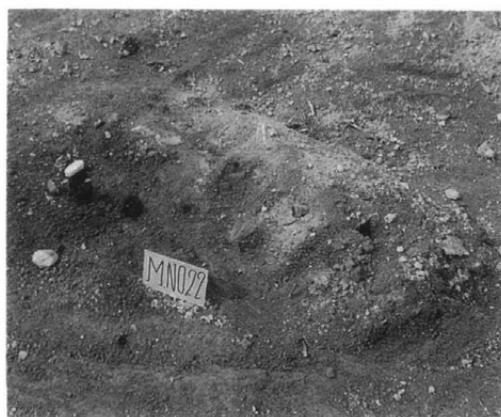
2号火葬墓



18号火葬墓



20号火葬墓



22号火葬墓



23号火葬墓



人骨及び刀・小柄出土状況



古銭出土状況



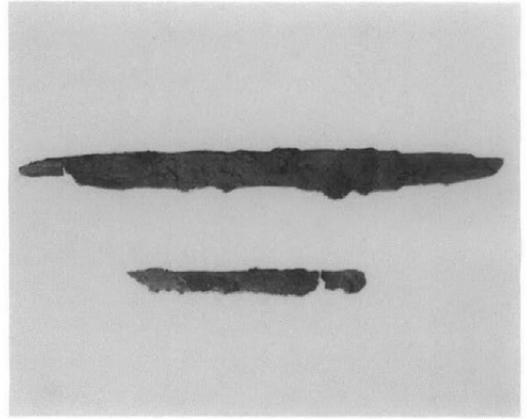
古銭及び煙管出土状況



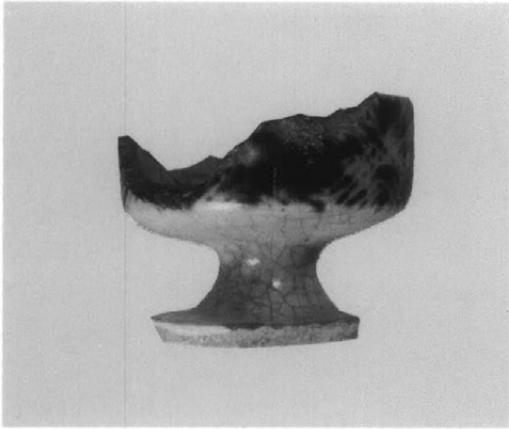
剃刀出土状況



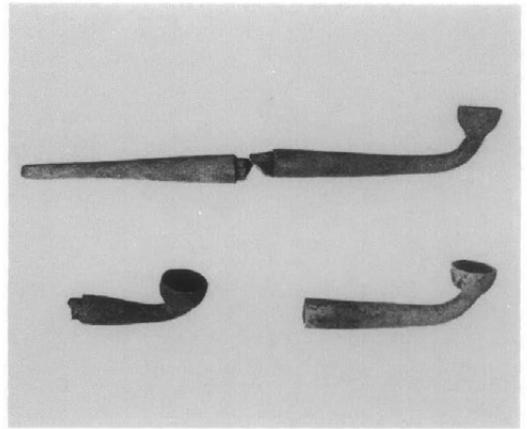
剃 刀



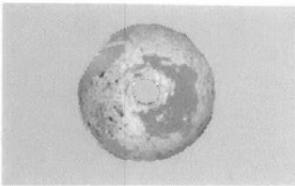
脇差・小柄



陶 器



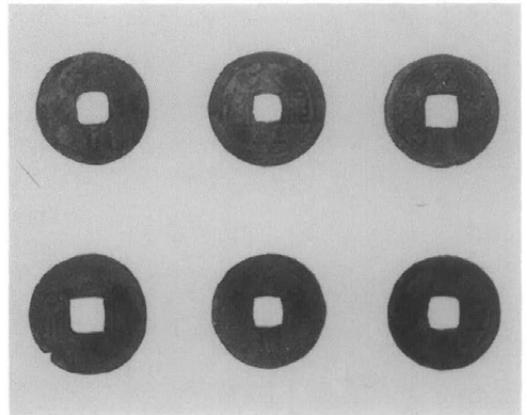
煙 管



髮 刺



玉 類



古 銭



合同慰霊祭



記念撮影

殿島城跡・宮場間様十三塚遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和62年12月19日 印刷

昭和62年12月24日 発行

発行所 伊那市教育委員会内

殿島城跡遺跡発掘調査団

印刷所 ほおずき書籍株式会社
